
決戦世界のタリア

中村十一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

決戦世界のタリア

【Nコード】

N7517Z

【作者名】

中村十一

【あらすじ】

僧兵の少女タリアは社会人ネカマプレイヤー藤崎英臣に操られる冒険者である。自慢の回復魔法と剣技を操り、今宵もゲーム世界で頼れる仲間たちと冒険ゴッコを楽しんでいた。

しかし迷宮深部でモンスターを退け、束の間の休息をとるタリアたちに想像を絶する事態が襲い掛かる。

『私の名はアルテミエル。勇士たちよ、学びの時は終わりました。あなたがたを我が戦場へと導きます。その身体と技をもって、世界の盾となることを』

M M O R P G ≪ D e c i s i v e W a r W o r l d ―― 決戦世界 ―― ≫ にログインしていた70万余のプレイヤーは、突如ゲーム画面に浮かび上がったそのメッセージに不吉な予感を覚える。

果たしてそれは、プレイヤーたちを異世界へと導く危険な招待状だった。メッセージの意味を神の力で無理やり理解させられたプレイヤーたちは次の瞬間、ゲーム世界に酷似した異世界に放り出される。自らがゲーム上で操っていた、キャラクターの姿と能力を引き継いで――

ファンタジーRPG的な世界と冒険を描く物語です。お好きなファンタジーRPGのプレイ場面を思い浮かべていただけたら幸いです。

1. ゲーマーの平穏な日常

信号待ちの社用車の窓越し、ふと見上げた街路樹はその葉を暖色に染めている。寒風に曝された葉は葉脈に沿って朽ち綻び、どこか幾何学的な模様のようにも見えた。

（テクスチャが粗いなあ、なんてね）

その様に3Dコンピュータグラフィックの特徴めいたものを感じて、藤崎英臣は一人ごちた。

ダッシュボードに貼り付けられたドリンクホルダーから飲みかけの缶コーヒーを取ろうと手を伸ばした矢先に信号機は青へ変わる。藤崎はいまだマニュアルシフトの商用バンを発進させるため一旦コーヒーを諦めた。

公共交通機関が未発達な為にマイカー通勤が一般的な、ごく普通の地方都市で会社員を務める藤崎の帰宅時刻は夜の九時頃になるのが常である。この夜も何気なく目をやった目覚まし時計のLEDは21・14を表示していた。

母はこの時間になるとすでに就寝前のテレビタイム、父は晩酌のアルコールがほどよく回って夢の中であり、帰宅後の藤崎と顔を合わせるのはまれだ。

下に弟と妹が一人ずつの五人家族だが、今は二人とも遠隔地で就学しており実家には居ない。帰ってくるのは普通に盆と正月くらいである。

平日の部屋着即ち寝巻きに着替え、実家住まいの有難さも特に自覚せず台所に用意された夕飯をレンジでチンして？きこむ。

食後は食器の後始末をして風呂に入る。風呂の後は350mlの缶ビールを片手に自室へ戻り、ハーフタワーPCの電源を投入する。メールのチェックや各種情報サイトを斜め読み、それが済んだらここ数年ハマっているネットゲームに興じる。これが藤崎の日常だ

った。

《Decisive War World——決戦世界——》は世界数カ国で稼動テストが行われているファンタジー世界を題材としたMMORPGだ。プレイヤーは光と闇の決戦場となる世界へ女神によって導かれた勇士として降り立つ、というのが導入の物語となるが、やることと言えば従来のコンピュータRPGとさほどかわり映えがしない。

しかし、いまだ稼動テスト期間であるにも関わらず圧倒的ボリュームで広がりとお興行きを見せるゲーム世界が参加したプレイヤーを魅了した。加えてあらゆるネットゲームで絶えることなく繰り返されてきた不正行為に対しての執拗なまでの処置が賞賛を呼んでそのプレイ人口は現在も着実に増えている。

登録者数は世界で200万人を突破し、日本国内だけでも15万人とも言われる。ボリュームタイムを対象にした仮想の全世界同時接続者数は驚異の70万人とも言われていた。

藤崎もこの《Decisive War World》の稼動テストにその初日から参加してプレイ期間は二年あまりになる。稼動初日は混雑と混乱を極めたが数少ない『事前試験枠』の抽選に当選していたおかげで仕事帰りでもスムーズに遊ぶことができた。

いつまで稼動テストが続くのか。運営側からはいまだ有料化の告知はされず現在に至っている。これまで二年と数ヶ月の間楽しませてもらったこともあり藤崎個人としては対価を支払うことに否はない。

そんなことをつらつらと考えながらデスクトップのアイコンをクリックしてゲームを起動、ユーザー認証手続きを経てログインを行う。やがてワイド画面LCDにゲーム内での藤崎の分身となるキャラクターが表示される。

まずは真っ白い大きな帽子が目を惹く。そこからふんわりとの

びた明るめの栗色の髪は腰までとどいていた。優しそうな表情を湛えた目元に澄んだ水色の瞳。親しみやすい笑みをかたち作るのは桜色の艶やかな唇に円やかな曲線を描く可憐な頬。ゆったりとした白を基調とする服や無骨な部分鎧に包まれた体軀はこぢんまりといった形容がピッタリとくる。

《LV・81 人間／僧兵 タリア》

3Dコンピュータグラフィックの作り出す少女然としたキャラクターの頭上には実にゲーム的な文字列が表示されていた。

藤崎はこのゲームにおいて男性プレイヤーによる女性キャラクター操作、所謂ネカマプレイいわゆるに興じている。それまでのゲームでは前線に立ち直接敵と刃を交える巨漢の戦士といったキャラクターを好んでプレイしていたのだが、ふとしたキッカケで癒し系の女の子もいいんじゃない？ という嗜好の転換があった。『貴方を癒します！』というノリで典型的な支援役キャラクターを目指そうとしたのである。

そうして並々ならぬ熱意でもって容姿を作りこまれ、藤崎ご自慢の自称なごみ系美少女《タリア》は生まれた。

ゲーム開始当初は支援役プレイ一本槍で楽しんでいた藤崎だった。なにぶん初体験の新鮮さも手伝い、通りすがりに見掛ける傷ついたプレイヤーを回復することやピンチのプレイヤーに支援魔法を掛けるといった、わかり易いカタチで手助けができることも嬉しかった。ちよっとしたナイチンゲール・シンドローンを疑似体験した感じである。

そうやって助けた見知らぬ誰かにお礼を言われるのも嬉しく、その縁から友誼を得ることも度々あった。

しかしゲームを続けるうちに中のヒト藤崎の根源的なプレイ嗜好が徐々に露呈してしまう。『チャンバラ大好き！』である。

藤崎は少年時代からの小器用さと勝負勘をこのゲームでも発揮し

て瞬く間に武器戦闘スキルに磨きを掛けた。

こうして作成当初は《僧侶》だったタリアの職業も、現在では《僧兵》などという少々物騒なモノへと変わっていた。純粋な支援回復系からは思いのほか逸脱してしまったと言える。

そんな変化を遂げたが容姿だけは今も変わらず可憐なタリアにカーソルを合わせると藤崎はゲームの開始をクリックする。画面のタリアがくるとターンを決めて両手にそれぞれ構えた盾と長剣を誇示しつつ雄叫びを上げる。その声はずいぶんと可愛らしく響いた。

わずかなブラックアウトのあとホワイトアウトへ反転し、LCD越しに眺める世界は一瞬にしてその姿を現わす。

タリアの眼前に広がるのは一面の紅葉。ゲーム内時間は昼頃か。見上げる空は青く高く。目の覚めるような晴天。

色づいた落葉樹の葉を何となしに眺めると昼間見た現実の枯葉とつい比べてしまう。朽ちかけた葉の傷みまでは流石に表現していない仮想世界の紅葉は精細でありながらも作り物としての姿を厳然とうかがわせる。

紅葉が美しいこの山道の終わりにはアルタイゼン廃鉱と呼ばれるダンジョン（怪物の棲まう危険な構造物の総称）の入り口がある。

昨夜は単独で廃鉱内の探索へ赴こうとしたところで睡魔に負けた。そんなワケで準備は万全、このまま探索しようと決めてタリアは歩を進めた。

タリアの鉄靴が踏みしめられた地面を蹴る音がリズムカルに響く。やがて紅葉の並木が途切れると荒れた山肌が見えてきた。その斜面にアルタイゼン廃鉱の入り口がぼっかりと口を開け不気味な存在感を放っている。それをさして気にもせずタリアは廃鉱内へと踏み込んでいった。

《導く灯り》という照明用の魔法アイテムがある。使うと暗がりでも使用者の周囲およそ50mの視程を確保してくれる。使い切り

だが現実時間で半日ほどの効果時間を持つので不便さはない。

背囊の内容物を視覚化したフレーム上にアイテムを表すアイコンがズラリと並んでいる。その中から《導く灯り》のアイコンを選んでクリックすると効果が発揮されタリアの周囲がほの明るく照らされた。その灯りを頼りに朽ちかけたトロッコの軌道に沿って坑道の奥へ向かう。

しばらく進むと坑道の向かう先から金属同士が擦れあう音が響いてきた。争うような激しさは感じられないがゲーム内にあってそのような音を立てるのはプレイヤーの敵たるモンスターだけである。キャラクターの身に着けた武器や防具は一定の戦闘行為に及ばなければ金属的な効果音などいちいち立てたりはしない。

タリアは〈身体能力強化〉、〈武器強化〉、〈防具強化〉といった僧侶が得意とする極めてゲーム的な定番の支援魔法を自らに施したあと駆け出す。

坑道の先はちょっとした広間になっていた。朽ちた道具が散乱する広間の、坑道から眺めた死角にボロボロな金属鎧を着込んだ骸骨^{スケルトン}のモンスターが四体ほど群れている。

既に何度か探索したダンジョンである。その場にモンスターが配置されているパターンには憶えもあつて驚きもなく骸骨戦士の集団に奇襲を掛ける。

突撃の勢いを利用して一体の骸骨戦士に長剣を振り下ろす。打撃戦闘スキル〈強打〉が青白い閃光とともに骸骨戦士を切り裂いた。斬りつけられた骸骨戦士がその衝撃に怯む。

別の一体がタリアの隙を衝こうと短槍を突き出してくるがそれは彼女に誘導された動きだった。タリアは繰り出された穂先を盾で難なく阻むとそのままカウンター攻撃へとつなげる。

先の〈強打〉と攻撃失敗によってそれぞれ体勢を崩した二体の骸骨戦士を、防御に用いた盾でまとめて打ちのめす。既に〈強打〉によって深刻なダメージを被っていた骸骨戦士はそれで斃れる。まずは一体撃破。

続いてカウンター攻撃でいまだ体勢を崩しているもう一体に攻勢を掛ける。長剣による連撃を浴びせつつ、残る骸骨戦士たちへの盾にするように回り込みそのまま止めを刺す。これで二体目。

足元に散らばる、かつて仲間だった残骸を避けつつ残り二体の骸骨戦士が短槍を構えてにじりよる。

《Decisive War World》のモンスターはそれなりに凝った動きを見せてくれる。戦闘ルーチンが自己完結しておらず、プレイヤーの挙動に応じてモンスターの挙動も変化するため所謂対戦格闘ゲームのコンピュータ戦に近いやり取りが楽しめる。

モンスターの反応は何段階かに区切られて設定されており、プレイヤーが感じる手応えはモンスターのレベルや戦闘に対するセンスの有無で変わってくる。

骸骨戦士の戦闘ルーチンは武装しているだけあって少々手強い。二体は安易に先制せず、タリアに短槍の穂先を向けたまま挟み討ちを狙って左右に分かれ始める。

奇襲により四体のうち半数を片づけた。残る二体程度なら範囲打撃戦闘スキルで先制の後に各個撃破しようと決め、タリアは間合いを測った。

目測をつけて範囲打撃戦闘スキル〈薙ぎ払い〉を一呼吸で繰り出す。距離を離しつつあった二体の骸骨戦士に長剣の強烈な横斬りが襲い掛かる。

長剣はあやまたず二体の骸骨戦士を捉えるがそれだけでは斃しきれない。しかし単体への威力的には〈強打〉には劣るものの、強力な打撃戦闘スキルである〈薙ぎ払い〉の衝撃により骸骨戦士の体勢は崩れ、長剣を振り切ったタリアの隙を衝くことはできなかった。

タリアは〈薙ぎ払い〉の隙から立ち直ると、一体の間合いから離れるように距離をとりもう一体の骸骨戦士に迫る。骸骨戦士の体勢はさすがに回復しているがタリアがそこへ誘うように長剣の切っ先を向けると応えるかのように突きを放ってきた。

読んだ通りの攻撃にタイミングを合せて盾防御。刺突を阻まれ隙

を見せた骸骨戦士にそのままカウンター攻撃、盾で強かに殴りつける。骸骨戦士の体勢は崩れタリアは好機を見逃さず長剣を振るう。

地面にバラバラになった骸骨戦士の残骸が四散し、残る敵は一体のみ。彼我の距離とタリアの手際の良さに手が出せなかったのか、最後の骸骨戦士は短槍を構えたまま堅持している。

一対一ならアルタイゼン廃鉱上層の骸骨戦士はタリアにとって難敵ではない。〈強打〉による先制で強引に骸骨戦士の守勢を崩し続く斬撃で圧倒する。最後の骸骨戦士も瞬く間に破壊され、乾いた音を立て地面に転がった。

モンスターを倒した後はファンタジーRPGで馴染みのお楽しみタイムである。骸骨戦士の残骸に改めてフォーカスを当てると軽快な効果音と共に戦利品群を視覚化したダイアログが表示される。

残念ながら今回は特筆するようなお宝は見当たらなかった。四体の分の作業を終えるとモンスターの残骸が世界からじんわりと消えていく。

更に坑道の奥へと進もうとするタリアを呼び鈴のような効果音が引き止めた。画面端にチャット用のテキストフレームが表示される。どうやらゲーム内の友人から個別チャットの回線が開いたようだ。

『リアたん、ばんわー。昨夜の続きに一人で東廃鉱？』

タリアをリアたんと呼び、親しげな調子で夜の挨拶を寄越してきたのは《Decisive War World》のプレイ初期に知り合った友人クララだった。クララは知り合った当初から今も変わらない純近接戦闘職プレイヤーで、現在でもタイミングが合えば行動を共にする友人の一人だ。

東廃鉱と言うのはゲーム内で使われるアルタイゼン廃鉱の俗称である。日本国内サービスで提供されるゲームの舞台《ラフォニス島》、そのゲームマップの最東端に位置するためこう呼ばれる。

『クララさん、こんばんは。ハイ、さっきログインして今一戦終わったところですよ』

モンスターが再出現しないうちにそれなりに安全地帯と言える軌道付近まで引き返しタリアは努めて丁寧な語調で返信した。

『ヒマなんで一緒にいい？東魔鉱の深いトコいこー』

思わぬ提案であったがアルタイゼン魔鉱はさほど困難な要素のない、単純に階層ごとでモンスターの強さが変わる程度のダンジョンである。入念な下準備も必要ないのでタリアはクララの提案を受け入れることにした。

『了解です。それじゃ一旦魔鉱の入り口に出てお待ちしますね』

丁寧で人当たりの良い対応。それが癒し系美少女《タリア》をネカマプレイするにあたっての藤崎のポリシーだった。

『ありがとー。ところでサっちゃんとボルト、ジャックさんも一緒です』

クララの返事に今夜のプレイは午前様になりそうだなとタリア――藤崎は微笑んだ。

藤崎がゲーム画面を眺めつつビルをチビチビやりながら待つこと数分。馴染みのプレイヤーキャラクター達がタリアの待つアルタイゼン魔鉱の入り口に集まった。いずれもこの二年あまりのプレイで知り合った友人たちだ。

獣人族の剣士クララ。背中に担いだ大剣とほっそりとした猫型獣人族の体軀はオーソドックスなギャップ萌えを体現していると人気の組み合わせである。

ピンと立った黒いネコミミと緋色のネコ目に愛嬌がある活発系少女で、ネコミミに合わせた様な黒髪はショートボブ、毛先は濡れた様なウェーブを描いている。細い身体には大変豊かな母性の象徴が備えられており実に潔いキャラクターメイクと言えた。

こんなことから藤崎はクララの中の人を自分と同じネカマだと踏んでいる。チャットに垣間見える口調など、藤崎とは嗜好が大きい異なるようではあるが。

クララにサっちゃんと呼ばれていたエルフ族少女の魔術士サーラ。

顔立ち凛々しく、エメラルド色の瞳も実に真面目そうな表情を醸し出しているが柔らかな頬の線と微笑むような口元が雰囲気をやわらげている。身体の線が出ないような野暮ったいローブを着込んでいるが彼女には妙に似合っていた。

藤崎はサーラを見るたびなんとなく赤毛のアンという単語を思い出す。いかにも魔法使いといった趣きの三角帽から、赤毛を三つ編みにして垂らすセンスは所謂萌えオタと一線を画しているように藤崎は感じる。妹経由で少女マンガを楽しんでいた時期もある藤崎はソレをネタにしてサーラと盛り上がったこともあった。

ボルトはエルフ族の青年で狩人だ。弓術スキル、罠の取り扱いスキル、短刀による接近戦スキルを無節操に上げていたらいつのまにか弓兵から変わっていたとは本人の弁である。リアル酒豪であるらしくよく飲酒プレイを口にするが手元を狂わせた事がない。

アッシュブロンドを短髪にまとめた、碧眼の目元も涼しい野性味溢れる造作のイケメンであるが狩りが大好きというバトルマニアな反面、友人とのチャットを楽しみつつ釣りスキルで時間を潰すという枯れたところもある。

クララに『さん』付けで呼ばれていたジャックは全身鎧で身を固めた壮年の人間族戦士だ。短く刈り込まれた黒髪と整えられた口ヒゲがシブさを醸し出している。彼もまたタリアとはレベルの低い頃からの友人である。

灰色の瞳が厳めしい歴戦の兵つわものといった風のジャックが貧相な革鎧を身に纏い、粗末な剣でフワモコな毛並みの野兎に斬りつけるというシュールな眺めはなかなか記憶から色あせない。その横でそこらの村人に毛が生えたような服装のタリアがみすぼらしい木の棒を掲げて回復魔法を唱えていたのだがそれもまた良い思い出。年々高精細化するCG技術はたまに意図せずそんな面白みを見せてくれる。

当時ジャックは「新しいゲーム始めるたびに思うんだけど老け顔で駆け出るのは微妙」と冗談ながらによく零していた。ジャックは外見が好きなように変更できるRPGなどをプレイする際、ほ

ば中年男性に設定しているという。そしてその外見を裏切らず言動も社会人として見習いたいと思えるほど『大人』なプレイヤーで、タリアは密かに彼を敬っている。

「こんばんは。今夜はよろしく願いします」

タリアの挨拶に仲間達もそれぞれ返事を返す。今夜は集まる予定だったのかと訊ねるタリアにサーラが答えた。

「エルクーンの街で週末のフリマイベントやってるんです。みんな何となく冷やかにきてたみたいで。気がついたらだべってました」掘り出し物が結構あったよと、ボルトが見憶えのない長弓を構えてみせる。各々装備を新調したらしく、そう言われてみれば皆が見慣れない武器や防具を身に着けている。

羨ましくなんてないんですからね！というタリアの言葉にツンデレ発言いただきましたーとクララが楽しそうに感情表現操作で笑う。彼女はこういった芸が細かい。

「さて。この五人パーティーなら七層辺りまで降りてみようか」

ジャックの提案に皆が賛成する。タリアは仲間たちに支援魔法を掛けつつ自分の使った《導く灯り》がまだまだ有効であることを伝えた。了解と返してパーティーでは前衛となるジャックとクララが廃鉱の入り口へと先んじる。タリアは損害担当の役目も負う前衛二人の回復を務めるため中衛として、遠距離攻撃を行うボルトとサーラは後衛としてそれに続いた。

アルタイゼン廃鉱第一層の坑道を難なく突き進み、一行は廃鉱を上下に貫く巨大な吹き抜けのフロアに辿り着いた。断崖絶壁と見紛う吹き抜けの壁面には数基の無骨な造りのエレベーターが備えられており、乗り場付近は照明に照らされている。

「丁度この層に止まってるのが一基あるね」

目ざとく見つけたボルトに倣い一行は進む。全員がエレベーターに乗り込むとクララが嬉々として操作盤に手を伸ばす。

「それでは七層へポチつとな♪」

エレベーターが物々しい音を立てて吹き抜けの暗闇へと下降し始めた。慣れていないとまるで奈落の底へと吸い込まれるような酩酊感を覚える眺めも、五人には既に馴染みのものだ。

吹き抜けに張り出した各層のテラスでモンスターと交戦する他のプレイヤーを見送りつつ七層を目指す。

「何度乗ってもこのエレベーターはワクワクするにゃー。他の子たちが戦ってるのを見たりするとこっちもやったるでーって感じになるしねー」

エレベーターの上でダンスの感情表現操作で落ち着きなく動き続けるクララの言葉にボルトも周囲を見渡しながら賛同した。

「他のプレイヤーの戦いを俯瞰で見ることなんてそうそうないしな。確かに見物だ」

やがてエレベーターは第七層に到着した。全員が降りても動き出そうとしない。今はさほどエレベーターの利用者がいないのだろう。「ここからは真面目に行こう。各自油断しないように」

ジャックの言葉に全員が肯く。七層のテラスにも既にモンスターの姿が認められた。一層で見かけた骸骨戦士を四体ほど従えて大型四足獣の骸骨に跨った異形の騎士が30mほど先を徘徊している。

《ダークライダー》と呼ばれる強力な不死系モンスターだ。レベル80ほどの平均的な技量を持つプレイヤーキャラクターが六人パーティーで挑んでかなりの手応えを覚える相手である。従っている骸骨戦士も見掛けは同じでも一層のそれとはモノが違う。

「《騎士様》の注意は私が引いておく。その隙に先ずは《兵士》を片づけてくれ」

配下を従えた強力なモンスターを相手どる場合のいつもの戦術ではあるがジャックは一応の確認を取る。全員が了解の返事を返すのを待って武装をクロスボウへと切り替える。

ジャックはクロスボウを構えると合図と共に《ダークライダー》めがけて引き金を引いた。低レベルのモンスターならばその一撃で

倒すこともできる鋼鉄の矢が《ダークライダー》に命中するも注意を引く程度に止まる。

《ダークライダー》はジャックに向き直ると巨大な長剣の切先で彼を指し示した。骸骨戦士たちが短槍の穂先を揃えて足音高く向かってくる。

タリアたちは幾度も交戦の機会を経て彼我の距離が一定以上離れて戦闘が始まった場合、《ダークライダー》は骸骨戦士を先行させてくることを学んでいた。今回も目論見通り《ダークライダー》と骸骨戦士たちの進撃タイミングをずらすことに成功した。

クララが大剣を引っさげてパーティーの中から飛び出す。狙いは先行してくる骸骨戦士の集団。タリアはクララの背を見送りつつ《障壁》の魔法を施した。これは幾らかのダメージを肩代わりしてくれる、所謂バリアとなつて働く支援魔法だ。

クララは自分を包む《障壁》の効果を画面上のアイコンとCGエフェクトで確認しつつ骸骨戦士の横列に突っ込む。一斉に繰り出された四本の穂先が、自身の周囲で《障壁》と火花を散らすさまに怖^お気^じもせず長大な得物を振り回した。

クララののびやかな肢体がうねるとその胸部に鎮座する二つの大質量も胸甲——俗にビキニアーマーなどと呼ばれる——の締めつけをモノともせず盛大に跳ねる。

大剣が唸り強烈な横薙ぎが四体の骸骨戦士をまとめて捉えた。斬撃によるめく骸骨戦士たちは標的をジャックからクララへと切り替える。

骸骨戦士の注意がクララに逸れたことを確認したジャックはその隙を衝いて《ダークライダー》へ向かう。先に一撃を食らわせてきたジャックに戦意を向けたまま《ダークライダー》も迎え撃つ構えた。
だ。

ジャックは駆け寄りながら得物を方形盾と戦鎚に持ち替えた。《ダークライダー》目掛けて勢いよく戦鎚を叩きつける。しかしその攻撃は瞬時に掲げられた盾によって阻まれ、両者の激突は盛大に火

花を散らす。こうして死闘の火蓋が切って落とされた。

物騒な風切り音を立ててクララの大剣が旋回する。大剣はその長大な刃渡りで以ってあらゆる斬撃が広い攻撃範囲を持つ。クララは敵集団に強力な一撃を叩き込むとアクロバティックな跳躍を織りまぜ反撃を回避、そこを追いつがる骸骨戦士にはボルトが放った矢が襲い掛かる。

的中の衝撃で骸骨戦士が怯んだところにサーラの繰り出したスイカ大の火球が着弾して爆発。敵の刃が届かない距離まで逃げおそれたクララが再び斬り込み、炎に包まれた骸骨戦士に〈強打〉を浴びせてとどめを刺す。骸骨戦士たちとの戦闘は優位に進んでいる。タリアは《ダークライダー》とジャックの戦いへ注意を向けた。

タリアの盾より大きな方形盾を掲げたジャックは強敵をよく抑えているがあえて痛撃以外には防御を解いて反撃しているため度々かすり傷を負っている。タリアはジャックに持続回復魔法〈再生〉を施しつつ再び骸骨戦士に意識を戻す。

骸骨戦士二体相手に攻撃と牽制を繰り返すクララの側方を衝こうと、残る一体が大胆に踏み込んでくる。ボルトのフォローが速射となって骸骨戦士に突き立つが今回は怯ませることができなかった。骸骨戦士は止まらない。

これを阻むべくタリアは中衛より前進して〈強打〉を浴びせた。骸骨戦士がその衝撃にようやく怯む。タリアは続けざまの〈盾強打〉で以って骸骨戦士を殴り飛ばしさらに後方へと押し込んだ。敵を退けるとタリアも深追いせずに飛び退る。

轟！　とイヤホンを越しに鼓膜を震わせ、目の前に火柱が上がった。クララが抑えていた二体とタリアが後退させた一体を巻き込んでサーラの大火力魔法〈劫火〉が吹き荒れる。

詠唱に時間のかかる攻撃魔法スキルではあるが威力は絶大、サーラはタリアが敵を押し戻すことまで想定し発動位置を調整していた。次いでボルトの範囲射撃スキル〈流星矢^{メテオアロー}〉が降りそそぎ骸

骨戦士の追撃を強引に抑えつける。

そろそろ骸骨戦士たちのダメージも限界近くに達していると踏んだクララは大技に備えていた。大剣を右肩に担ぐように構え一瞬の溜めのあと前進しつつ左へ斬り下ろす。

クララの攻撃は止まらない。斬り下ろした勢いのまま全身が反時計回りに旋回、その挙動に従い大剣が横殴りに繰り出される。更に旋回、更に横斬りと続けざまに五回の回転斬りが骸骨戦士たちに襲い掛かった。

大剣専用攻撃スキル〈大車輪斬〉は強力だが使用後の隙が大きい為にとどめ以外には使いにくい。しかしクララは機を見てそれを愛用していた。強力な連続攻撃を浴びせられた骸骨戦士はことごとく斃れる。

骸骨戦士たちが沈黙したのを見届けたあと、四人はジャックの応援に向かった。

《ダークライダー》の愛馬たる骸骨の巨獣が棹立ちになった。特殊な攻撃スキル〈咆哮〉の予備動作だと知るジャックは防御姿勢をとる。果たして巨獣が嘶いた。まともに食らえば俗に『ピヨリ』と呼ばれる操作不能状態に陥るいやらしい攻撃だ。ゲーム画面を揺らすエフェクトがその音波の凄まじさを演出する。

「かけつけた途端ピヨるとかwwww」

クララの発言にパーティー状況フレームを確認するとなるほどクララ、ボルト、サーラの三名に『ピヨリ』状態のアイコンが燦然と輝いている。しかしそれらは次の瞬間に消えた。タリアが回復魔法でステータス異常を治したのだろう。

「ちゃんと《騎士殿》の動きを見るように」

ジャックは牽制攻撃の合間に手早くチャットを打ち込む。「おk」と答えてクララが横に並び立つ。

ここからが本番と言える。ジャックはクララをその場に残し《ダークライダー》の背後へと回り込もうとする。《ダークライダー》

はジャックを追うように向きを変え、クララー——ひいては仲間たちに背を晒した。

防御牽制役のプレイヤーが強敵の戦意を引きつけるのは『タゲをとる』などと呼称されMMOにおいては常套手段である。防御役はモンスターのマークを自分に向けさせることによってその攻撃方向を誘導し仲間への攻撃を阻むと共に味方側の攻撃するチャンスを作り出す。

防御役は『盾役』、『タンク』などと呼ばれ戦闘をある程度コントロールする側面もあることからパーティーのリーダーとなることも少なくない。

ジャックは優秀なタンクだった。敵のコントロールは勿論、自分にできる最大限の攻撃もかかさず『食らってはならない』とされる致命的な被害は的確に防御する。

（それにしても火力勢は上手くなったなあ）

応戦に余裕があるためジャックはついつい仲間のプレイを分析してしまう。

先ほどはすっかり特殊攻撃を浴びてしまったクララたちだがそれ以降はキツチリかわしている。ジャックとの合流を優先したためのケアレスミスだったと言ったところか。

ある種囹とも言えるジャックから《ダークライダー》のマークが逸れないように火力も上手く調節している。これが下手な場合、防御性能に劣る火力陣へモンスターのマークが移り混乱と無用な損害を招くことに繋がる。

（さて順調に《騎士殿》の体力も25%を切ったしそろそろ大技がくるな）

《ダークライダー》の背後に貼り付いて攻撃していたクララもその位置を大きく退げていた。ジャックもタリアの《障壁》が自分を包むのを視認しながら防御姿勢をとる。

《ダークライダー》が長剣を天にかざした。隙だらけの体勢だがそこはゲーム的なお約束か、こちらからの阻止行動はさっぱり功を

奏しない。この辺りも経験則だ。

派手な紫電と轟音を撒き散らし虚空から巨大な剣が次々と現れる。それは《ダークライダー》の周りを円陣で囲むように地面へと垂直に突き刺さった。《冥王雷陣剣》めいおうらいじんけんと呼ばれる不死系上位モンスターが得意とする高威力スキルである。

ジャックのゲーム画面が激しく揺れる。一撃で《障壁》が砕かれ、と強力なレアアイテムである方形盾による防御も抜けてダメージを食らう。体力ゲージの1／4ほどをもぎ取られ、毎度のことながらこのダメージは馬鹿馬鹿しいなと毒づきつつジャックはきつちりと次の手を打った。

《冥王雷陣剣》を凌いだジャックが挑発スキルで《ダークライダー》の気を引く。次いで戦鎚による連打が繰り返されるとモンスター₁のマークは彼に釘付けになった。

（やっぱりジャックさんは頼もしい）

タリアからジャックへ回復魔法が飛ぶのを意識の端に留めつつボルトは安心して射撃を再開する。まずは派手な攻撃を控えつつ敵の戦意が十分ジャックに向けられるのを待つ。この辺のバランスは経験₁を積むしかない。

ボルトと共にパーティーの火力を担うクララやサーラも抑え目な攻撃で様子を見ている。巨獣の後ろ足による蹴り上げを容易くかわすクララを見やり、この面子だとほんとイーजीモードだなと口元が緩む。

《ダークライダー》が『クララを後方と意識した』のを受けボルトは強力な射撃スキルを準備した。わずかな溜めの後に矢を放つ。螺旋のようなエフェクトをまとった矢が宙を走ると《ダークライダー》に突き立ち、通常の射撃より大きくその体力を削り落とした。《ダークライダー》がわずかに怯むとジャックが目ざとくその隙を衝いて《強打》を叩き込む。以心伝心とでも言おうか、その連携プレイにボルトは少なくとも満足感を覚える。

あたかもそれが合図であったかのようにクララとサーラもそれぞれが強力なスキルを放った。《ダークライダー》の残り体力が著しく低下する。戦局は終盤を迎えようとしていた。

縦横無尽に剣を振るう《ダークライダー》の挙動に目を凝らしつつ、サーラは最後の追い込みへの戦術を組み立てた。とは言っても優秀な前衛が抑えていてくれるので難しい話でもなく、自身が習得している攻撃魔法を低威力のモノから順番に放つといった単純なモノだ。

最後の悪あがきのごとく《咆哮》を上げようとする《ダークライダー》の予備動作を見て安全圏へ一旦退避。その後《氷槍》、《炎槍》、《劫火》と続け様に放ち終える頃にはモンスターの体力も残り10%を割り込んでいた。

一気に削り斃す！ という意志のもと、サーラは更に上位の魔法を唱えた。単体攻撃魔法であるにもかかわらず《劫火》並みの詠唱時間を要する《氷爆》、《炎爆》が続け様に《ダークライダー》の背で炸裂する。

《炎爆》の衝撃によりとうとう堪えきれなくなったのか《ダークライダー》の巨体が大きく傾いた。その隙に赤光を帯びた矢が甲高い音と共に次々と命中し、クララの回転斬りが何度も襲い掛かる。

クララの大剣が振り切られた次の瞬間、《ダークライダー》は重低音の苦鳴を残し地響きと共に倒れた。

テラスから坑道への入り口辺りで徘徊していた《ダークライダー》率いる一群を排除したあと、一行は坑道を奥へ進みつつモンスターを狩っていった。危なげなく進み第七層のボスモンスターが出現するエリアも覗いてみたが残念ながら不在であった。別のプレイヤーに倒された後だったのだろう。

現実時間で零時近くになりパーティーは一旦休憩することになった。廃鉱内でもモンスターが出現しない一画に陣取り戦利品をどう

分配するか話し合う。

ダイククライダー

強敵を中心に斃して周ったため、今夜の狩りはなかなかの成果と言えた。装備強化用の貴重なアイテムであったり幸運にも現状の物から交換できる性能の防具や武器であったりとパーティーのムードも明るい。

藤崎は煙草を吸いながらチャットの様子を眺めていた。《Decisive War World》はアクション性が高い為に操作から両手が離せず、休憩のタイミングでもなければ落ち着いて喫煙もできない。

『タリア嬢は長剣いらないのかね？』

ジャックの発言に返事を打ち込む。

『攻撃性能は高いんですけど魔法性能が付いてないから使いにくいですね。ですから今回は遠慮します』

なら別ので穴埋めでとはクララ。他のメンバーもそれには肯定的な反応を返す。この面子がアイテム分配で揉めたことってないと口元を綻ばせつつ、ふと時計に目をやる。丁度LEDが00・00を刻んだところだった。ゲーム画面に視線を戻すとそこには珍しいものが表示されている。

『私の名はアルテミエル』

ゲーム画面中央に通常よりかなり大き目のフォントでそんなメッセージが表示されていた。他のゲームでこのような形態のメッセージを見たことはあるが《Decisive War World》では初めてお目にかかる。アルテミエルとはゲーム導入時の物語に登場する決戦世界の母なる女神の名前であったので運営サイドが用意した初の突発イベントかと訝しむ。

画面端にテキストフレームがポップアップした。この突発的な事態を受けて広域チャットに発言を垂れ流すお調子者たちのメッセージが怒涛の勢いでログを押し流す。

『女神さまキタ――』

――！』

『ちょ、メッセに目隠しされてちんだwwww』

『下手くそ乙』

『NM戦中だったのにマジ邪魔』

『運営空気嫁』

『NM厨ザマあwww』

『突発イベントwktk！』

藤崎は煩わしさを覚えて広域チャットのログ表示オプションを無効に切り替えると成り行きを見守った。この状況には妙な胸騒ぎがする。

『こういうイベントの入りって珍しいんですか？』

『いえ、やる気のある運営のゲームだと珍しくないですよ』

MMOはこれが初めてというサーラの問いに生返事を返す。他の三人も別のゲームでの体験などを披露するがその語調は無味乾燥で普段のユーモアがうかがえない。彼らも藤崎と同様な違和感を覚えているのだろうか。

そして画面中央のメッセージが切り替わる。

『勇士たちよ、学びの時は終わりました』

学びの時間が終わる――テスト期間が終わるということか？

藤崎は画面を凝視し続ける。なぜか目が離せなくなっていた。

『あなたがたを我が戦場へと導きます』

胸騒ぎを越え圧迫感さえ覚える。

藤崎は煙草の灰を落としてつつ大きく深呼吸した。

原因不明の焦燥感が募る。

『その身体と技をもって』

緊張を紛らわそうと無意識のうちに煙草を咥えなおす。

藤崎は煙草を深く吸い込もうとした――

『世界の盾とならんことを』

2. 現状把握

タリアは大きく息を吸い込んだ。冷たい空気が肺胞を満たす。

啞えていたはずの煙草の感触がない。無意識に口元へ寄せた指先は厚手の革製の手袋に覆われていた。唇にザラリとした感触と革の匂い。

周囲を見渡せばそこは慣れ親しんだ七畳半の自室ではなかった。

壁や天井はむき出しの岩肌、ともすれば肌寒く感じるこの薄暗い空間が安穩として温かだった自分の部屋であるわけがない。何よりタリアの目の前には四人の仲間たちの姿がある。

しかしある意味では慣れた場所とも言えた。周囲の様子には見覚えがある。ついさっきまで楽しく遊んでいたゲームの舞台。モンスター一ひしめく危険なダンジョン、アルタイゼン廃鉱の第七層。

悪夢としか言いようのない現状にタリアは目眩を覚える。それは他の仲間たちとて同じだったのだろう。サーラとボルトが地面に腰を落とした。

『世界の盾とならんことを』

あのメッセージが表示されたあと、タリアは世界が降って来るさまを幻視した。藤崎英臣の見ていたモノを、タリアが見ていたモノが押し潰し、取って代わる。

その世界が変化するわずかな時間に、アレはタリアの前に姿を現わした。

アルテミエル——アレがその名を持つ者だと言うことはわかった。わからされた。

女神（アレは確かに女の姿をしていた）がこの世界の神だということも理解できた。

自分が何故この世界へと連れてこられたのか——何のことはない、

かの世界ではゲームの導入として語られた物語がこの世界では現実だった。

この世界はもう長いあいだ《外なる世界》からの攻撃に曝されている。その攻撃は小波のようなものだったが真綿で首を絞めるがごとく徐々にこの世界を蝕んでいた。

我が子たるこの世界を守る為、アルテミエルはある一つの手段をとる。

この世界の盾とすべく《別の世界》から戦う力を奪い取ると。

この世界に敵対する《外なる世界》とはまた異なる《別の世界》

——藤崎英臣が在った世界。アルテミエルの言葉を借りればそこは既に神が去った世界。

かくしてアルテミエルは守り手たる神の無いその無防備な世界から《Decisive War World》にログインしていた70万余の人々の存在を奪い去った。

アルテミエルは告げる。世界と世界の《境界》を渡り、この世界の存在へと変容したあなた方は《偽神》となった。

この世界にあって異能を顕現し、命を失わない限り倒れることの許されない異形となったと。

帰還の術はない。かの世界にはさらわれた70万の人々を救うべき神は既に無い。そしてこの世界にてタリアという存在を形作る糧として、藤崎英臣という存在は消費し尽くされていた。

「夢じゃないんですよね」

かすれがちなサーラの声がタリアの耳朵を打つ。かつてLCDのゲーム画面を見ながら想像したとおり可愛らしい声だなど場違いに呑気な感想が脳裏をよぎる。

「とりあえず私たちは運が良い方だろう。周りに話せる仲間が居て目の前にモンスターもいない」

ジャックが皆を元気づけるように張りのある声を上げる。しかし折角の彼の呼びかけに誰も応えられない。タリアは彼の気遣いをあ

りがたく感じつつ、それを手助けできないかと考えを巡らす。

不意に閃くものがあった。それには先ずこの『異世界』と言う『現実』に放り出されてのち、『ゲーム』上で自分たちキャラクターが所持していたアイテムの類がどういった扱いになっているか確かめなければならぬ。

タリアは先ほどから肩にリアルな重さを主張する背囊を下ろした。途中鬱陶しくのびた髪の毛を巻き込んでしまいちよっぴり涙目になる。これも後で何とかしなければならぬ。

タリアは背囊を見る。常識的に考えればこの大きさの中にゲームでは何の疑問もなく放り込んでいた品々がきちんと納められているはずがない。しかし半ば確信的に背囊の口を開くと手を差し込む。その瞬間、タリアは背囊の使い方を唐突に理解した。

それは非現実的でまさに異能と呼べる現象だった。脳裏に背囊のインベントリフレームがゲーム時のそれと同じ様に浮かび、タリアは目的のアイテムをクリックする様を想起する。果たして背囊から抜いたその手は目的の品を掴んでいた。

鼻を近づけてみるとバニラエッセンスの甘い香りと小麦由来の生地が焼けた馴染みの匂いがしてホっとする。これならば傷んでなさそう。

いつの間にか仲間たちがこちらを注目している。努めて笑顔を作りタリアは仲間たちを見渡す。

「皆さん、ちよっと甘いものでも食べて落ち着きませんか？」

この世界で初めて耳にした自分の声は以前とは似ても似つかない甘い響きを持っていてタリアは内心大いに動揺した。

現在地は廃鉱第七層にあってモンスターの出現ポイントからも遠い。もともと休憩するために移動してきた場所だ。タリアは仲間たちにシュークリームを手渡していく。

サーラとボルトは呆然といった体でシュークリームを受け取り、クララはぎこちないながらも笑みを返してくれた。ジャックははっ

きりありがとうと口にしてそれを受け取る。

今回の探索前、手慰みの調理スキル上げで大量生産したシュークリーム。ゲームでは倉庫塞ぎになるため浪費してしまおうと持ち出していた物だった。

配り終わったあと、一応毒味もした方がいいかなと思いつく。ならばと覚悟してかじりつくと口中に濃厚な甘さが広がった。その食感と味覚が嫌というほど現実感を突きつけてくるが同時にクリームの甘さが不安感を多少和らげてくれる。こちらをうかがう仲間たちに口の中のものを飲み込んで見せた。

「普通にシュークリームみたいです」

「リアさんは大胆だにゃー」

思わずといった体で嘔き出したクララがシュークリームにかじりつく。「美味しい」と繰り返しながらパクつく彼女のシュークリームはみるみるうちに小さくなった。ジャックも自慢のヒゲにクリームが付くのも構わずかぶりついている。

「甘みが疲労にダイレクトに効くなあ」

ダンディな戦士がシュークリームを頬張るという絵面にタリアが嘔き出した。ジャックさんオッサン臭いというクララの突っ込みは実際おっさんだからなという迎撃にあえなく撃墜される。

一つため息をついたボルトはみんなと一緒にでよかったと弱々しいながらも笑みを浮かべ、シュークリームを口にした。思わずといった感じで「美味しい」と目を瞠る。

美味しいよねーと笑いながらクララがタリアに手を伸ばしてくる。どうやらおかわりを要求しているらしい。

「在庫が千個ほどあるのでどんどん食べてください」

背囊から新たにシュークリームを取り出しクララに渡す。作りすぎ！と目を剥くクララを調理スキル上げっていうのはそういうモノなんですと軽くあしらう。

「ホントに美味しいです」

か細い声でサーラが呟いた。タリアは彼女の横にしゃがみ込むと

笑顔を向ける。

「気に入ってくれたなら良かった」

これまでの付き合いと現状のサーラの動揺ぶりから、彼女がこの面子において一番堪えているだろうとタリアは踏んでいた。俯いたサーラの顔を覗き込むようにして目線を合わせる。

「サーラさんも良かったらおかわりどうぞ」

「さっきの休憩タイム。実はお菓子を取りに行こうと思ったんです」
タリアの声をさえぎる様にサーラが強い調子で声を上げる。タリアは黙ってサーラの言葉を待つことにした。

「でも夜だし、やっぱりやめようって思っ。お茶で我慢しようって思っ」

食べかけのシュークリームを見つめるサーラの瞳が潤む。

「そしたら」

サーラの声に震えが混じりそれは彼女の肩まで伝播した。
「そしたらこんな事になっちゃって。あの時席を外してたらっずっと考えてて。もしかしたら助かったんじゃないかって！」

不意に縋りついてきたサーラを、タリアはしっかりと抱き止めた。
自分にその身を押し付けて泣き崩れるサーラに相槌を打ちながら、いたわる気持ちをこめて抱きしめる。

かつてぐずる幼い妹をあやした時のことが脳裏をよぎった。その記憶は疼きをもった傷となり、そこからどうしようもなく喪失感が湧き出てくる。タリアもまた抱きしめたサーラの存在感を頼りにしてその疼きを耐えしのんだ。

仲間たちを眺めつつ、やはりタリア嬢は平気そうだなとジャックは気分が幾分か楽になるのを感じた。タリアは見かけこそ十代前半の少女だがいつもと変わらない落ち着き様と機転を利かせた仲間への気配りを見せている。この事実が彼女のプレイヤー自身は相応の社会経験を持ち社交性もある『大人』であることをうかがわせた。

自分一人で年若い仲間たちを率いるなどという困難な事態は避け

られそうだとジャックは内心胸を撫で下ろす。

ボルトは先にサーラが折れたことによって何とか踏み止まられたといった印象だった。今も固唾を飲んでサーラとタリアを見つめていてその様子には余裕が感じられない。ジャックは『とある想像』からボルトの頼りない態度もある程度諦めていた。

平時はふてぶてしいクララもさすがに騒ぐような気力はないらしい。それでも二個目のシュークリームを平らげたあたり頼もしいとも言える。今は無闇に取り乱さないだけでも上等だ。

さて自分といえはどうだろうと、ジャックは己の精神状態を鑑みる。年長者の責任めいたものが自分を律しているのか、この場で取り乱すといった醜態だけは晒さないでいられるようだ。無論、元の世界の事を考えれば暗澹たる思いに押しつぶされそうになるが現状ではどうしようもないと割り切ることもできる、幸か不幸か。

それにしてもタリアだ。この状況では実にありがたい。意味のないifではあるが彼女がこの場にいなかったなら泣き出したサーラをもてあますことになったことは間違いない。タリアという寄る辺が無かったなら、恐慌に駆られたサーラがさらに悪い方向へと暴走していた可能性もあった。

特定の仲間とつるまず、適宜パーティーを組んで冒険を行うフリーのプレイヤー間においてタリアの評価は高い。また今では固定パーティー（決まった仲間と常に行動を共にするプレイ形態をこう呼ぶ）を組むようになったプレイヤーの中でもタリアを評価する者は多かった。支援職プレイヤーとしての腕もさることながら集団内における調停者としての優れた働きが人気の要因だ。

知る人ぞ知る名プレイヤー。

タリアはプレイヤー同士の衝突を軟着陸させるすべに長けている。いさかいがエスカレートしないよう、他人のことにも気を配りつつ対話に臨む姿勢のおかげだろうとジャックは常々考えている。

タリア以上にゲームの腕が立つ、あるいは高レベルを誇る支援職プレイヤーは他にもあまた存在するが、ともすれば私の強さが浮き彫りになる。回復を担う彼らは自分たちがパーティーにおいて要となることに強烈な自負を持っているからだ。

現状に立ってみれば笑うしかない『ゲーム上での極限状態』においてその自負はプラスに働かない場面が多かった。

タリアはその自負を少なくとも他者を不快にするようなカタチで露わにすることがない。それでいて他者への働きかけには積極性を見せ、対話を諦めて切り捨てるケースが少なかった。『タリア嬢がいるパーティーはどんな困難にも勝利する』と言われる所以だ。

ジャックがそんな物思いに耽っているうちに、サーラもひとまず落ち着いたようだった。泣いちゃってすみませんと、なんとか笑みを浮かべた彼女に成り行きを見守っていた者たちは安堵した。

『Decisive War World』に『喫茶セット』なるアイテムがあったことをサーラはこのとき初めて知った。タリアが背囊から取り出した薬缶と携行用ランプをまじまじと見つめる。思えば自分はこんなお遊びアイテムには目もくれていなかった。

「本当はお茶っ葉のアイテムと飲料水、ティーポットも使うのです
が」

タリアはそう前置きし、続いて陶製の小振りな瓶を幾つか取り出した。

「どうやらこれが『ミルクティー』の、こっちでの姿みたいですね」
タリアは小気味良い音を立ててコルク栓のようなものを抜くと可愛らしい鼻先を瓶の縁に近づけてから中身を薬缶へと空ける。

「〈焚き火〉スキルとかがどうなるんだろう」

タリアがランプに火を点し、辺りに固形燃料が燃える匂いが漂い出すとボルトがその火を見つめながら呟いた。ジャックが眉をしかめて唸る。

「スキルがこの世界において実際どう働くか確かめないと動くのは

早計だろうな。女神とやらが『戦力』として我々をこの世界に引きずり込んだ以上、使えないということはないだろうが」

それなら、と薬缶を火に架け終えたタリアが左手の手袋を外して長剣を抜き放つ。鞘と刃が擦れる物々しい金属音に怖気を感じつつサーラは彼女を見守る。タリアは長剣の刃に薬指を押し当てるとそっと引いた。

彼女の押し殺した吐息に一同が息を飲む。タリアはお構いなしといった風に自分の薬指を眺めつつ、しばらく思案したあと不思議な旋律を口ずさんだ。

「スキルは使おうと思えばすんなり使えるみたいです。魔法の呪文がすらすら頭に浮かびました。動作がともなうスキルは身体が憶えてそうな気がします」

タリアはこともなげに一筋の血を垂らした薬指を示してみせる。次に上着の裾で血をぬぐうと再び薬指を掲げてみせた。ついさっきまで血を流していたほっそりとした指先には傷一つ残っていない。

「《ヒール》でしっかり治りました。痛みもありません」

固唾を飲んでいた一同が盛大にため息を漏らした。

「だからリアたん大胆すぎるにゃ」

呆れた様にクララが肩を落とす。

「ともあれ回復魔法が使えるとわかったのは有難い。元の現実より遥かに戦闘でのリスクは減る」

ジャックの言葉にタリアが頷く。

「幸運にもわたしたちは余裕ある状況でこちらに連れて来られました。できるだけ現状を確認してから行動に移しましょう」

タリアの言葉を受け、サーラはただ座しているのではなく自分が憶えた魔法スキルの暗唱を試してみることにした。タリアが言ったように魔法の呪文が淀みなく脳裏に再生される。サーラはそれに確かな手応えを覚え、次第にその思考に没頭していった。

しばらくして温められたミルクティーの芳香がサーラを現実へと引き戻した。ハッとして顔を上げると対面に座るタリアと目が合う。

タリアはにっこり笑うと銅製のカップに乳褐色の茶を注ぎ、熱いから気をつけて下さいという言葉添えてサーラへ渡してくれた。礼を言ってこちらに向けられたカップの取っ手を掴む。

カップに息を吹き吹きタリアが他の仲間にもお茶を配る様子を眺めていると、何気ない風のタリアが実に相手のことを考えてカップを渡していることに気づいた。

タリアは渡す相手が不意な熱に火傷しないように、自分はカップの縁を掴んで相手が自然と取っ手を掴める様に配慮している。こんな状況なのにそんなところにまで気の配れるタリアの余裕が羨ましくもあり頼もしくもあった。

しかしいつまでも甘えてはいられないとサーラは奮起する。仲間たちが頼もしいからといってこの異常事態の中をぐずってばかりではいけない。これから起こるかもしれないモンスターとの戦いにおいて、自分は決定力の一翼を担わなければならないのだ。

ささやかなティータイムのあと、タリアが背囊の使い方を説明すると仲間たちはそれぞれ自分の所持品の確認を始めた。同じ作業をしながら、しかしクララの意識は別のことにも向いていた。

（三次元になってもリアたん萌え）

バカじゃないのと自分でも思わないではないが萌えるものはしょうがないのである。異世界転生なんて厨二展開がなんだ、わたしの萌え魂はそんなことで揺らがないのだと熱くコブシを握りしめる。あくまで脳内でだが。

などと強がってみるものの、いい加減挫けそうになるのも本音でありサーラのようにタリアに泣きつきたくなる衝動を抑えるのに苦労した。しかしそんなのは自分のキャラじゃないとも自覚している。

それにしてもタリアのお姉さんっぷりには驚かされる。前から世話好きなのは知ってるしキャラの見た目通りなロリであろうハズがないとも思っていたがその『優しいお姉さん』属性には目を瞠るモノがある。

（さすが『オレの嫁』四期連続第一位なだけあるにゃ。王者の風格にゃ）

バカな同好の士と水面下で行ったミスコンもどきを思い出しつつタリアを盗み見ると不意に目が合う。いきなりで驚いたが内心のバツの悪さを面に出さないようにして目を逸らした。

いや別に見てたのをごまかさなくてもよかったかとモヤモヤした気分で荷物の検分を再開するとタリアから声が掛かった。

「クララさん」

顔を上げるとなにか丸めた布を抱えたタリアがいつの間にか目の前にいた。

「さっき〈耐寒〉の魔法は使いましたがその格好だと擦り傷が増えるかもしれません。上着になるような物の手持ちはありました？」
言われてみれば『こちら』に來た当初の肌寒さは感じなくなっていた。クララは露出度の高い自分の姿を思い出し『荷物』の中を探しまくる。

「今回は他に着るもの持って来てないにゃ」

ため息混じりに返事を返すと、でしたらこれをどうぞとタリアはその丸めた布を渡して寄越した。広げてみるとざっくりとした厚手のコートだった。

「ゲームでもゆったりしたデザインでしたから多分クララさんでも羽織れるかと思うんですけど」

「ありがと。それにしてもタリアたんでどこかの猫型ロボット？」

嬉しさをごまかすように冗談で返す。タリアはドラ焼はわりと好物ですよと言って笑った。

各々の荷物が問題なさそうだと確認したあと戦闘スキルを試してみることになった。タリアは長剣を鞘から抜き放ち構えてみる。予想したとおり剣も盾も実際に持つのは初めてであるにも関わらず実に良く馴染んだ。剣の振り方、盾の扱い方も身体が憶えているという感触に感嘆する。

長剣のコンビネーションを試した後そのまま〈強打〉。思い通りに技が再現される。その後は思いつく限りの戦闘スキルをなぞってみて剣を納めた。一応この世界でも剣を振ることができそうだと安堵する。

タリアや仲間たちが一通りの『復習』を終えるとジャックが新たな問題を提示した。《Decisive War World》は他の大多数のMMOがそうであったように三人称視点で俯瞰気味に戦闘状況を把握できた。このためプレイヤーキャラクターの背後や相対する敵の後方も死角になることが少ない。

しかし現状では神の視点とも言える俯瞰的な状況把握が行えない。自分の背面は当たり前のように死角であり、立ちはだかる敵の背後もまた窺い知るのが困難だ。

FPS（一人称視点射撃ゲーム）もたしなむジャックはこの点を案じた。《Decisive War World》は一人称視点でのプレイも可能だったが視野が狭まることによる遊びにくさは実際に試してみたことのあるタリアも理解するところだ。

そこでパーティーは模擬戦を行うことにした。模擬戦と言っても魔法や武器で実戦しながらに打ち合うわけではない。相対する敵との距離感の掴み方や視線の配り方、退避の仕方などを交替でモンスター役を立てて確認する。ゲーム時代は無駄に感じた休憩場所のただっ広い死にスペースがこの時ばかりは有難かった。

さらに自分たちの攻撃スキルが損害を与える範囲の確認も行った。岩壁に向かって攻撃を行い、ヒットしなくなるまで立ち位置を変えたり着弾点を下げたりと地味な反復作業で検証する。

これだけのことで実際の戦闘の難しさがまざまざと想像させられ、不安が皆の精神に重く押し掛かった。改めて状況の困難さがい知らされる。そんな雰囲気の中、タリアが申し訳なさそうに切り出した。

「あの、わたしも確認したいことがあります」
仲間たちがウンザリといった表情を浮かべる。

「さっきの攻撃範囲の検証で思いついたんですが」

タリアはプレイヤー間でダメージを与えられるかどうかの確認すべきだと提案した。

《Decisive War World》においてプレイヤーキヤラクター間では同士討ちが起こらない仕様になっていた。このためその点においては味方の存在を気にする必要は無く、ある意味プレイヤーに戦闘することができた。

しかしタリアはこれらプレイヤーへの保護措置がこの異世界で期待できるとは思えなかった。先ほど何気なく試した薬指への自傷行為の件もある。

「ゲームでは同士討ちの要素はありませんでしたがここが異世界で現実だと言うなら味方同士で攻撃も当たるでしょうし普通に傷も負うはずです。そうなるとお互いの攻撃範囲にも気を配らないと大惨事です」

ゲームにおいてもプレイヤーがプレイヤーにダメージを与えることは例外的には可能だった。所謂PVPいわゆる(Player vs Player)においてのみ実現されていたのだがここにもプレイヤーへの保護措置が取られていた。

プレイヤー対プレイヤーで対戦ゲームを行う場合は双方の同意の上で対人戦モードへ切り替えを必要としており自分の意志に反して対人戦に巻き込まれることはなかった。その辺のことも踏まえ、タリアはもう一つの不安要素を説明する。

「そんな風にプレイヤー同士の殺傷が可能であると判明した場合、ゲームでは許可制として限定されていた対人戦が無制限になってしまいます」

タリアが続けて言わんとしていることを理解した仲間たちは呻いた。他のMMOのプレイ経験のないサーラだけは想像が働かないのか皆を訝しむように見渡す。

「70万人からの『ただのゲーマー』が強力な力を授かってこの世

界にきてるんです。言うまでもありませんが敢えて言います。残念ながらその70万人の中に良識を持ち合わせていない人たちが『必ず』存在しています。『血の一週間』の時の事を思い出して下さい」

《Decisive War World》以前にも幾つかのネットゲームをプレイし、『血の一週間』も経験したジャックたちはタリアの懸念に頷かざるを得ない。

「えと、つまりどういうことですか？ あと『血の一週間』て？」

周囲の反応の中、ネットゲーマーの暗部に理解の及ばないサーラにはそれが今ひとつピンとこず戸惑いの表情を浮かべていた。聞き覚えのない物騒な言葉も気になる。

「サっちゃんは《Decisive War World》^{デイスィー}歴が一年半くらいで他のネットゲ^{ネットゲーム}はやったことないんだったかにゃ？」

覇気が感じられないクララの問いにサーラが不思議そうにしながらも頷く。

「それだと『血の一週間』もプレイ時期が掠ってないし他ゲーでのプレイヤーのマナーの悪さとかも知らないかー」

クララは一つため息をつくと言を続けた。

「まずね、《デイスィーウォー》以外のネットゲは色々タガが緩いって前提を理解して。そのあたりから説明するから」

いっになくまじめなクララの口調にサーラも神妙な面持ちになる。

「タガが緩いってのは例えばプログラムや仕様の不具合、不備、運営側の管理の甘さになるんだけど。それを悪用してゲーム内で不正に利益を得られる機会がままあるの。運営側もそれは理解しててそういう場合は悪用しないようにって利用規約あたりで公知してるんだけど悪用するプレイヤーは『絶対』出てくるの」

クララの説明にサーラは眉をひそめる。

「ルールで禁止されてるんですよね？」

自分の話に不思議そうな顔をするサーラにクララは肩をすくめて見せる。

「そ、ルールで禁止されてても。他人^{ひと}さまとゲームで遊ぶ上での前

提条件、ルールを守るってことに対して意識の低いバカが少なくないのがネットゲなの」

ボルトが苦笑混じりにクララの話を継ぐ。

「翻って言うとうるさいバカは他の面でもモラルが低いんだ。ちょっとでも気に入らないことがあると相手に暴言を浴びせたりゲーム進行の妨害をしたり。あげくはゲーム外場ででっち上げな誹謗中傷したりとかもあるね」

サーラが表情を曇らせるとボルトは皮肉っぽい笑みをおさめてため息をついた。

「でも気に入らないことに対してそういう馬鹿をするってのはマシな方だね。これといった理由もなしに『楽しいから』^{たち}ってだけでさつき言ったハラスメント行為に及ぶでしょうもなく性質の悪い人種も存在するんだ」

「そんでサっちゃんが『ディーウォー』を始める前の話なんだけど。稼動後半年経ったくらいの時期に対人戦システムが無制限に導入されたことがあるの」

再び口を開いたクララの表情は一層苦々しいものへと変わる。

「今時MMOで無制限なPvP、ぶっちゃけPK可能な新規ゲームって他にはなかったからね。そりゃもう酷いことになったよ」

「ピーキーってなんですか？」

首を傾げるサーラにそこから？！とクララが叫ぶ。

「ピーキーってのは『Player Kill』、もしくは『Player Killer』の略。PvPが一応対人戦闘を楽しむことを理念としているのと違って、PKは単純にプレイヤーキャラを殺すことを楽しむ感じかな」

ジャックが自分の発言を吟味するように解説する。

「当時高レベルだったプレイヤーの中にもバカがいっぱいいてさ。街中でも狩り場でも自分より弱い相手を見つけてはPKして周ったの。ご丁寧に嘲笑のエモしてみせたりしてね」

感情表現操作

あん時は荒れたなあと遠い目をするクララに引き攣りつつサーラ

は段々と理解してきた。自分がそんな目に遭っていたらゲームを続けられたか甚だ疑問だ。

「そんな状態が一週間続いた。後でその一週間の出来事は『血の一週間』と言われるようになったんだ」

ボルトがそう言って締めくくり、解説が一段落ついたと見てタリアが話を再開する。

「予想通りにこの世界でPKが可能ならそういったことを好む人たちから攻撃を受ける事態が必ず起きます」

タリアはそのような場合にも慌てず対処できるようにPKが可能かどうか事前に確認しておかなければならないとその必要性を説く。仲間たちも硬い表情で頷いた。

タリアは言いだしっぺの法則で自分がダメージを受ける側になると告げた。

「大剣とか魔法は怖いのでボルトさん、ナイフをお願いします」

冗談を混じえてボルトに笑顔を向ける。突然に指名されたボルトは青ざめながらも頷いた。腰の後ろに差した短刀をそれでも慣れた様子で引き抜く。

タリアは左腕の手甲を外して袖をめくった。その白く細い腕に仲間たちが思わず息を飲む。まさに子供のそれは荒事に向くようにはとても見えない。

「できるだけ浅く斬るから。ゴメンね」

タリアはボルトの掠れた声に頷いた。短刀の切先が肌に触れる。やがて焼きつくような痛みが走り流石にタリアも眉をしかめた。

「ごらんの通りです。プレイヤー間の保護機能は働いてません」

タリアの真っ白な肌に赤い血が流れるさまはその事実を雄弁に物語り、見守っていた仲間たちも青ざめる。タリアは〈ヘール〉で傷を治すと用意しておいた布切れで血をぬぐった。

「エルクーンに転移できないか試したいところだったんだが。これは安易にプレイヤー密集地へ向かうのも考えものか」

ジャックは両手で顔を覆うとため息を漏らした。そのままマッサ
ージするように目蓋を押さえる。

「鉱山の麓にプレイヤー人口的には過疎ってる町があったよね。廃
鉱の低レベルクエスト受ける時に寄った」

名前は忘れたけど、とクララが自信なさそうに提案したところを
サンミレーの町ですねとサーラがフォローした。

アルタイゼン廃鉱は広いレベル帯に対応したダンジョンである。
しかしタリアや仲間たちくらいのレベルになるとサンミレーに用事
もなく、立ち寄ることはまれで直接アルタイゼン廃鉱近傍への遠距
離転移を利用する。

この遠距離転移システムはエルクーンをはじめとした基幹都市と
呼ばれる街を結ぶものと基幹都市から各地の町や村、狩り場やダン
ジョンへ延びるものが存在している。後者は一方通行になっている
ため探索後に基幹都市へ戻るには仲間の魔法職プレイヤーか転移用
アイテムに頼ることになる。

「とりあえず廃鉱を出てサンミレーを目指すのが妥当か。しばらく
は様子を見て今後の方針を決めよう」

ジャックの言葉に一同が頷く。

「となると廃鉱を突破しなければならぬワケだ。困難なのは七層
突破だがゲームでは同格だった奴らと5、6戦は覚悟しないとなら
んな」

皆が押し黙る中、リーダー役を自認しているであろうジャックが
実際の行動に移るべきか悩んでいることを察したタリアは自分がき
っかけを作ることにした。

「現状で思いつく限りの用心はしました。もちろん慎重を期すこと
も大事ですが実際に動いてみなければこの状況を打開することはで
きません」

努めて平静を装って切り出す。ジャックが自分に振り向いて目を
瞠るのに頷き返し、俯き気味だった他の三人が顔を上げたのを認め
るとタリアは気楽そうに笑ってみせた。

「ここまで来るときは楽勝だったモンスターを相手にするだけです
よ？ いつもよりちょっとハードモードで面倒くさいかもしれませ
んがパパッと片付けて帰りましょ」

腰に両手を当てて踏ん返り返ってみせる。タリアの芝居じみた仕
草に仲間たちは硬くなった表情を緩めた。

もちろん不安が完全に拭えたわけではない。それでも自分たちを
鼓舞してくれる存在に幾分か勇気づけらる。表情に決意を表した仲
間を見渡しジャックが力強く宣言した。

「よし。では行動開始と行こう」

ジャックが信頼するいつもの仲間たちははつきりと頷いた。

2. 現状把握（後書き）

12／25…脱字とルビ、一部本文を追加致しました。
12／26…誤字脱字を修正致しました。

3. 魔鋌の死闘 I

五人の人間が歩くたびにその装具がたてる音は当たり前の様にうるさかった。隠密行動など望むべくもない。先頭をジャックが、次にタリアが続きボルトとサーラが左右に並んでその後につく。クラは後方からの襲撃に備えて最後尾についた。

各自が武器を構えた上で周囲を警戒する。このためゲームで見慣れた地形であってもその移動は思ったより捗^{はかど}らない。そしてついに先頭のジャックが後続へ右手を掲げてみせた。「敵と遭遇」のハンドサイン。皆が息を飲む。

《導く灯り》が通路の先の骸骨戦士を照らし出した。その数二体。巡回任務に就いている骸骨戦士の標準的な構成だ。骸骨戦士は乾いた音をたてて得物の短槍を構えた。『現実』として目の当たりにしたその姿は想像以上に威圧的でサーラとボルトが短い悲鳴を漏らす。ジャックは片方の骸骨戦士に狙いをつけるとクロスボウを放った。髑髏^{ドクロ}のぽっかり空いた眼窩^{がんか}に鋼鉄の矢が潜り込むとその衝撃で骸骨戦士がのけ反る。

「射撃頼む！」

ジャックは叫ぶと共に〈威圧〉を放った。敵の注意^{マーク}を自分に引きつける、MMOでは普遍的に挑発スキルと呼ばれる類の特殊スキルだ。ジャックは不可視の『殺意』めいたモノが自分から放たれるのを感じる。

それとほとんど同時に背後からの援護射撃がジャックの頭上を追い越し骸骨戦士たちに降り注いだ。その隙に方形盾と戦鎚^{ヒーターシールドウオーハンマー}に持ち替え、こちらからは討って出ずに迎撃に備える。

「ジャックに〈障壁〉と〈耐火〉！」

先の話し合いに則^{のっと}り、タリアが魔法の対象と種類を叫ぶ声が耳に届く。火弾と矢の雨をかくぐってきた二体の骸骨戦士を、ジャックは目を凝らして迎え討つ。

サーラが放った最後の援護射撃は思いのほか近かったようだ。ジャックは頬に熱風を感じたが〈耐火〉に守られているおかげかダメージになるほどの熱量ではない。タリアの抜け目無さに舌を巻きつつ、繰り出される槍の穂先を懸命に盾で防ぐ。

しかしいつのまにかその盾が死角を作っていた。ジャックの太^{ヒータ}ぶりな盾を遮蔽物にして一体の骸骨戦士が回りこんでくる。

完全に意識の外から受けた奇襲にジャックが総毛立った瞬間、視界の端で白い影が踊った。唐突にけたたましい擦過音が鳴り響き、こちらの死角を衝こうとした敵の姿が出し抜けに消える。

肩口に盾を構えシオルダータックルの要領で骸骨戦士を跳ねのけたタリアは先ほど死角となったジャックの左隣へカバーに入りつつ叫んだ。

「撃って！」

敵が後方に押しやられた今が射撃のチャンスだったが目前での暴力の応酬に二人の後衛はすっかり萎縮して反応できなかった。金属と金属がぶつかり合って荒々しい音色を奏でる中、振りかざされる凶器がギラギラと光を反射して閃く様は恐怖を煽り立てる。タリアの奮闘を目にしながらも認識と理解、判断が追いついていかない。

「二人とも、しっかり！」

起き上がってきた骸骨戦士の鋭い刺突を阻みつたタリアは振り向かずにはじけた。もう一体を相手取るジャックと段違いの肩を並べて敵の攻撃を塞^せぎ止め続ける。

「怖いのはわかるッ！ だけどしっかり見て、自分たちにできることを信じて！」

タリアの叫びにサーラとボルトは震える身体を抑えつけ勇気を振り絞った。しかしその意気もたちまち挫かれる。二人の目の前で体格差を利用した骸骨戦士がタリアに叩きつけるようにして短槍を振り下ろした。サーラは思わず悲鳴を上げる。

だがタリアは頭上に掲げた盾でそれを受け止めてみせるとガラ空きになった骸骨戦士の胴体へ蹴りを放った。十分加速された鉄靴が

ハンマーと化し、ウエイト差をもつとせず、骸骨戦士を蹴り飛ばす。小柄なタリアに秘められたこの非常識な臂力も《偽神》の異能の成せる業だった。

骸骨戦士は身体をくの字にして後方へとよろめく。半ば呆然としながらも今度こそボルトとサーラが反応した。魔法と弓による集中攻撃で骸骨戦士のあちこちが吹き飛んでいく。その様は少くないダメージを窺わせ二人の心に闘志という獰猛な火を点した。

「ボルトん、後方警戒任せたにゃ！」

クララは叫ぶと再び骸骨戦士が起き上がってくるまでのその隙に前線へと上がった。実戦での思わぬ混乱で出遅れたが、予め示し合わせた手はずどおりタリアに代わって壁役となる。乱戦に向かない大剣は仕舞い、その手にはゲームで最後に手に入れた長剣が握られている。

「ナニコレ、コワイッ！」

言葉とは裏腹にほとんど嬌声といった叫びを上げクララは骸骨戦士に立ち向かう。

「クララに〈障壁〉、ジャックに〈再生〉！」

タリアの援護を受け前衛二人が果敢に応戦した。ジャックが盾で刺突を受けてみせればクララは敵の突きを剣で逸らして回避させる。逸らしきれなかった槍の先が剣を握ったクララの右腕を掠めようとするが〈障壁〉の守りがそれ阻む。

クララはそこから体勢を低くすると逸らした槍をくぐるようにして敵の足元へ潜り込んだ。返す刀で骸骨戦士の脛を横薙ぎに払う。骸骨戦士はクララが繰り出した強力な斬撃に両の足を払われ堪らず転倒した。

クララは上体を起こすと倒れ伏した敵の頭蓋骨に勢いよく長剣を振り下ろす。乾いた音を立てて骸骨戦士の頭部が粉碎されるがその動きは止まらない。人型をしてもこの世の道理では動いていない不死系の怪物はその頭部を急所としていなかった。クララは壁際に退きつつ後衛のために射線を空けた。

「サっちん！」

クララが叫んだ直後、骸骨戦士に炎の槍が突き刺さる。骨片と金属片を撒き散らしてついに一体の骸骨戦士が動きを止めた。

「ぐっじょおおおぶ！」

クララは高まったテンションのままジャックが応戦する骸骨戦士へ駆け寄る。縦斬りから次々とコンビネーションを叩き込む。

クララの横槍にその身を打たれてもなお、骸骨戦士の猛攻は休みなくジャックを襲う。ジャックはそれを盾で受け止め、あるいは受け流しつつ機を見てその穂先を払いのけた。短槍を振るう両の腕が泳ぎ骸骨戦士の胴体が無防備となる。絶好の機会にジャックが大声で叫ぶ。

「デカイの大技頼む！」

クララが「らじゃった！」と応えるのも待たずジャックは方形盾を半身に構えると渾身の力を込めて骸骨戦士へ身体ごと叩きつけた。骸骨戦士は大きく動揺して後退する。ぶつかり合った瞬間に引き戻される途中だった骸骨戦士の槍の先がわずかにジャックの頬を掠めたが〈再生〉により瞬く間にその傷も消える。

クララは怯んだ骸骨戦士に猛然と肉迫し隙だらけの跳躍で宙を舞うと頭上に構えた長剣を勢い良く振り下ろした。〈兜割り〉と呼ばれる強力な打撃攻撃スキルが骸骨戦士の髑髏をカチ割る。クララは上方からの衝撃に身を屈した骸骨戦士の目前に着地するとその上半身を蹴り上げた。よろめく敵へ続け様に〈強打〉を放つ。さらに追撃しようとしたクララをサーラの声^{ニイ}が制止した。

「〈炎爆〉カウント2！」

クララは我に返ると慌てて退避する。サーラのカウントダウンに恐々としながら、バク宙を織り交ぜての緊急回避で距離を稼ぐ。サーラのゼロカウントと共に目の前で眩い火球が炸裂した。

火球に呑み込まれた人影が崩れ落ちる。それを眺めながらクララは全身から力が抜けるのを感じてへたり込んだ。たった今まで息つく暇もなく動き回っていた両足はガクガクと震え、自分を駆り立て

ていた熱狂も霧散している。背筋を冷たいものが流れた。近づく仲間たちの足音に振り返るとクララはため息をつく。

「コレ、思ったより大変じゃにゃい？」

「ああ、肉体の方の地力には余裕があるみたいだが平和ボケしてる我々のメンタルには荷が重すぎるな」

左右に首を傾げながらジャックも疲れた表情で肯いた。他の三人も一様に硬い表情で倒したモンスターの残骸を眺めている。

「それにしても構えた盾が死角を作るとはなあ。タリア嬢、さっきは助かった。ありがとう」

「いえ、ちよつと引いた位置だと気づくのは簡単でしたし」

ジャックの札に気を取り直したタリアは頬を緩めた。

「それにしてもクララさん凄かったですね。アクション映画みたいでした」

タリアが明るい声を上げるとクララは立ち上がりながら力ない笑みを浮かべる。

「やー、まぐれですよ。槍の下くぐるのなんてもっかいやれって言われても怖くてムリだね！」

おどけてみせるパーティーのムードメーカーに仲間たちも笑みを交わした。

一行は骸骨戦士の残骸を調べることにした。ゲーム時代は手軽に戦利品を獲得できたが『現実』ではそれも困難に見える。しかしボルトはエルフの鋭敏な知覚で以って『ソレ』を捉えた。うつすらと紫色に輝く1センチ大の八面体が幾つか、骸骨戦士たちの残骸に紛れて地面に転がっている。

宝石の類だろうかと手を伸ばしかけたボルトの脳裏にソレが何なのかという知識が浮かび上がった。あたかも新しいゲームを始めた時に見せられるチュートリアルにも似ていて、ボルトはあの押し付けがましい女神の鉄面皮を思い出し苛立ちを募らせた。

「みんな。こっちの世界でもモンスターを倒せば収入はあるようだ

よ」

仲間たちの方へ振り返ると手のひらに載せた八面体を示す。

「はい、こちらでも見つけました」

屈みこんでいたサーラが起き上がると同じように手のひらを広げて見せた。そこにはやはり紫に光る八面体が載っていて、彼女もまた苦虫を噛み潰したような表情を浮かべている。おそらく同じ『チュートリアル』を見せられたのだろう。

「ソレは？」

器用に片方の眉を上げてみせるジャックに知ったばかりの知識を披露する。

「アルテミエル様曰く『この世界の敵』の動力源。名づけて『外念体』」

「ナニその厨二ネーミング」

クララが呆れたように唇を尖らせた。

「触れようとすれば例によって女神様のありがた〜い解説が脳内再生されるんだけどね。この世界では汎用性の高い便利な素材として然るべきところに然るべき対価で引き取ってもらえるらしい」

ボルトの手のひらを覗き込みタリアが可愛い眉をハの字に曲げる。

「なるほど。ゲームで不死系モンスターを倒した際に現金がドロップしてたのはその過程を端折ってたワケですね」

「最悪不死系モンスターを狩ってれば食うに困らずに済むかな。どのくらいの価値になるのかわからんが」

ジャックの消極的ともとれる発言にクララが呑気な調子で混ぜ返す。

「アンデッド狩りで生計立てるとか地味だにゃー」

ふむと芝居じみた声を上げ、おどけた表情のジャックがクララを見据えた。

「そう言うクララ殿はいきなり生き物とかに斬りかかれるワケか。私にはずいぶんとハードルが高そうに思えるんだがね」

ジャックはからかうような口ぶりだったが、その言葉に想像力を働かせたクララの顔からはサツと血の気が引く。ジャックはやれやれとため息をつき、すっかりその身を縮こまらせたクララの肩を励ますようにドヤしつけた。

「最初に殺し合った相手が血も流さなければ悲鳴も上げない骸骨でもで不幸中の幸いだったってワケだ。あの手のを相手するだけでコトが済むなら万々歳だって思わないか？」

クララは青ざめた顔でコクコクと頷いた。

バハムートは龍人族^{ドラコ}が誇る勇壮な巨体を縮こまらせ物陰に隠れる。追手が発する蹄^{ひづめ}の音は離れる気配がない。恐怖に手が震え回復アイテムを上手く扱えない。ゲームであればたった1クリック^{ワン}で効果を発揮する回復ポジション。それが今は陶製の試験管といった形をとってバハムートを手こずらせていた。

徒手格闘では威力を発揮するが細かな作業を得手としない龍人族の手指が回復ポジションを取り落とす。バハムートは思わず漏れそうになる唸りを必死で堪えた。だが回復ポジションは岩肌の地面に飲まれることもなく、脇から伸びた革製手袋^{レザーグラブ}によって確保される。

「ちよつとは落ち着きなよ。いつものあんたらしくない」

ただ一人残った仲間、女密偵^{スカウト}カッコの湿った声に窘め^{たしな}られる。栓を抜いて渡してくれた彼女に礼を言い、回復ポジションを叩^{あお}った。値の張った高級回復ポジションの効果は抜群で自分の生命力がみるみる回復するのが感じられる。バハムートはようやく人心地ついた思いだった。

「しかし《馬野郎^{ダークライダー}》がしつこすぎるね。今までだったら振り切れるハズなんだけど」

カッコが忌々しそうに呟くと泣き腫らした目元を拭^{ぬぐ}う。彼女の頬に残る流血と涙の痕が擦^{こす}れ、その少々キツ目な美貌を汚す。バハムートも小さくため息をついた。現状はゲームの時とは勝手が違い過ぎる。

「つもう！ ダメだ、やっぱり追尾してきてる」

密偵の優れた感覚でモンスターの接近を捉えたカッコが慌てて腰を上げる。バハムートも急いでそれに倣った。

「テラスからどんどん離れる方向に逃げちゃってる。どこかでやり過ごして引き返さない」と

「だね。他にもまだ生きてる仲間がいるかもしれない」

そう口にしながらもバハムートは自分自身が発した言葉をほとんど信じていなかった。

バハムートが週末夜というネットゲームネットゲームバータイムに参加してい

共成集団

た二個パーティーから成るボスモンスター討伐アライアンスはあの異常事態で壊滅の憂き目を見た。アルタイゼン廃鉱第七層のボスモンスターを倒し、強力なレアアイテムを幾つも手に入れた幸運なアライアンスは突然の悲劇に見舞われ不幸なアライアンスへと転落した。

ボスモンスター討伐が大成功と言っても良い成果を挙げた後、のちアライアンスの面々は興奮冷めやらぬままボス部屋に出現する他のモンスターにも手を出した。

ボスの親衛隊の如く配置されている《ダークライダー》三騎が再出現するのを待ち、お祭り気分でその三騎に対して同時に戦いを挑んだのである。

めいおうらいじんけん

《冥王雷陣剣》をはじめとした強力な攻撃を複数方向から浴びるのは危険であるが、このアライアンスなら三騎まとめて相手するのもそう難しいことではないと仲間たちの誰もが思った。あるいは戦いの途中で倒れる者が出ないとも限らなかったがボス戦で得た成果の大きさは多少のデスペナルティなど意に介さない気分にならせた。

しかしそんな博打紛いの気分を余所にアライアンスの実力は三騎ダークライダーの強敵相手に優越していた。そしてまた強力なアイテムを入手することになりアライアンスの面々の興奮は最高潮に達した。

こうして楽しいプレイ時間を過ごし、一行は幾度目かの戦いにおいても三騎の《ダークライダー》を相手取って優勢に戦いを進めていた。あの危険なメッセージが表示されるまでは――

アライアンスの面々がこの世界で我に返った時、相対する三騎の《ダークライダー》は一樣に長剣を頭上へと掲げていた。

それぞれ《ダークライダー》のマークを引きつけていた三人の戦士たちはその経験からほとんど反射的に防御姿勢を取った。しかし《ダークライダー》の背面に陣取って近接火力を担っていた剣士二人と密偵のカッコは退避が遅れた。彼らが逃げる途中で〈冥王雷陣剣〉が発動した。

優秀な移動スキルを持つ密偵のカッコ以外、《ダークライダー》の近くに在った二人の剣士たちは巨剣が描く陣内から生きて逃げおおせることができなかった。

ある剣士は頭上から襲いかかる巨剣の直撃を受けて『縦に裂けた』。開きにされた人体は紫電に灼かれ瞬時に黒々と炭化する。ある剣士は手足を寸断されてもお生きていた。恐怖と絶望で彩られた顔を後方に布陣した仲間たちへ晒しつつその頭部も巨剣に碎かれる。

カッコは高速移動スキルである〈瞬動〉によって危険極まりない巨剣の直撃からは逃げ延びたが、それが地面を穿つ際に跳ね上げた飛礫と電撃を浴びて少くないダメージを負った。飛礫に額を割られ、流血が顔を伝う。彼女はかつて経験したことのない暴力と、それによってもたらされた痛みに錯乱した。カッコは力なく倒れ伏したまま嗚咽を漏らし続けた。

酸鼻極まりない光景を目の当たりにした二人の魔術師は恐慌を来した。彼らは防衛本能に衝き動かされるまま高威力攻撃魔法を行使してのけた。

その魔法は確かに《ダークライダー》たちに少くないダメージを与えたが、同時にその強敵たちの注意を引きつけ、なんとか〈冥王雷陣剣〉にも耐え忍んだ味方の戦士をも巻き込んでいた。

〈冥王雷陣剣〉の大きな隙を衝いての反撃を企図していた二人の

戦士は防御姿勢を解いたところを味方の強力な攻撃魔法に曝され憤死した。バハムートは自分より腕の立つ戦士仲間がその判断力の高さ故に斃れたことに戦慄する。自分が生き残ったのはただノロマだったからに過ぎない。

三騎の《ダークライダー》は突然浴びせられた痛撃に目標を切り替える。眼前のバハムートを捨て置くと自分たちに痛打を浴びせた二人の魔術士へと向き直り猛然と駆け出す。

ほんのわずかな時間でアライアンスはほとんど半壊していた。残された面々は誰もが事態の推移を理解できずに混乱している。そして、ボス部屋での惨劇はなおも続いた。

魔術士たちの前に布陣していた僧侶二人は突進する三騎の《ダークライダー》から逃げ遅れ、彼らが駆る巨獣に弾き飛ばされた。二人の身体が岩肌がむき出しの地面を転がる。バハムートは半狂乱で叫びながら血達磨になった僧侶たちの元へ走り寄った。二人の僧侶たちはまだ息があるようで地に伏した身体は微かに身動みじろぎしている。バハムートは血で汚れるのも構わずエルフの女性僧侶ミントを抱き起こしつつもう一人の僧侶カーティスに呼びかけた。彼が苦しうに返事を返したのに安堵しつつ、気を失っているミントの頬を張ろうとして自分の物騒な手のひらに愕然とする。

不意に響いた女性たちの悲鳴にバハムートは振り仰いだ。その方向にはもはや防御能力に劣る後衛陣しかない。視線の先では三騎の獰猛な騎士たちが盛んに剣を振るっていた。骸骨の巨獣が興奮でいなか嘶き、誰かの絶叫が鼓膜に飛び込んでくる。

笑顔が可愛い魔女レモネードの首が宙を舞っていた。

次の瞬間、その惨劇の渦中で火柱が上がった。それは残る魔術士のセイメイが自分の身をも焦がす距離で《劫火》を解き放った光景だった。一騎の《ダークライダー》が斃れるもセイメイもまた斃れる。その身体は巨獣に踏み躪にじられ、ボロボロの残滓と化した。

いつのまにか《ダークライダー》の背後に立っていたカッコが呪いの言葉を発しながら飛び掛るのが見えた。思わず静止の声を上げるがそれは徒労に終わる。蹴り上げられた巨獣の後ろ足がカッコを捉え、その身体を跳ね飛ばし大きく退けた。^{しりぞ}

次に狙われたのは弓兵の二人だった。彼らは必死に逃走しながら振り向き様に矢を放つがゲームでは有効だったそのテクニクも上手くいっていない。俯瞰的な視点で狙いがつけられない状況がゲームでは移動射撃の名手でもあった二人の手元を狂わせる。放たれる矢はことごとく狙いを逸らし空しく地に落ちた。

その隙にカーティスが回復魔法で傷ついた仲間たちを癒した。彼はバハムートに鬼気迫る眼差しを向けると早口で《ダークライダー》の分断を提案した。自分が弓兵二人と共に一体をひきつける間にバハムートにはミントとカッコを連れてもう一体を受け持つように指示する。バハムートは頷くしかなかった。

こうして生き残った面々は分散した。カーティスの判断が間違っていたとは思えない。^{ダークライダー}強敵二体による範囲攻撃に曝されるのは今の自分たちには荷が重かったとバハムートも思う。

バハムートは倒されたもう一体の再出現を恐れボス部屋を出ると坑道の方へと自分の相手を誘導した。ダンジョン内を彷徨^{よこぐわ}う内、《ダークライダー》の〈咆哮〉を食らって足を止めたミントともはぐれてしまった。

灯りの担い手であったミントとはぐれたためバハムートとカッコは光を失ったが幸運にもそれぞれ龍人とエルフである二人は種族的特性で多少の夜目が利いた。しかし現実では慣れない悪路での逃走のため度々敵に追いつかれ交戦を余儀なくされた。その度にバハムートは浅くない傷を負い心身ともに疲弊していった。

さきほど口にした回復^{からだ}ポーションでダメージはそこそこ回復したものの、バハムートの肉体は疲労に音を上げる寸前だった。自分たちを追いつ立てる蹄の音に恐怖するが故に、辛うじて両足は機械的に

動いているが打開のあてのない状況が精神を蝕む。

「まって。前からもなにか近づいてくる！」

ちよつとキツ目な美貌を涙と血の痕で台無しにしたカッコがなおその表情を歪ませて呻く。バハムートは第七層の坑道を徘徊する骸骨戦士二人組の存在を思い出し総毛つ。その時、背後からもまた彼らを追い詰めんと近づく敵の嘶きが聞こえた。

バハムートは骸骨戦士の方がまだ与し易いと覚悟を決め坑道の先へと駆ける。ねじれた坑道の曲がり角を過ぎると視界が明るさを取り戻した。一瞬眩んだ目蓋を開くとバハムートは驚愕する。

彼の目の前には頼もしい友の姿があった。

「ジャック！」

ジャックは物陰から飛び出したバハムートが何者かと気づくと、構えたクロスボウを下ろしてゲーム時代の姿そのままに厳めしい面構えを綻ばせた。

「バハムートか！」

この世界にきて初めて見る余裕を窺わせる他人の表情に、バハムートの胸に熱いモノがこみ上げる。しかしジャックは表情を改めるとバハムートを急かした。

「話は後だ。そちらのお嬢さんも早く」

ジャックに庇われたバハムートたちと入れ替わるようにネコミミ獣人の剣士が前へ出る。彼女はバハムートに可愛らしくウインクすると彼の肩を励ますように叩いていった。ネコミミ剣士もジャックとはまた『別のツテ』でバハムートの同志だった。

ジャックとクララ。二人の登場にバハムートは期待に胸が高鳴るのを感じた。

あの二人が組んでいるのなら、回復役は高確率で『彼女』であるハズ――

カッコの傷を治し、彼女の顔を優しく拭う僧侶の少女がバハムートの方へ振り向いた。

果たしてバハムートの期待は叶えられる。

(タリアたんキタ――――！！！)

3. 廃鈺の死闘 I (後書き)

12／26 .. 誤字脱字を修正致しました。

4. 廃鉦の死闘 I I (前書き)

今回の話に続く部分の表現に難航しそうなので前回の引きの続きを
投稿致します。そんな理由から今回は短いです。申し訳ありません。

4. 魔鋌の死闘 I I

タリアが近づくとうわりと甘い花の様な香りが漂った。その場違いさが、バハムートと僅かに動揺させる。

それはミルクで割られた紅茶の残り香にすぎなかった。

しかしその匂いは、散々血腥ちなまぐささに塗れてきたバハムートにとり穏やかさや温もりといった、しばし感じることができなかった暖かなものたちを想起させて彼を慰めた。

束の間、惨劇に打ちのめされてきた精神が安らぎを得る。

しかしそんなものは儚い幻だと、彼の安寧を嘲笑うかのようにあの忌まわしい嘶いきが辺りに響いた。バハムートは無意識にその身を強張らせる。

タリアはカッコに向けていた労わりの表情を戦いに臨むそれに変えると、真っ直ぐにバハムートを見つめてくる。愛らしい造作の中にあつて、その水色の瞳だけはひどく透徹として怒りを顕わにしていた。

「バハムートさん、敵は《ダークライダー》ですか？」

バハムートはその問いにジャックとクララが立ち塞がる方へ振り返りつつ、彼らにも届けとばかりにはつきりと答える。

「はい、ヤツが一体のみです。もう〈雷陣剣らいじんけん〉を繰り出してくるくらいに削っておりますが」

タリアは一つ頷くと心地よく響く旋律を口ずさんだ。バハムートは彼女の魔法によって自分の傷が癒されていくのを感じる。

「ここはわたしたちに任せて、バハムートさんたちはいまま少し退がって下さい」

エルフの男女が、バハムートとカッコの脇をすれ違いざまに頷いてくれる。

「巡回の骸骨兵は倒しましたが『こっち』でモンスターの再出現リスボーンがどうなっているか、まだハッキリとはわかっていません。後方警戒

だけお願いします。回復が必要になったら大声で呼んで下さい」

タリアの明瞭な指示に二人は頷く。

「ではお氣をつけて」

タリアは白い衣装を翻すと、鉄靴の靴音も高く仲間たちの方へ歩いて行く。

その小さな後姿が、なぜか誰にも増して頼もしく見える。

「――勝てる」

カッコはバハムートが漏らした言葉に、はっきりと生気が戻っているのを感じて相棒の横顔を見上げた。

「『タリア嬢がいるパーティーはどんな困難にも勝利する』!」

その爬虫類然とした顔に歓喜の笑みを浮かべて、盲目的な言葉を吐くバハムートをついまじまじと見つめてしまう。

（アレが噂の『タリアたん』か。確かに可愛らしいし仕事もできそうだけど――）

カッコは頼りにならなくなった相棒に残念なモノを見る眼差しで一瞥をくれると自分だけでも後方警戒に努めようと氣を取り直した。やがてタリアたちが難敵に立ち向かう喧騒が響いてくる。彼らは互いに声を掛け合うことで同士討ちや誤爆を回避していた。なるほど、なし崩しに戦闘を継続させられたあげく、同士討ちで死人まで出した自分たちとは事情が異なっている。この異常な状況下において対策を講じ、上手く対応する時間を与えられていたのかしれない。

時折交わされる彼らの声を背にしつつ、その中で一際徹るタリアの声にカッコは去り際の彼女の表情を思い出す。

（――だけどアレは、どう見ても『タリアたん』なんて玉じゃないわよ）

リアルで目の当たりにした《ダークライダー》の迫力は恐ろしいの一言に尽きた。しかしなおタリアの心は怒りに塗りつくされ、その闘志は揺るがない。

保護した二人の痛ましい姿が思い出されるたびに目の前の《ダークライダー》、引いてはクソツタレな女神に対する怒りが湧き上がってくる。

タリアたちやあの二人は、ただのネットゲームでしかなかった。それが今、ここでこうして命のやりとりを強いられている。

まだ事情を訊いていなかったが、あの二人が自分たちだけで《ダークライダー》に挑んだとは思えない。何らかの事情で他の仲間とはぐれたと考えるのが妥当だ。バハムートの鎧に残った流血の痕やエルフの女性の酷い様を見れば、その事情がロクでもないことだと容易に想像できる。

タリアは『命のやり取り』という言葉の意味をなお甘く見ていた事を悟った。今この瞬間にも、見知った誰かがその為に命の危険に曝されているかもしれない。

（こんなのは、週末の夜を楽しく遊んでいただけの人たちが負う様なことじゃない――）

タリアはこの理不尽さの中で、気の良い友人たちを失うつもりは毛頭なかった。なんとしてもみんなで生き延びるんだと強敵を見据える。目の前の敵が剣を振り上げる。タリアは冷静に《障壁》の詠唱を済ませると大声で叫んだ。

「ジャックに《障壁》！ クララ退避！」

標的に接近しているクララが致命的な攻撃の予兆に気づけなかった場合を案じて指示を飛ばす。「あんがとにゃ！」と、元気良く飛び退く彼女の姿に、意識の端で安堵しながらなお声を張り上げる。

「ジャックに《再生》！」

やがて目の前に発生した《冥王雷陣剣^{めいおうらいじんけん}》という超常現象は壮絶の一言でも言い尽くせなかった。『世界の敵』という言葉の意味を全身を侵す怖気^{おそけ}と共に実感する。

空間がその身を裂かれ紫電という悲鳴を上げる中、ヌラリとした光沢を放つ異形の巨剣が幾つも姿を現わす。空間の傷口から生み出されては地面を穿つ巨剣^{ソレ}が円陣を成して《ダークライダー》の姿を

覆いつくした。異界の巨剣は辺りに凄まじい破壊の暴風を撒き散らす。

——しかし、その猛威に倒れた仲間はいない。

ジャックの〈威圧〉から始まるコンビネーションが反撃の口火を切る。

クララが愛用の大剣を引っ提げて、雄叫びと共に《ダークライダー》の背後を襲う。

「〈氷爆〉カウント5！」

サーラが落ち着いた声で爆撃のカウントダウンを開始する。

「合わせて痛い撃つからクララちゃん避けてね？」

ボルトの不敵な宣言が皆の耳朵を打つ。

タリアはジャックに回復魔法を飛ばしつつ、頼もしい仲間たちが仕上に掛かるのを見守った。

ジャックの手のひらで小山を作っている輝石を眺めてバハムートは首を傾げた。

「いきなり僕たちの物だって言われても。なんなんだコレ？」

「《ダークライダー》のドロップアイテムと言ったところだ。触れればわかるんだがな、この世界で現金化できる。相棒のお嬢さんと分けるといい」

「こっちは後始末をしたただけだしな」と呟くジャックに、半ば押し付けられたソレを受け取る。なるほど、バハムートも《外念体》アウターソウルがなんなのかを若干の不快さと共に正しく理解した。

「さて。一先ずケリが着いたところで事情を訊きたいんだがここも安全じゃない。落ち着かないが歩きながら説明してくれるか？」

労わる様な眼差しを向けてくるジャックに応え、バハムートとカッコは自分たちを見舞った惨事について語った。

一行は坑道を歩きながらパーティーでの取り決めをバハムートらに説明し、二人を隊伍に組み込んだ。先頭には引き続きジャックと、索敵能力を自ら売り込んだカッコがつく。二段目にタリアとクララのペア、三段目にサーラとボルトのペアが続き、しんがり殿はバハムートが務めることになった。

ボス部屋までの途中でミントの遺留品が発見された。無残に踏み躪にじられたソレはもはや遺体と呼べるほどには原型を留とどめていなかった。タリアが咄嗟に唱えた〈健サニティやかなる心〉の魔法の効果が無ければ、全員がその身を振って嘔吐することになっていたかもしれない。そんな魔法による鎮静効果を得ても、一行は涙を堪えることができなかった。

バハムートとカッコもミントとはさほど親しいという間柄でもなかった。タリアはできればミントと親しい人物に渡そうと、せめてものよすがとして彼女の遺髪を回収する。一行は彼女に黙祷を捧げると沈黙の内に先を急いだ。

カッコの偵察によりボス出現エリアには二騎の《ダークライダー》の復帰が確認された。それら以外に動く姿が認められなかったという彼女の報告に、ジャックはエリア内へは立ち入らない決断を下した。カッコとバハムートも反対しなかった。

ジャックの想定通り、エレベーターのある吹き抜けのフロアまでに複数回の交戦があった。幸い《ダークライダー》は坑道自体には配置されておらず、その遭遇を回避することが可能であった。一行は坑道に立ち塞スケルトンウォリアーがる骸骨戦士のみを排除して危なげなく進んだ。

しかしそれら交戦の機会を経て、モンスターの知覚能力がゲーム時代のそれと比べて格段に高くなっている事実が判明した。いや、プレイヤー並みになったと言うべきか。単純に彼我の距離さえ取ればこちらを感じしないなどという極めてゲーム的なプレイヤーの優位は失われていた。

安易に近づけばそれはたちまちモンスターの知るところとなり、

彼らは猛然と襲い掛かってきた。索敵の重要度は高まり、カッコは自分の負う責任のシビアさに神経をすり減らすこととなった。

駆け寄ってきたカッコが大きく息をつくのを迎えて、タリアは彼女の額に浮いた大粒の汗を拭ってやった。カッコは息を整えながら礼を言い、待ち受けていた仲間たちに偵察結果を報告する。

「いつも通り、坑道の出口には《馬野郎》^{ダークライダー}の一隊がうろついてる。すぐ気づかれる距離には他のモンスターは居ないけど、テラスでそのまま戦ったら気づかれそうな距離には何体か居る」

ほぼ予想通りの状況だったが、やはりモンスターの知覚能力の向上が不安要素になった。

「坑道内に誘い込むしかないか」

ジャックは難しい表情で坑道内を見渡す。

どういった歴史的背景を持つものか、アルタイゼン廃鉱の坑道はかなり広い。幅八メートル、高さも四、五メートルは優にある。だがそれも《ダークライダー》単独で相手取るなら十分な広さだが、横隊で先行してくるであろう配下の骸骨戦士四体の相手を考えると少々心許ない。

ゲーム時代はそのモンスターたちの戦術がこちらの有利に働いたが、いざ今回のような状況に置かれると手堅いと言わざるを得ない。タリアの台詞ではないがまさにハードモードだ。

骸骨戦士たちを排除している間に、後方の強敵が^{ダークライダー}どういった手を繰り出してくるかも気になる。仲間たちにそれらの懸念を説明するが、誰も良策など講じ様がない。

結局カッコに遊兵として待機してもらい、突発的な自体に備える以外は正面からの戦闘を覚悟することになった。

だが、この世界の現実として存在する《ダークライダー》の攻め手は、その覚悟を軽く凌駕していた。

ジャックのクロスボウが《ダークライダー》の兜を叩いた。ジャ

ツクはそれを見届けると、仲間の待機する坑道奥へと退く。しりぞ

カッコが見つめるその先で《ダークライダー》はいつもの通り長剣を標的^{ジャック}へと突き出し、配下の骸骨戦士をけしかけた。骸骨戦士たちが横隊を組んで勢い良く走り寄ってくる。カッコを除いたパーティーの前衛陣が応戦の構えを取るその間に、《ダークライダー》は長剣をジャグリングの様に放ると順手から逆手に持ち替えた。その様は一種ユーモラスですらあったがカッコは総毛立つまま叫んでいた。

「ジャック！」

思わず発した警告は間に合わない。《ダークライダー》が槍投げの要領で投擲した剣はさっきのお返しとばかりにジャックの額を捉えていた。

5. 魔鋌の死闘 I I I

自分に小憎らしい一撃を浴びせた後、のち後方へと退く敵に対し《ダークライダー》は配下の骸骨戦士を差し向ける。スケルトンウォリアーすると相手は自分ダークライダーを挑発したにもかかわらず、すでに先行する配下たちとの接敵にその注意を向けた。

舐められたものだと、《ダークライダー》は相手の虚を衝いて返礼の一撃をお見舞いした。

ジャックは引き伸ばされた時間の中、カッコの警告を耳にしながら目の前で碎け散る《障壁》の残滓を眺めていた。次の瞬間、《ダークライダー》が投じた長剣はその豪速でもってジャックの頭部を破壊した。

しかし、長剣の飛行姿勢は《障壁》の抵抗によりそのバランスを欠いていた。長剣は本来の狙い通りにジャックの頭部を貫くこと能あたわず、前頭部及び脳本体を損壊した『だけ』にとどまる。

自らの破碎をもって最後の抵抗をなした頭蓋骨に弾かれると、獲物を捉え損なった長剣は坑道の脇へと空しく転がった――

視界が暗闇に閉ざされた中、ジャックは冷酷な女神の言葉を思い出す。

『命を失わない限り倒れることの許されない異形』

なるほどこう言うことかと思知らされる。

『この世』の真つ当な『人間』で在ったならば、自分はこの一撃で死んでいたはずだ。

たった今ジャックが食らったのは、そういう致命的な一撃だった。だが今現在、視覚をはじめとした感覚こそ奪われているものの、

ジャック
自分はこうして思考している。

たかだが『頭部』を破壊された『だけ』では死ねない。
ジャック

自分はそういう存在になってしまった。

おそらくこれが、心臓や頸動脈と言った人体の他の急所であったとしても結果は同じだったろう。

そう、『この程度』では《偽神》を斃すには足りない。

ジャック
《偽神》を正しく滅ぼすには、この世の器たる肉体を徹底的に破壊するか、存在の源たる『この自分』という意識を完膚なきまでに打ち負かし、痛めつけ、その意気を挫く^{くじ}かしない。

暗闇の中において、ジャックはそう理解した――

結論から言えばタリアが交戦前のおまじないの様に掛けてくれる〈障壁〉がジャックの損傷をごく軽微にとどめてくれた。《ダークライダー》が投じた長剣はジャックの頭部を刺し貫くことができず、その結果として異物の残留を免れた彼の身体の修復を容易にした。

ジャック
こうして《偽神》の器はタリアの魔法により速やかに回復される。ジャックは刹那のブラックアウトから復帰すると、仲間と共に殺到してきた敵を迎え討つ。

認識に断絶もない。

『この世』に再現された《偽神》^{ブレイヤーキャラクター}とは、かくも非常識な存在だった――

「なんとも呪わしい話だな！」

ジャックは《偽神》^{自分}のでたらめさにそう毒づきながら骸骨戦士に〈威圧〉を浴びせかけた。

タリアがこのタイミングでジャックに回復魔法を唱えたのは、その『死』に気づかなかったからに過ぎない。気づいていたならまた

別の対応をしたはずだが、いつも〈障壁〉の備えとわずかな幸運がパーティーの守護神の速やかなる復帰へと繋がった。

ジャックの背後にあつて《ダークライダー》の投じた長剣が彼の頭部を『掠めた』と見てとり、その出血量に恐れをなしたタリアは高位の回復魔法を施した。

実際には掠めたどころの話ではなかったのだがその時の彼女には知る術もない。まさに結果オーライである。

この会敵時において一番肝を冷やしたのはカッコであった。味方が防衛線を形成するにあたり《馬野郎》ダークライダーを警戒していた彼女はジャックに警告を発した本人である。必然的にことの一部始終を見届ける羽目になった。

《ダークライダー》の驚くべき隠し技にジャックの頭部が破壊されたかと思えば次の瞬間には巻き戻し映像の如く回復し、当の本人〈威圧〉と言えは氣勢を上げて敵へと殴りかかっている。たった今日の当たりにした光景が幻でなかった事は朱色に染まったジャックの凄惨なおもて面が証明していた。

あんな隠し玉を持っていた《馬野郎》にも驚かされたがソレの上を行くタリアたちにも開いた口がふさがらなかった。カッコは自分がその身を寄せたパーティーに空恐ろしいものを感じて考えるのを止める。一時は絶望的に見えた廃鉱脱出も、今では至極簡単なことのように思えた。

《ダークライダー》は訝しんだ。彼が敵へと投じた一撃はこの世の人型種の急所を確実に捉えた様に見えた。しかしその敵は僅かに体勢を崩しただけで、今も彼の配下と矛を交わみなぎしている。

これは強敵だと、《ダークライダー》は戦意を漲みなぎらせた。得物を手離した右手を一振りして替えを呼び出す。彼は新たに手にした長柄の得物を右手でしっかり握りしめると、その腋下で強く挟み込んで地面と水平に構える。《ダークライダー》は突撃の姿勢を取ると己が騎馬を激しく駆り立てた。

周囲より頭何個分も飛び出した巨体を誇るバハムートは二体の骸骨戦士を相手取る中、その頭越しに《ダークライダー》の動向に気づいた。《ダークライダー》はいつか映像で観た騎馬突撃そのままの姿勢でこちらへ突進してくる。いや、狙いはまたしてもジャックか。

ランス
(馬上槍？ いや斧槍だ！)

自身が大型近接武器を好むこともあって目ざとく気づいたバハムートだが、己の稚氣にそんなのどうでもいいがな！ とセルフ突っ込みを入れつつ状況のみを簡潔に警告した。

「《ダークライダー》の騎馬突撃！」
チャージ

ファンタジームモで近接職をやってるくらいならこれで気づいてくれと祈りつつ、自身の相手取った骸骨戦士の一体を盾で阻み、もう一体に一蹴り^{ひとけ}くれて押しやる。こんな手が有効と気づけたのもここまでの交戦で見たクララの足癖の悪さに負うところが大きい。そのクララにしてもタリアのそれに学んだワケだが幸運なことに今のバハムートは知る由もない。

「ジャックに〈障壁〉、〈再生〉！」

タリアの声が響く中、《ダークライダー》は塵埃^{じんあい}を巻き上げ怒涛の勢いで突っ込んできた。

バハムートの警告をジャックは正しく理解した。骸骨戦士への応戦を放棄すると方形盾^{ヒーターシールド}をかざして防御姿勢をとる。しかしタリアの目には、それだけでは《ダークライダー》の突進を阻むには足りないように見えた。《ダークライダー》に対して盾を構えたジャックの、左側方を衝こうとする骸骨戦士を牽制の斬撃でいなすと回復に備える。

タリアの剣撃によろめく骸骨戦士の脇を、《ダークライダー》は華麗にパスしてジャックを襲った。

巨大な鉄板がたわんだ時のような、耳障りな轟音が辺りに響く。

《ダークライダー》の突撃により〈障壁〉はまたも一撃で破かれた。ぐぬぬと唇を囁むタリアの目前でジャックはインパクトの瞬間盾で穂先を受け流しつつ身体を時計回りに旋回させるとその突撃を右側方へと逸らして見せた。ジャックさんの本職ってスタントか何かだったのかと目を瞠る。

《ダークライダー》は突撃の成果が上がらなかったと見るとジャックと坑道壁面の僅かな隙間をそのまま走り抜けた。人馬一体の見事な体捌きで回頭してみせると、盾を支える左手も離し斧槍を両手に油断なく構える。先に戦った手負いの《ダークライダー》とはまるで違うその強さにタリアは舌を巻いた。

《Decisive War World》はMMOにしてはアクション性も高くモンスターたちの動きも多岐に渡り、相応の歯応えを味わう事が出来たのだがそれ故に敷居を高くしていた。そんなこともあって彼のゲームのプレイヤーはタリアも含め少なからず自分の腕に矜持を持っていた。

——だがこの世界のモンスターは所詮ゲーマーでしかない自分たちの上に行く。

向こうの世界ではせいぜい大排気量バイクくらいしか実際にはお目にかかったことのない一般人にとって、それを優に上回る嵩を持つ物体が同等以上の機動力をもって襲い掛かってくる様は脅威だった。

前衛を突破して自分たちの前に忽然とその姿を現わした強敵に、ボルトとサーラも慌てて後退る。《ダークライダー》が振り撒く殺意に怯み、先の対戦で見せた意気が嘘のように腰が引けている。『新品』の《ダークライダー》に、タリアが感じたのと同じ様な凄みを見出しているのだろう。

しかし幸いなことに《ダークライダー》の戦意は今もジャックに向いたままだ。思わぬ展開であるがその間も思考とは別に忙しなく

周囲の動向を把握していたタリアはこれを好機とも捉える。《ダークライダー》と骸骨戦士は図らずも分断された。いつものようにジャックに《ダークライダー》を抑えてもらい、その間に他の仲間で骸骨戦士の一群を殲滅するという青図を脳裏に描く。

「《ダークライダー》はジャックさんと回復役のわたしで抑えます。みんなは骸骨兵を先に！」
スケルトンウォリアー

タリアの叫びにそれぞれ交戦中の前衛陣、動向を見守っていたカッコが了解の声を上げる。後衛の二人に振り向くとアイコンタクトで応えてくれた。

タリアは視界の端でジャックが応戦していた骸骨戦士の接近に気づくと、振り向き様の《盾強打》シールドバッシュで跳ね除けた。怯んだところに左肘を振り切った勢いで踏み切り、空中捻りから右足のソバットを叩き込む。《偽神》タリアの臂力と遠心力が生み出した空中からの強烈な後ろ回し蹴りを食らい、骸骨戦士は堪らず転倒した。

「カッコさん、コイツの相手お願いします！」

華麗に着地を決めつつ骸骨戦士を間に挟んだ向こうで自分のお転婆振りに目を瞠るカッコにあとを託す。仰天顔の彼女がそれでも頷くの見届けてジャックのフォローをするべく振り向いた。

目の前ではジャックが斧槍の一撃を防いでいた。渾身の一撃を阻まれた《ダークライダー》がわずかに硬直する。その隙を衝こうとしたジャックを牽制するかのよう、《ダークライダー》の愛馬が両の前肢を振り上げた。ジャックはそれを避けるため、咄嗟に後退するが己の失敗に舌打ちする。

（こんな乱戦で《咆哮》は使わせない）

さおだ 棹立ちになった巨獣の頭部目掛け、タリアは跳ぶ。

（そっちがゲームに囚われないなら、こっちだってやりようがあるってこと！）

タリアの《兜割り》が巨獣の頭蓋骨を捉えた。

ボルトは接近戦下における射撃にだいふ慣れてきていた。前衛に

は気の毒だが彼らが攻撃後に間合いを取るのに合せて、針の穴を徹すように矢を射掛ける。

前の世界の自分ならとてもムリだった思い切りの良さだが、今ここで弓を引くのは強弓を苦もなく操る不敵なエルフ狩人ボルトであり地味な腐女子崩れの独女、中島矢子^{やこ}（24）ではない。

クララが飛び退いた隙を衝いて〈弾幕^{バラージ}〉のスキルを放つ。本来は複数の矢を連続的に放つことによって文字通り『弾幕』を形成して面を制圧する攻撃だが、弓職仲間に伝わるゲームテクニク『軸ずらし』を再現して射線を一筋に収斂する。

摩擦熱による赤光をまとって次々と襲い掛かる矢はその狙い^{あやま}を過たず、骸骨戦士の骨格を確実に捉えた。〈弾幕^{バラージ}〉スキルの放つ矢はその一本一本が目標の移動力^{あし}を奪うことを目的としていて重い。そんな矢を幾つも間絶たなく食らい、骸骨戦士が衝撃にその身を躍らせた。

ボルトの目の前でクララが勢い良く斬り込んで行く。剛の剣が閃き骸骨戦士はその身を粉碎されると地面に散乱した。

カッコは突き出された槍を体捌きでかわすと長剣による〈強打〉を叩きつけた。

（――動けてる）

アライアンスが壊滅した戦いやその後の逃走時は無我夢中だったが、今は落ち着いて自分の技を制御できている。自分がこの世界でもちゃんと戦えると言う事実はカッコに勇気を与えてくれた。

助けられて後、カッコは戦いに身を投じる必要がなかった。彼女を助けた一行は立ち塞がる敵を自分たちの力だけで排除してのけた。カッコはそのことに安心しつつもジャックの、あるいはクララの戦いぶりを観察し、イメージトレーニングを行って自分の牙を研ぎ直していた。

そしてついさっき目の当たりにさせられた少女の戦いぶりが、自分の闘争心に火を点けたのだと気づく。

（怖いのは当たり前だ、でも前に出る）

刹那の思考の後に〈強打〉によるめく骸骨戦士目掛け、更に追い討ちをかけるべく接近して左体側を押し出す。流れるように左肘を突き出し格闘スキル〈肘撃〉を食らわせると敵の身体が冗談の様に宙に浮いた。

（こっちの地力はおまえたちを凌駕してる！）

隙だらけの骸骨戦士に剣先を向け、カッコは渾身の突きを放った。

クララとカッコによって二体の骸骨戦士が斃されると、戦況は怒涛の如くパーティー側に傾いた。バハムートはサーラの使う足止めや威力こそ低いものの曲射軌道を描く攻撃魔法の援護を受けて二体の敵を良く抑えていた。そこに三人の火力職が加わる事により残る骸骨戦士も瞬く間に掃討された。

《ダークライダー》は二人の難敵と対峙しながらも自らの配下が全て討ち取られたことに気づいた。立ち足はだかる目前の二人と同等の技量を持つ者たちを五人も相手にするのは配下たちでは荷が重かったろう。自分も愛馬の首を獲られている。

——面白いと思う。『自分』をこの世へと遣わせた狂える冥王に感謝を捧げつつ、《ダークライダー》は愛馬に牽制を命じた。

頭部を失った不気味な巨獣が、前肢を浮かせると蹄を振りかざした。ジャックの目の前でタリアがそれを盾で受けてみせる。

そして本命の斧槍がきた。左上から振り下ろされる強力な斬撃を受け止めてみせるとその斧頭が驚くべき速度で引き戻される。次の瞬間、右隣で蹄の一撃を防いでくれたタリアの姿が出し抜けに消えた。

背後で響くサーラの悲鳴を聞きながら、タリアは右下方より抉り込む様に打ち上げられた斧槍の石突に打たれたのだと理解する。引き戻される石突を目の端で捉えたとみるや、余所見をするなとばかり

りに再び斬撃を浴びせられた。

(これほどとはな)

生きて帰れてたなら周知せねばならないと、ジャックは《ダークライダー》の強さに畏怖すら覚える。

「加勢する！」

タリアの抜けた穴を塞ぐようにバハムートが起った。その手には《ダークライダー》の斧槍もかくやという長柄斧バルディッシュが握られている。

「斧には斧だ！」

得物を防御役のそれから攻撃用のそれに替え、攻めに注力したバハムートの打撃はその本領を遺憾なく発揮していた。「バハムートに〈障壁〉！」という叫びにタリアの健在も知る。

「まるで怪獣映画だな！」

正面をバハムートに任せ、《ダークライダー》の右に移動して巨獣の前肢を牽制しながらジャックが軽口を叩く。バハムートは《ダークライダー》を睨み据えたまま叫び返した。

「怪獣上等さ！」

二大怪獣の暴風のような長柄武器ポールアームの応酬は続く。その脇を大剣を担いだクララが走り抜ける。

「総攻撃にゃ！」

クララはジャックの反対に陣取ると《ダークライダー》の左側面を襲った。

クララの〈薙ぎ払い〉を幾度も受け止めた巨獣の四肢もついに碎けた。タリアの入れ知恵を受け根気良くその作業を繰り返したクララは歓声をあげ仲間たちもその光景に沸く。

それは難敵の移動力兼補助戦力を奪ったことによる油断であったかも知れない。《ダークライダー》は膝を屈する騎馬から存外身軽にその身を躍らせると飛び降り様に旋風の様な横薙ぎを振るった。前衛陣はその意表を衝いたタイミングの斬撃を受け損ねて大きく体勢を崩す。

その隙に身構えた《ダークライダー》も、しかし満身創痍だった。すでに一度目の《冥王雷陣剣》めいおうらいじんけんを放ったその姿は大きく傷ついている。

それでも次の行動は《ダークライダー》が先んじた。バハムートに向け紫電を帯びた斧槍の穂先を突き出す。その軌道は屈んでいるバハムートの顔面にピタリと照準されている。

（これはヤバイか？）

バハムートが迫り来る凶器に覚悟をきめようかとした瞬間、甲高い音と共に頭上を赤熱した奔流が追い越していった。その怒濤のような攻撃を真正面から浴び、《ダークライダー》の突進速度が鈍る。頭頂部に熱の錯覚を感じつつ、タリアの良く徹る叫びを背にバハムートは長柄斧を振り上げた。その迎撃に斧槍は甲高い音と共に弾かれる。しかし《ダークライダー》は恐るべき臂力と執念でもってそれを強引に振り下ろす。

《障壁》がバハムートの平べったい額の上空でその斧頭をしつかりと阻んでいた。

「チェックメイトだ！」

バハムートの叫びと共に繰り出された仲間たちの攻撃が《ダークライダー》に殺到する。パーティーの前に立ち塞がった強敵は、こうしてその動きを永遠に止めた。

《ダークライダー》は敵手たちに惜しめない賞賛の念を抱きつつしばしの眠りにつく。この廃鉱の最下層を侵した《初源の渦》オリジナルヴァーテックスバックアップの呪いがある限り、自分という存在は一時的に損なわれてもじきに復活する。

そして、彼の敵が何処かで滅ぼされなければ再び見えることもあるだろうと、《ダークライダー》は好敵手と言える者たちの姿を記憶に刻んだ。

死闘の末に難敵は排した。一行は外念体や《ダークライダー》が

残した長剣、斧槍を戦利品として回収するとエレベーターを目指す。逸るカッコやボルトをタリアが制した。

この、いちいち慎重な事の運びがそのあとも続いた幾つもの苦難において自分たちを生き延びらせたと、常にそれとなく自分の主張を通してみせた小さな参謀の姿と共に、カッコはのちのちも思い出すことになる――

一行はできるだけ静穏な移動を試みた末、離れた場所から襲い掛かってくるモンスターとも遭遇することなく乗り場へと辿り着いた。心配されたエレベーターは健在だった。タリアたちが第七層に訪れる際に使ったエレベーターは貨室こそ待機してはいなかったが操作盤で呼び出すとそれも程なく降りてきた。

「うっわ、コレ実際に乗るとメツチャコワイ」

そう口にしたのはクララだけだったが、粗末な手すり以外はむき出しの貨室に劣悪な乗り心地というエレベーターはおそらくその全員が現代っ子な一行を青ざめさせるに十分なアトラクションだった。来た時とは異なり、途中の階層で戦う他のプレイヤーの姿は見かける事がなかった。誰もが沈黙する中、ボルトも無言の内に彼らが無事に脱出したことを祈った。

第一層の骸骨戦士相手には端から遠距離攻撃を仕掛けて殲滅した。タリアとクララ以外の備えを持つメンバーたちが一斉射撃によってモンスターを掃討する。

そして一行の進む先に、ついに外の明かりが見えた。廃鉱出入り口のかたちで薄暮の空が切り取られている。

「どうする？ 偵察してこようか？」

カッコはジャックの横顔を見上げる。彼は一つ唸ると左右に首を振った。

「外で待ち構えているモノが居るとしたら、多分そいつらはカッコ嬢の隠行くらい見破るだろうさ。ここは固まって行こう」

しばし考えたあと、カッコは思い当たる。

「――ああ、そういうコト」

短く呻くと後続の一行を振り返った。バハムートを除いたパーティーメンバーが、硬い表情でカッコに視線を返す。

「あんたたち、半端ないね」

嘆息するカッコに呑気なバハムートが惚けた顔を返した。

「なんの話だ？」

「外でPKだか盗人^{シーフ}が待ち構えているかも知れないからこのまま進もうって話だよ」

バハムートはその言葉に衝撃を受けつつも、理解の色を示しはつきりと頷いた。

実際には範囲攻撃魔法での一網打尽を警戒し、距離を取った上で逐次外へと出た。先鋒を担ったジャックはFPS経験者故かその走りも様になっていた。

結果的に恐れていた襲撃はなかったが廃鉱の外には人だかりが出来ていた。隊伍を戻したジャックたちが近づく^{ふる}と30人くらいからなる視線が彼らを迎える。

「ジャック！ 生きてたか！」

人だかりをかき分け、一人の人間族男性が声を上げた。ジャックと似たような年嵩で、その顔つきや年季の入った全身鎧^{つわもの}も同じく古強者を思わせた。しかし今はその表情も喜びに綻^{はな}んでいる。

「ライトニング！ お前さん、来てたのか！」

ジャックの声にも明るさが戻った。そうするとパーティーの他のメンバーも隊伍を離れてライトニングと呼ばれた男の周りに集まった。口々に再会を喜び合う。

「ライトニングのおっさん、さっきぶりだにゃ」

「いやそれはおかしいだろバカネコ。めっちゃ待たされたわ！」

彼らの親しげなやりとりにカッコは一人、状況に取り残された気分を感じていた。いつの間にか傍らに立ったバハムートがカッコの

肩を叩く。

「ライトニングは僕やジャックの戦士仲間だ、悪い人じゃないよ。他のみんなも知り合いたいだね」

彼の穏やかな声音を耳にしてホッと一息つく。

「それじゃライトニングさん、情報ありがとうございます。オレたちはこれで」

ライトニングの向こうで人だかりを作っていた内の一人、戦士風の獣人族青年が手を振った。ライトニングは半身で振り返ると「つき合ってくれてありがとう！」と手を振り返した。人だかりはゲーム的な別れの挨拶を口にしながら5、6人の集団に分かれると山道を去って行く。その彼らも歩きながら盛んに議論を戦わせている様子だった。タリアたちはそれは何とはなしに見送る。

彼らの姿が消え、気を取り直したバハムートが傍らのカッコを紹介すれば「これまた別嬪さんだな！」とライトニングは相好を崩す。ひとしきり挨拶が済むと何気ない風にジャックが切り出した。

「――で。エルクーンで何かあったのか？」

5. 廃鈺の死闘 I I I (後書き)

12／31…脱字、本文の表現及びルビの追加、修正を致しました。
大筋に変化はありません。

6. 異世界の夜 I

この世界に放り出される以前。ジャックと他三名はタリアと合流するまでの時間をエルクーンと呼ばれる都市で過ごしていた。

四人は各々がその市街地にある広場にてプレイヤーが自発的に開催していたフリーマーケット的なイベントを冷やかしていた。

その後、なんとなく集まったいつもの顔馴染みたちと雑談に興じた。

話のネタも尽きた頃、寝る前にもう一稼ぎするかと散らばっていく友人たちの中にあってライトニングやジャックたち五人がその場に留まった。

パーティーに誘うジャックたちに、今夜は裏で作業中の『ながらプレイ』で戦闘はちよつとムリだとライトニングは残念そうに答えた。

そうした理由で、ライトニングは一人エルクーンに残ったはずだった。

——そんな彼がこの場にいた。ジャックはタリアの懸念が的中したかと身構える。

「さすがリアルおっさん。嫌らしいくらいに察しがいいねえ」

ライトニングの言葉にジャックは「お前もだろうが」と苦笑で返す。彼は肩を竦めて見せると表情を改めた。

「まあ色々話さなきゃならんことがある。だがその前にどこかで腰を落ち着けようや。そろそろ日も暮れる」

ライトニングは空を見上げた。

アルタイゼン廃鉱出入り口はアルタイゼン山の西斜面にある。おかげで山中にあって陽の沈みは遅いようだが、それでも空を茜色に染める夕日の姿は既に木々の向こうに隠れていた。

「やれやれ野宿か。暖かくて安全な我が家での冒険なら徹夜くらいワケないんだが。この寒空の下でとなるとぞっとしないな」

釣られて恨めしように空を見上げるジャックにカッコが「それなら」と声を上げた。

アルタイゼン廃鉱と平地を結ぶ山道の途中、木々を分け入った先に粗末な小屋が立っていた。

カッコに案内されてきた一行はその佇まいに少々怯む。

「これはちよっと入るのがためらわれるな」

遠慮ないバハムートの言葉に案内した当人のカッコが苦笑する。

「ゲームだとこんなに薄汚れてなかったんだけどなあ」

3DMMOでよく目にする、ゲームマップ上の死にスペースを探すのがカッコの趣味の一つだった。

一部の好事家たちの間で楽しまれている『登山』なども彼女の好むところである。

ノンプレイヤーキャラクター

カッコはその折に見つけた、イベントもNPC（ゲーム内のプレイヤーキャラクター以外のキャラクターの意）も配置されていないこの小屋の事を思い出した。

その記憶を頼りに皆をこの小屋へと連れてきたのだが、そこで厳しい現実を突きつけられる羽目になる。

居並ぶ仲間たちも現代日本にあって3Kとは無縁だったらしく、その表情は一樣に冴えない。

しかし目の前のくたびれた小屋は、そこだけはゲーム時代と変わらず人の住む気配を感じさせなかった。

一行が逡巡する中、タリアが小屋の扉の前に立つ。彼女は扉の様子を探ると鍵などが掛かっていることを確かめた。

「――ここは魔法の冗長性に期待しましょう。ちよっと〈浄化^{リユージ}〉つてきます」

タリアは決死の表情で振り向いてみせると、勢いよく小屋の扉を

開いて中へと突入する。

「うわ」やら「ひぐ」などの可愛らしい悲鳴が続くことしばらくして、小屋のあちこちの木窓が開かれた。

一行はその開かれた隙間から黒い粒子っぽいなにかが舞い散る様子を幻視した。

皆は冷や汗を流しつつタリアの無事を祈る。それからしばらくの間、タリアの掃討戦は続いた。

時折咳き込む音や実に漠然^{おとし}しいクシャミの他、「バカじゃないの」だの「死ね死ね」などの物騒な声も漏れて来る。

仲間たちはタリアの戦いを固唾を呑んで見守った。

辺りがすっかり暗くなる頃、少々煤けたタリアが小屋の出入り口からまろび出てきた。

俯いたまま荒い呼吸を繰り返す彼女の、その白い装束の所々が戦いの激しさを物語るように薄汚れている。

クララが恐る恐る声を掛けようとした矢先、タリアは深呼吸のあと顔を上げた。

思わずのけ反るクララにギラリと不敵な笑顔を見せるとサムズアップを突き出す。

「お掃除完了です。^{ファンタジー}魔法万歳ってコトで」

マタギ小屋ってところかなと《導く灯り》に照らされた小屋の中の様子を見渡してジャックは一人ごちた。

小屋の中は簡素な作りであったが薪ストーブと思しき物が設えられている。

背後に〈耐寒〉の魔法を掛け直すタリアの声を聞きながら、リアルアルタイゼンの山中は狩猟期でも夜は冷え込むのかと埒もないことを考える。

「ざっと気になるところは掃除しました。今晚くらいでしょうからこれでがまんして下さい」

タリアの言葉に皆が十分だと口々に応えた。

実際小屋内部は薄汚れてはいるものの、しばらく居室として使用していなかった空間特有の埃っぽさや匂いも感じない。

まさに魔法万歳と言ったところだろう。

粗末な板張りの床に腰を下ろそうとするとボルトから待ったの聲が掛かった。

「手持ちの中に敷き物使えるかもしれない毛皮があるからちよつと出してみる」

彼は背囊を下ろすと一抱えはあろうかという灰色の毛皮を取り出して見せた。

「OK。加工後の生産パーツ状態だからいけそう」

一行はボルトに手渡された毛皮を何枚か使って居住空間の向上を済ませると次々に腰を下ろす。

「ダメ。もう動けない」

座り込んだカッコが深々と息をついた。

同感だと内心で頷きながらもジャックは済ませなければならぬ事案を思い出す。

「皆も疲れてるだろうが本格的に落ち着く前にライトニングの話を聴こう」

ジャックの言葉に板場の縁に腰掛けていた者も履き物を脱いで上がり込み、何となく皆が車座に座りなおす。

その動きは誰もが億劫そうで表情にも疲れが見えていた。しかし面倒臭がる素振りはなく寧ろ興味津々といった様子である。

ライトニングは皆を見渡した後、規格外の巨軀を器用に縮こませたバハムートに視線を止めた。

「よし。こっちも焦らすつもりはない。だがその前に確認させてくれ」

ライトニングは沈痛な面持ちでバハムートを見詰める。

「バハムート。お前、今回はアライアンス共成集団に参加してたんだよね？
他の仲間はどうした？」

その問いに、バハムートとカッコの表情が暗く沈んだ。自分たち

が生き延びた影で死んでいった仲間たちのことを今更ながらに思い出す。

それでもバハムートはライトニングの問いに口を開く。

「参加した12名の内、剣士二名、戦士二名、魔術士二名、僧侶一名は戦闘で死んだ。残る弓兵二名と僧侶一名とははぐれてしまつて安否を掴んでいない。でも状況からして生存は絶望的だと思う」

こうして一応安全と思える場所に腰を落ち着け、改めて10名にも上る人たちが殺されたという事実を聞かされると、それは一体どんなフィクションだと思いたくなる。

しかしバハムートら二人は実際に仲間たちが惨殺される光景を目の当たりにしたし、タリアたちも一人の遺体を目にしている。

それは、実際に起きた惨劇だった。

「了解した。まずはその話をするつもりだったんだが、ダンジョンで実際に戦闘してきたおまえらには言うまでもなかったようだな」
ライトニングは目を伏せると呟く様に続ける。

「そう、『こっち』の世界では『この俺たち』でも死ぬ。それが事実だ。わかつてるなら一先ずこの件はいい」

ライトニングは顔を上げると再び皆を見渡した。

「俺は残念なお知らせと、とても残念なお知らせ、更にとてつもなく残念なお知らせを持ってきた。とても残念なお知らせは今の件。次はどれがいい？」

皆がどんよりとした様子でため息をつく中、クララが手を挙げた。

「センセイ、先ずは残念なお知らせからお願いしますにゃ」

「よろしい、クララ君」

ムリヤリ気味に気を取り直した感じにライトニングが芝居掛かった調子で頷く。

「皆も基幹都市のアイテム保管所には色々貯め込んでいたことと思う。だが残念だったな！　なんとこの世には倉庫の施設が存在しないっ！」

一同から断末魔の悲鳴が上がった。

「ちょっとマジなのソレ！」

それが素なのか意外に普通の子女子っぽいテンションでクララがライトニングに駆け寄るとその肩を掴んでガクガクと揺らす。

「残念ながらマジだ。全オレサマも泣いた。アイテム保管所だったところにはすつとぼけたことに別の建物が建つとったわ」

わたしのコレクションがくと泣き伏すクララほどでもないが、誰もが憂鬱そうな表情を浮かべるとため息をついた。

倉庫の財産が当てに出来なくなったという痛手に現実的な不安を憶える。

「さっきのボルトの様子だともうわかってるかも知れんが、キャラのアイテムインベントリ内のブツは無事だ。所持金も念じればホレこの通り」

ボルトが片方の手のひらを広げて見せると、見慣れない硬貨が唐突にその上に出現した。

見ていた者たちの間でどよめきが走る。

「こっちの世界の人の前ではやるなよ？ やっちまったら手品だとも言って惚とぼける」

そう真剣に言い放つライトニングに周囲から「こいつやっちまっただんだな」と言う生温かい視線が集中する。

彼はわざとらしい咳払いでごまかした。

「あと補足するとだな、ボルトは背囊からアイテムを出す素振りをしてみせたがソレいらねーから。慣れればこのとおり」

再び手のひらを開いて見せるとその上には出し抜けに細長い陶製品が姿を現わす。バハムートにとっては生々しい記憶も新しい、回復ポーションの容器だった。

ほほうと見守る周囲から感心したような声が漏れる。

ライトニングは澄まし顔に微かな自慢の色を浮かべて「すぐ慣れる」と嘯うそいてみせた。

「素朴な疑問なんですが」と小さく手を挙げたサーラにライトニングは頷いて先を促す。

「アイテム保管所の変わりに何が建ってたんですか？」

その問いにライトニングは微妙な表情を浮かべた。

「うん、俺もまだよくわかってないんだが『名も無き神の商工会』って団体の建屋が建ってた」

「そういう情報が引き出せたって事はこっちの世界の住人とは意思疎通できるんだな」

ジャックの言葉にライトニングが頷き返す。

「ああ、こっちの人が使ってる言語はお約束どおり日本語じゃねーんだが言葉も通じるし文字も読める。試してねーけど書く方もイける気がする」

おっと話を戻そうと、ライトニングはサーラに向き直った。

「で、この『名も無き神の商工会』ってのは『あうたーそうる』って資源？　だか素材の取引を一手に担ってる組織なんだそうな」

わかんねー話だろ？　と一同を見回す。

「中途半端で不親切なチュートリアル機能だね」

ボソリと呟いたボルトに冷めた表情のサーラが「手抜きっぽいですな」と相槌を打つ。

「《外念体》^{アウトナール}ならこちらで説明できる。と言うより実物を見せた方が早いかな」

ジャックはライトニングと同じように手のひらを示してみせた。

「意外と難しいな」と眉をしかめ、ためつすがめつ自分の手のひらを睨みつける彼の姿はインチキ手品師のように胡散臭い。

その様子を見ながら（俺ってあーゆー風に見えてたのか）とライトニングは自重することを密かに誓う。

やがてジャックの手のひらの上に紫に輝く八面体が姿を現わした。

「ソレが《外念体》ってブツ？」

訝しむライトニングに頷き、《外念体》を渡してやると彼の表情がサツと冷たいものになる。

「――OK、わかった理解した」

そう無感情に呟いて《概念体》を押し付けるように返して寄越す

ライトニングの反応に、正しく彼が『チュートリアル』を受けた事を察する。

「とりあえずそいつを『名も無き神の商工会』に持ち込めばカネになるんだな」

「まだ実際には試していないがそういう事なんだろうと思う」

ジャックは《外念体》を仕舞うイメージを脳裏に描きながら答えた。取り出して見せたときは逆に手の中のものその感触が無くなる。「よし、この件もいいよな。倉庫にレア貯めてたヤツは俺も含めてご苦労さんてこったチキシヨウめ！」

そんじゃこのままインフラ周りの残念なお知らせ行くぞ、とライトニングが唸る。

「全チャット機能が消失しました。遠隔地の友人と念話的^{フレ}なナニかで会話とかムリです」

そう言えばそんな機能のことをすっかり忘れていたなと皆が互いの顔を窺い合う。

ダンジョンという危険地帯にあって先ずは目の前のことに対応しなければならなかったタリアたち、実際に差し迫った危難と遭遇していたカッコたち、いずれの状況も彼らにそれらの機能を失念させていた。

「ほんでギルド機能が消失してるっぽい。ギルド会館も無くなってるので設立手続きはおろか会館にインスタンスゾーンへ入り口があった関係上ギルドハウスが使用不能で当然ギルド倉庫もダメだ」

ギルドという言葉はMMOに普遍的に用意されているコミュニケーション形成システム或いは集団単位を意味し、ゲームによって様々な呼称が存在する。

パーティーやアライアンスとは異なり、その機能は戦闘単位としてのそれに限定されないケースが多い。

《Decisive War World》においては他のゲームにも見られるようなギルド員^{メンバー}専用のチャットチャンネルによるコ

コミュニケーション機能、ギルド員のみが入場できる固有マップの開
設機能、独自のエンブレムをキャラクターの外装に貼り付けられる
機能などといったメリットをもたらししていた。

その機能が根こそぎ消失したとあってギルドに所属していたカッ
コはため息をついた。

壊滅したアライアンスにあって彼女とバハムート、戦死した戦士
の一人は同じギルドに所属していた。

カッコはギルドハウスに設置されるギルド倉庫にも幾つか有用な
アイテムを保管していたのでその落胆は大きい。

今までは自分が生き延びることに必死で思いも及ばなかったギル
ドの仲間たちのことも途端に気になり出した。

他のギルドメンとの連絡が困難になった事実思わず唇を噛みしめ
てしまう。

「ギルド会館の代わりに建ってたのはわかりやすい。笑っちゃうか
もしれんがなんと『冒険者ギルド』でありましたとさ」

一同からまたどよめきが上がる。

「——こっちの冒険者ギルドは、そう日本語に変換されて理解でき
るんだが、今時の若いゲーマーがその言葉から想像するようなのと
は大分様子が違う」

ライトニングは自分の考えを吟味するように虚空を睨むと、しば
らくして口を開いた。

「どちらかつつと『冒険者の酒場』がチェーン展開してる感じだ
な。情報提供や仕事の斡旋はしてくれるけどどちらも有料だし、仕
事を達成したからと言って冒険者ギルドから報酬が出るわけでもな
い。あくまで仕事の斡旋でワケだ」

ジャックだけは頷いているが、他の面子はわかったようなわから
ないような顔をしている。

皆の顔を眺めながらライトニングは「冒険者の酒場じゃ今時通じ
ないか」とため息をついた。

「要するに冒険する者のギルドじゃなくて、冒険者相手の商売人のギルドって捉えるのが間違いないと思う。そういう商売人が組織を形成して各基幹都市に店を構えてるワケだ」

ようやく皆の顔に理解が浮かぶ。ライトニングはホッすると表情を崩した。

「よし、伝わったな。おまえらの前に説明してやったやつらもこれがなかなかピンとこなくてなあ」

ライトニングは再び口を開こうとするが苦い表情を浮かべて固まった。

「やべ、さすがに口ン中が乾いてきた。ちょい待て、今ポジション飲むから」

そんな彼をタリアが止める。

「ポジションだともったいないですからちょっと待って下さい」

タリアは自分の手のひらに意識を集中するつもりで見詰める。眉をしかめる彼女の表情を皆が微笑ましそうに見守るが集中している本人は気づかない。

「わ、ホントに出てきた。はい、ライトニングさん」

仲間にはすでに馴染みとなった小振りな陶器を「粗茶ですがどうぞ」とライトニングに渡す。

受け取った本人とバハムート、カッコらが不思議そうにそれを見詰めた。

「中身はご存知『低レベルキャラの狩りの友』、《ミルクティー》です」

にっこり笑うタリアを狐に摘まれた様な表情で見ながら、ライトニングは陶器の栓を抜いた。途端に甘い香りが辺りに漂う。

バハムートはその香りに、ああコレの匂いだったのかと魔鋏第七層での出会いの時のことを思い出す。

ライトニングは無造作に口を付けると喉を鳴らして嚥下した。あつという間に飲み干し「ンまい!」と大きく息をつく。

目の前でミルクティーを飲み干すライトニングを目にした途端、

カッコは自分の喉も酷く渴いていることに気づいた。

「タリアさん、悪いけどわたしももらえないかな」

カッコの言葉尻にバハムートが「僕にもお願いします」と乗っかる。タリアは笑顔のまま「もちろん」と答えると、両の手に呼び出したミルクティーを二人に渡した。

「――リアたん、わたしにもお願いできるかにゃ？」

ライトニングの後ろでしばらく伏せていたクララがユラリと身を起こすとその手を伸ばしてきた。顔が怖い。

タリアは若干怯みつつもクララにミルクティーを渡した。

「呑まなきゃやってらんにゃいにゃー！」

實際耳にすると少々苦しいニャンコ語尾で喚いてクララが勢い良く陶器の栓を抜く。

豪快に喉を鳴らしながら嚥下する彼女に苦笑しつつ、カッコとバハムートもミルクティーに口を付ける。

砂糖をたっぷり含んだ子供だましのような甘さのミルクティーはそれでも味は悪くなく、華やいだ香りも伴って二人のどこかさぐっていた気分を慰めてくれた。

辺りに漂いだした紅茶の香りに、ボルトはどこかぼんやりとした頭でタリアが温めてくれたミルクティーの味を思い出す。

この世界で飲んだそれは凡百なファミレス以上、近所の喫茶店のマスターが淹れてくれた紅茶未満と言ったところだった。

疲れた身体を休ませたこともあり、ボルトの精神もずいぶん弛緩し始めていた。

（もつとマスターの紅茶飲みたかったなあ）

ボルト――中島矢子^{やこ}は、今はもうとどかないかつての世界のリアルを思い浮かべながら仲間の少女に声を掛ける。

「タリアちゃん、わたしにもお紅茶貰えるかなあ？」

かつて仲良くしていた後輩の娘らにモノを頼む時のノリで、ボルトはそう言葉を発していた。

7. 異世界の夜 I I

自分へ集まる仲間たちの視線に、ボルトは自分の顔がみるみる紅潮しているだろうことをハッキリと自覚した。

あちらの世界でP Cを前にしていた時は自キャラのフリに隙を見せたことはない。

或いは、『ボルトがゲーム内の自分』という意識が希薄だったせいで、ボルトを出すような発言がチャット上に零れることがなかった、と言った方がより事実在即していたかもしれない。

チャットへの発言は自然に『ボルトならこう言うだろうな』という脳内変換を経て打ち込まれる。

中島矢子にとってはM M Oでの自キャラは自己投影の対象ではなく、あくまで画面上でその活躍を楽しむ登場人物という認識しかなかった。

それなのに今回の異世界送りである。お節介な女神は微塵の齟齬もなく中島矢子がボルトに成ったという事実を理解させてくれた。

最初の内はどうすれば良いか混乱した。極力発言を控え、細心の注意で言葉使いも選んだ。

その内必要に迫られ、こちらの世界で『ボルト』の力を行使するにつれ自分の中の『中島矢子』は小さくなっていった。と言うより目の前の出来事に中島矢子では耐えられなかった。

この苦境を生き抜くには中島矢子ではなく、ボルトでなければならぬ――

中島矢子はその危機感に基づき、いつのまにかボルトを『英雄的なペルソナ』に仕立て上げ、自分というモノを委ねてしまった。

しかしダンジョン内などとは比べようもない安全な場所でありラックスし、気が緩んでいたところにあちらの世界を連想させるモノに

触れ、そのペルソナの防壁も脆くなってしまうていた。

（――昔、学校の先生をうっかり『お母さん』て呼んじゃった感じ？）

恥ずかしさからそつと様子を窺ってみると仲間たちの浮かべた表情は三種類に分かれた。

サーラとライトニング、カッコにバハムートは驚いた表情を浮かべている。逆にジャックとタリアは顔色も変えず、クララに至っては意地の悪いニヤニヤ笑いを浮かべていた。

「えーと、別にオカマとかじゃないです。あっちの世界では女やってましたスミマセン！」

勢い良く頭を下げる。

「――そういうコトもあるわよね」

ポツリとカッコが呟く。しかしこのボルトの告白に、一拍遅れて敏感に反応した者がいた。

「っノオオオオウ！」

ライトニングが魂の底を揺さぶる様なシャウトを上げる。

「何でお前さんがそんなに驚く？」

両手で頭を抱えて激しく身悶えるライトニングに、それにこそ驚かされたジャックが声を掛ける。

「だってだって」と繰り返した後、^{のち}ほどなくしてライトニングは己が罪を叫んだ。

「だってコイツとは釣りしながら散々猥談したんだもんよおおおとおお！」

いいトシして何をやってるんだと嗜めるジャックに続いて、ボルトの追い討ちがライトニングにとどめを刺す。

「えと。その節は、大変参考に、なりました」

真っ赤になって俯いたイケメンから、チラチラと自分に向けられる上目遣いにライトニングは憤死した。

「まあこっちに來た以上、ボルトさんは正真正銘ボルトさんですか
ら」

タリアが何でもないといいた風にミルクティーの容器を渡してくれる。

「わたしもこっちにきて性別が替わった身の上です。お互い早く慣れるように頑張りましょう」

カミングアウト

さらに告白したタリアに、またも一同から驚愕の声が上がった。「タリアちゃん、男の人だったんだー」

哑然とするボルトに「はい」と柔らかな微笑が返ってくる。

「わたしがボルトさんはネナベさんじゃないかなーと思ってたのと同じで、ボルトさんにもわたしがネカマだとばれてると思ってたんですけど」

「えー、タリアちゃんもの凄い丁寧でシッカリしてるから、わたしはてっきり育ちの良いお嬢さんかなと思ってたよお」

あちらの世界でそういった知人もいたボルトは、タリアに似たような雰囲気を感じていた。どこか感心したようなため息を漏らしつつタリアを見詰める。

「わたしはアラサーのうふ系ロリお姉さんかとおもってたにゃー」
クララは愕然とした表情でタリアを見ていた。

「二次元じゃあるまいしそんな都合良い生き物がいるかつ！」
復活したライトニングがクララを小突く。

「そう言うライトニングのおっさんは驚いてにやみたいね？」
小突かれた頭を摩りつつ不満げな表情を浮かべるクララに、ライトニングがドヤ顔を向けた。

「『こんな可愛い娘が女の子のはずないじゃないか』」

クララは「ナニソレ、サムイ、フルイ」と喚いてわざとらしくひっくり返ってみせる。

「アラサーなのは合ってますよ、もうすぐ29の28歳独身でした」
タリアの声にバハムートが「僕と年代か」と唸る。

「なるほど、色々物怖じしないと思ったら男の人だったんですね。しかも結構『大人』の」

カッコが微妙に丁寧語になりながら呆れたようなため息を漏らし

た。ようやく成人にリーチが掛かったカッコからしたら、30近い男なんて既におじさんといった印象だ。

そんな男性がローティーンの少女然としたキャラを使っていたことには、正直引くモノも感じた。しかしネットゲ^{ネットゲーム}ではまああることだし、タリア本人に不快な目に遭わされたわけでもないのです。そのへんは深く考えないことにする。

そんな風に考えていると、どこか平坦なサーラの声が耳に届いた。「――わたし、タリアさんには色々相談に乗ってもらったんですけど」

皆が騒いでいる中、いつの間にかサーラは床を睨みつける様に俯いている。

「学校のこととか流行りなケータイのこととか」

サーラは下を向いたまま話し続けた。

「お化粧品のこととか」

その声に不穏なモノを感じ取ったのか、皆が彼女の様子を窺う。

「お洋服の話とか」

どんどん陰悪になる声色に流石のタリアも笑顔を浮かべながら冷や汗を流し始めた。

「し、下着の、とか」

「リアたん、アウトっ!」

地獄の底から響くようなサーラの声に、クララが物凄い勢いで立ち上がった。他の皆も「え? ナニしてくれちゃってるの?」と言いたげな蔑む目つきでタリアを見る。

「き、訊かれたから答えただけで、『試しに今どんなの履いてるの?』とか紳士にあるまじき態度を取ったワケじゃないですし!」

真っ赤な顔で慌てて叫ぶタリアに、サーラが涙目で吼える。

「そもそも何でスラスラ答えられたんです? そんなコト一たりサーチまでする変態さんだったんですかっ?!」

「な、違っ! それは、妹の、そう妹の買い物に付き合わされてたからたまたま知識があっただけで」

「兄と下着を買いに行く妹なんていません！」

「うちの妹は行くんですっ、主に『僕』が財布的なイミで！」

「まあ、タリアちゃん」

子犬のように吼え合う二人の間に、いつの間にか平静さを取り戻したボルトが割り込むと優しくとりなす。

「とりあえずサーラちゃんにごめんなさい、しよっか？」

二人ほど精神的ダメージを負ったものの、一行はようやく落ち着きを取り戻した。サーラとタリアが俯いてはいるが、話を再開できない状態ではない。

「それにしてもジャックさんは全然驚かにかかったね？」

クララが不思議そうに問うとジャックは肩を竦めた。

「亀の甲より年の功ってね。ネットゲが長いとそれなりに察せられるようになったし」

彼の返事にクララが唸る。

「ボルトんは判り易かったけどリアたんはわからなかったにゃー」

「いやタリアたんは判り易かったろう、古き良きネカマって感じでライトニングが涼しい顔で口を出す。呆れたようにカッコが首を振った。」

「なんか業の深い話ね」

「そんなコトよりバカネコ、おめーは告白カミングアウトしなくていいのか？」

ライトニングはクララを胡乱げな目つきで眺める。

「は！ にゃにを言ってくれちゃってるワケ？」

彼女はわざとらしく鼻を鳴らすと胸を反らして立ち上がった。

「こんにゃノリでもアテクシは立派リアルなリア女デシテヨ？」

ライトニングは「うへえ、マジかー」と派手に顔をしかめる。

「というより自分がアレだって自覚はあったんだな」

ジャックは生温かい目でクララを眺めた。

「オタ女がみんな腐女子だと思うにゃよ？ わたしは二次元なら女

の子の方が好きだーっ！」

ライトニングが「聞いてねーよ」とクララを蹴倒すフリをする。彼女はそれに乗っかると大人しく腰を下ろした。

己が自爆でうら若き『乙女二人』に重大な精神的被害を与えたボルトがわざとらしく頭を掻いてみせる。

「なんか『俺』が発端で脱線しまくってごめん」

バレたのはバレたこととして、『彼』はボルトとして仕切り直すと決意したようだ。

ライトニングはその決意に頷いてみせると表情を真剣なものにした。

「場の空気がすっかり緩んじまったがまあコレくらいの方がいいか」
彼は一つ大きく息を吐くと切り出した。

「最後にとてつもなく残念なお知らせだな」

皆が神妙な顔つきになるのを見届けると、ライトニングは重々しい口調できっぱりと告げる。

「俺が知る限りエルクーンで八人のプレイヤーが殺された」

呻き声は漏れたが見渡す顔から驚愕の色は見取れず、ライトニングは口角を上げた。

「やっぱり予想はしていたって顔だな」

「――ああ。同士討ち《フレンドリーファイア》制限がないって気づいた時点だね」

憂鬱そうに顔を歪め、ジャックは両の目蓋に手を当てるとマツサージする様に揉み始める。

「フリーマーケット」
「フリマの客だったバカ二人が血迷ってプレイヤー六人を次々斬り殺しやがった。んで俺含む五人でそのバカ二人を始末した。合わせ
て八人」

ライトニングの告白に皆が息を呑む。

「幸い広場にはこっちの世界の人も居て凶行を目撃してくれてた。」

その証言もあって街の衛視ガードからの事情聴取は直ぐに済んだよ。『ご協力感謝します』とか言われちゃった」

感情の抜けた表情のライトニングに一同は言葉もない。

「八人の身元確認やらは街が処理することになるらしい。確認なんて取り様ないと思うがな」

そこで一息ついたライトニングの顔に、自嘲げな笑みが浮かぶ。

「人を殺やった精神状態とか、その辺話してやれたら良いんだが何分まだてめえでも整理がついてねーのよ」

無意識なのか、ライトニングが右の拳と左の手のひらをしきりに打ち合わせる。

「先の奴らに話した時は俺が殺ったとまでは明かさなかったしな。と言うより、必死に忘れたフリをしてごまかしてた感じか」

幾度目かの大きなため息をつく。「ま、それはそれとして」ライトニングは無理矢理気味に眦まなじりに力を込めた。

「とてつもなく残念なことにヤバイプレイヤーまでもが俺たちの敵となる。今から覚悟だけはしておけ」

ライトニングが自分の太腿を大きな音を立てて叩いた。

「以上終わり！」

小屋の中では居心地の悪い沈黙がしばらく続いたが、クララの身も蓋もない「おしっこ」と言う乙女にあるまじき発言で弛緩した。ワザとやってるなら捨て身な献身とも言える。

追従する声が全員から上がり、男女別れて小屋の外で用を足すことになった。

鎧を脱ぐとまとめて小屋の一角にまとめる。小屋の裏手にサーラの魔法で明かりを灯してもらう関係上、女性陣が先発することとなった。

タリアはこの時の為に予め用意しておいた布切れを何枚かずつ三人の女性に配った。

サーラにはまだ恨みがましい目で軽く睨まれたが、彼女はきちんと礼を言って受け取ってくれた。サーラこそ育ちの良いお嬢さんなんだろうなとタリアは思う。

サーラの魔法によっておよそ10m四方を照らす魔法の明かりが灯る。ご丁寧に〈静寂^{サイレンス}〉の停滞場も重ねがけされた。

一人が用を足している間、残る三人はそちらに背を向けて居心地の悪い沈黙の内に順番を待つ。

そして手間取りそうだと自分から最後に回ったタリアの番がきた。

(――ホントに無くなってるなあ)

覚悟も理解もしていたがそこにあるべき物がなかった事に、タリアは決して軽くない喪失感を覚えた。

それと共に、魔法の明かりに白々と照らされた自分の下腹部の曲線が妙に艶めかしく感じられてしまい気恥ずかしくもあった。

加減がわからないので大きく脚を開き気味にしてしゃがみ込む。

『タリア』にとっては初の女性としての排泄行為だったが『身体』の方はちゃんと心得ていたらしく、滞りなく用は足せた。

脳裏に器官の様子を思い出しながら不衛生にならない様に残滓を拭き取り、その布は自然由来の素材だし問題はあるまいと暗闇の向こうへと始末した。

「お待たせしました。済みました」

待っていた三人の所へ戻り声を掛ける。「ちゃんとできた？」と意地の悪い笑みを浮かべるクララに、タリアは頬を膨らませて見せた。

出すものを出すと皆、空腹を訴えた。特にダンジョンで戦闘をこなしてきた者たちは飢えていた。各自『食事』になりそうな物を脳内インベントリフレイムに求める。

ライトニングとボルトが釣果を死蔵していた他、タリアがクリームシチューに家禽の肉と緑黄色野菜の串焼き、丸パンを相当量持ち歩いていた。

わたしはどこの世界でも貧乏性プレイなので、とタリアは笑った。

「なんて温^{ぬる}ゲーなんだにゃー」

小屋内には熱気と食欲をそそる匂いが充満している。悲惨な脱出行の途上で真つ当な食事にありつけることを評してクララが鼻を蠢かしながらうっとりときどき呟く。

薪ストーブにはボルトが供出した燃料がくべられ、十全とその機能を発揮していた。ストーブの炉ばたには木串に口から尻尾までを貫かれた淡水魚が並び、その身を熱に炙られて脂を噴いていた。

ストーブの天板には鍋や薬缶が掛けられる様になっており、今はシチューを満杯にした薬缶が二つ並んでいる。

「奥の方へ回してください」

サーラは調理担当のタリアから温められた肉と野菜の串焼き、丸パン、銅のカップが載った木製プレート（ボルト即製）を受け取ると仲間たちへと順に手渡す。プレートが行き渡った所にタリアが薬缶を持ってきた。

「シチュー配りますのでカップを出して下さい」

掲げたカップにホワイトクリームのシチューが注がれる。白く湯気をあげるそれは、食欲をそそる匂いで仲間たちの鼻腔をくすぐった。魚の串焼きは一つのプレートに並べられ皆の中心に置かれる。

配膳が終わり、タリアも腰を据えるとみなが何となくジャックを見詰めた。ジャックはそんな仲間たちに頷くと手を合わせた。

「いただきます」

異世界に放り込まれてのち、最初の晚餐が始まった。

8. 異世界の夜 III

しばし一行は夢中になって食事に集中した。

さすがに木工スキルを修めたボルトでもろくな道具がないままでは木匙を作るのも難しかった為、シチューはカップから啜^{すす}る事になる。

多少は品のない音が響くが気にするものは誰も居ない。夢中でシチューを流し込み、具は木串で刺して口に放り込む。

シチューは現代日本人だった一行の舌も満足させた。クリーミーでコクもあり程よく効いた塩っ気と旨味、スパイスが食欲をどんどん増進させる。

カップの底が見え出すとちぎったパンで拭うようにして残さず食べ尽くす。そこへタリアがおかわりを注いで周った。

肉と野菜の串焼きも美味だった。家禽の肉や野菜も少々謎めいていて双方とも日本の食卓に登る物よりやや野趣で勝る風味だったが嫌悪感を覚えるものではなく、むしろ珍しくもあって好ましかった。塩焼きにした淡水魚にしてもゲーム時代において調理レシピの材料に供されただけあって、こちらもなかなかイケる味だった。ジャックの鮎^{いわな}以上岩魚未満という解説に皆が分かったような分からないような微妙な感慨で頷いた。

「――最近『あっち』で食ってたメシより真っ当だった。ご馳走さん！」

食欲中枢の命ずるまま、せっせと料理を胃袋に詰め込んだライトニングが満足気に一息つく。あちこちで無言の賛同に頭が揺れる。「皆さん一人暮らしが多いんですか？」

一足先に食事を終えていたタリアが、新たに掛けていた薬缶の調子を見ながら訊いてみる。肯定の声が幾つか上がるのを背中に聞きながら「なるほど」と肯く。

「うちは母が作ってくれてたのでさすがにあっちのご飯の方が美味

しかったですね」

ほどなくして、ちまちまといった感じに食事を摂りつつもそれなりに健啖なところを見せたサーラが最後のパンでカップのシチューを綺麗に食べ終わると皆の食事が終わった。

「それじゃ食後のお茶でもしながら軽く今後について話でもしましょうか」

夕食に使った食器は小屋の隅に追いやられ、シュークリームが積まれた木製プレートがでんと置かれる。こんなものまで、と言いたげなカッコ、バハムート、ライトニングを置き去りにしてボルトとクララが歓声を上げつつ早速手を伸ばす。

「ささ、魔法攻撃力が上がる逸品です。糖分が脳を刺激すれば話し合いもはかどるというもの。お腹壊さない程度にどうぞ」

カッコはシュークリームを手に取りつつ、にこやかなタリアの笑顔を窺いながらホント良く化けてるなあともはや感心する思いだった。何気なくかじったシュークリームの美味しさに驚いているとジャックが話を始める。

「それじゃ明日からの予定だが。我々最初にパーティーを組んでいた者で話し合った時は麓にあるサンミレーの町を目指すつもりだった」

落ち着いた彼の説明に「なるほどいい案だな」とライトニングが頷く。

「ライトニング、情報は有り難かったがお前さんはどういうつもりでここまでやってきたんだ？」

「おまえらと会えなかったらそのまま帰還スクロールスクでエルクーンに戻るつもりだった。会えたらまあどうするかなと」

ライトニングは「そんな難しいコト考えてたワケじゃねーんだ」と茶を啜る。

「とりあえずエルクーンに戻ればあっちにはあっちでいつもの面子がつるんでるしな」

その言葉にサーラが嬉しそうに声を上げた。

「それじゃアーサーさんたちも無事なんですね！」

サーラの明るい声にライトニングが眼差しを和ませる。

「無事だ。エルクーンに戻った連中で一先ずまとまってる」

ライトニングは一つ頷き「そう言えば」と眉をしかめた。

「アーサーたちで思い出したが。あいつらが言ってた事がちょっと妙だな」

ライトニングは己が記憶を確かめるような調子で話を続ける。

ペルセニウムセルティネカ

ネームドモンスター

共成集団

「氷龍と火竜。それぞれNM狩りしてたアライアンスが壊滅したん

だがその生き残り連中の話がおかしなことになってるんだと」

「おかしいこと？」

ネームドモンスター——固体名を持つ強力なモンスターの狩りに臨んでいたというプレイヤー集団の壊滅にジャックは驚きと共に訝しむ声を上げた。その彼の問いにライトニングも首を傾げる。

「アーサーとクロネがそれぞれ聞いた話だと、どちらもあの『異変』

生命力

まで順調にNMのライフゲージを削って双方とも20%を割ってたらしいんだ」

「『発狂モード』に入ってたわけだね」

確認するバハムートにライトニングが頷く。

「ペルセニウムと戦ってた連中の話じゃやっこさんは『こっち』に来てからダメージが回復したようにツヤツヤになってたらしい。『まるでそれまで交戦していた事実なんてなかった』ようにな。当然ドラゴン型NM特有の『発狂モード』も発動してなかったって話だ」

その話にカッコが思わずといった感じに口を挟んだ。

「ちょっと待って。わたしとバハムートがゲームから引き続き相手してた《ダークライダー》は〈雷陣剣〉らいじんけん使ってくるほどダメージ負ってたよ」

その慌てたような声にバハムートも頷いてみせる。

「待って。俺の話には続きがある。ペルセニウムの方はそんな感じだったんだが一方のセルティネカがまさに『発狂モード』継続中だったらしい。そのおかげでこっちへ飛ばされたばかりのプレイヤー

ーはほとんど対応する間もなく火竜様ご自慢の火炎攻撃フルコース食らってほぼ全滅。生き延びて情報をもたらしてくれたのはこりやヤバイって転移することを選んだヤツだけだったとか」

「セルティネカと戦った人らは僕たちと同じってことか――」

バハムートの呟きにそういう事になるな、とライトニングが頷く。「――そこでだ。俺は今カッコさんが話してくれたことを聞きながら、自分の頭ン中の情報と並べてみて以前に小耳に挟んだ小ネタを思い出したぜ」

それが癖なのか、ライトニングは何かを思い出すように虚空を睥む。

「ペルセニウムの二つ名、《氷龍》のリュウは朝青龍の龍って難しい字を当ててたろ。対してセルティネカの《火竜》は恐竜とかの簡単な竜って字を当てている。憶えてるか？」

一同が口々に同意するとライトニングは頷いた。

「OK。んでここからが小ネタなんだが英語圏サービスだと難しいほうの龍を『ドレイク^{drake}』、簡単な竜の方を『ディノク^{dinok}』って表記してるんだそうだ。それぞれドレイクは『light dragon』、ディノクの方は『dark dragon』で説明さてるらしい」
皆から一斉に感心したような呆れたようなため息が漏れた。

「こうなると《ダークライダー》とセルティネカの共通点を思いつかないか？」

タリアが「はい、先生！」と元氣良く手を挙げるのに「ホイ、タリア君」とライトニングが答えを促す。

「《ダークライダー》もセルティネカもズバリ『闇』っぽいんです！直球だった。

「ンだ。なんでそうだったかまでは見当つかねーが、こっちに飛ばされた時に戦闘状態だったやつらはそこで文字通り明暗分かれた可能性がある」

サンプル採れりゃいいんだがとライトニングは頭を掻き筆る。

「明暗と言ってもペルセニウムと戦^やってたやつらも壊滅しちまった

んだけどな。ほとんど削れないまま飛ばれて上空から一方的に殲滅されたらしい」

彼は大げさに肩を竦めて見せた。

「というかもう空を飛べる頭の良さげなモンスターは屋外じゃ事実上倒すのムリになったと見ていいだろ。ペルセニウムなんてテレパシーっぽいナニかで嘲笑叩きつけてきたって話だ」

しかもそのテレパシーがロリボイス風味だったらいいというライトニングの補足に「ペルたん幼女化ハアハア」とクララが興奮する。他の者の脳裏には「あれ雌だったんだ」という感慨しか浮かばなかった。

「脱線したが俺はとりあえずトンボ帰りしなかったらジャックたちと合流できたと思ってってくれて言い残してきた。サンミレーまで付き合うぜ」

ライトニングは話を戻すと同行を告げる。

「わたしたちも一緒にさせてもらおうか」

バハムートの方へ振り向きながらカッコが確認すると彼も頷いた。「この状況下でソロだとかペアだとか言ってられんわな。俺は大抵のゲームだとソロってきたんだがこのゲームではお前らやアーサーたちとつるめて良かったと心底思ったぜ」

ライトニングはしみじみと呟くとシュークリームに手を伸ばす。

「それでは明日は朝からサンミレーを目指すと言うことでいいかな」ジャックが話をまとめると皆が頷いた。

「それにしてもアーサー先生たちは大丈夫なのかにやあ」

クララはシュークリームを頬張りながら龍人族魔導師の偉容を思い出しつつポツリと漏らす。

「んあ？ 魔導師のやつら二人がそろってりやエルクーン辺りなら大丈夫だろ」

シュークリームを飲み込みながらライトニングが言い放った。

「クロネなんて『リアルサーラちゃんを拝むまで死ねない！』とか言ってたしな。いよいよヤバそうだったら隠れるなりなんなり頭使

うべ」

「それにゃんて死亡フラグ」

クララの面白がる声にサーラはエルクーンで別れたウサミミ獣人娘を思い出して苦笑いを浮かべる。クロネはゲーム時代からネカマをカミングアウトしている男性プレイヤーでなにかとサーラを構ってくる。サーラの容姿がツボだというのが今となっては『彼女』になったクロネの弁である。

「あ。そう言えばアーサーから預かってた物^{モン}あったんだ。ホイ《魔法^マ素材》」

ライトニングはそう言うのとセカンドバッグほどの大きさの革袋を取り出し床に置いた。ゴトリと音がしてそれなりの重量があると分かる。

「おー。さすがアーサーさんです」

タリアが嬉しそうにライトニングの方へ振り向くと彼は頷いた。

「好きに使ってくれってさ」

タリアは日本人らしい仕草で革袋に手を合わせると、うつすらと水色がついた角砂糖の様な物体を掴み出す。《水^{クリエイトウォーター}創造》を始めとした物質創造系魔法の素材として機能するアイテムである。

所謂『生活系』というより『戦闘系』だった《Decisive War World》において、ゲームの時はお遊び要素として捉えていた諸々がここにきて俄然意味を持ち出していた。恐らく初めから『そういう意図』で以ってゲームはデザインされていたのだろうと今になれば分かる。

「ゲームの時のアイコンそのままですね。分かりやすい」

彼女は自分の手のひらの上のそれをためつすがめつして一同を見渡した。

「普通の水が飲みたい人います？」

タリアの問いに「のども渴いてないしもったいないから遠慮するにゃ」とクララが答える。他の者も同じように首肯したのを確かめてタリアはマナマテリアルを袋へと戻した。

その後は廃鉱での戦闘で気づいた点をそれぞれが語り、それについて皆で意見を出したりと話はなかなか尽きなかった。ジャックも臨死体験からの復活を語ってみせ、ならばエルクーンでの犠牲者も、となったがライトニングは悲しそうに否定した。

凶刃に倒れたプレイヤーたちがあっけなく斬り殺されるさまを実際に目撃したライトニングには、彼、彼女らがその死のダメージに抗えたとは到底思えないという。

「ボリアからエルクーンに出てきたばかりって装備だったよ」

ボリアは日本国内サービスにおいてスタート地点となる都市であり、同じく国内サービスにおいてゲームの舞台となるラフォニス島の一角を治めるライルネス公国の首都である。

プレイヤーはその首都近傍でレベル20ほどまで経験を積んでからラフォニス島の各地へと冒険の駒を進めるのが一般的なゲームの流れだった。

エルクーンの街もレベル20からのキャラクターの受け皿として機能していた。

「高レベルほどバケモノ度はウナギ登りなゲームだしね」

誰かが呟いた言葉が悲しい沈黙の中に消えていった。

交替で火の番を置いて一行は睡眠をとることにした。メンタル面を考えて先ずは元の世界の女性陣に休んでもらうことにする。タリアの目から見てもサーラとカッコは既に限界といった様子だった。

最初の火の番にはタリアとジャックが就いた。バハムートとライトニングも何だかんだと言え人死を目的の当たり^{ひたし}にしている。それを理由に先に眠るように奨めた。

二人は抗うことなくそれに従った。おそらく元の世界では彼らも一般人であつたらうし正直キツイところもあつたのだろう。

しばらくすると皆が寝静まり、どこか疲れを感じさせる寝息が
ちこちから聞こえ出した。

「――ジャックさん、色々ありがとうございました」

タリアは薪ストーブの炉内で踊る炎をじっと眺めるジャックに声
を掛けた。

「――ん。ああ、そちらこそ」

彼は振り返ると差し出されたカップから立ち昇る香りに眉を上げ
る。

「内緒ですよ？」

タリアは人差し指を唇に当てて笑ってみせた。我ながらあざとい
ポーズだと思いつつジャックがカップを受け取るのを待つ。

「それじゃ有難くいただきますか」

ジャックは相好を崩すとカップを手取る。ヒンヤリとしたカッ
プの底を手のひらで包むように持って改めて鼻を近づける。果実由
来の芳香が鼻腔を満たした。

「ブランデーってチェイサー要るんですっけ？」

できれば欲しいなというジャックの返事にブランデーの容器と先
ほど真水を満たしたポット、もう一つカップを用意する。「タリア
嬢はやらんのかね？」という問いには酔い醒まし要員として自重し
ますと答える。

「このお子様ボディだし、ブランデーなんて畏れ多いって気がして
『向こう』でも縁がなかったからなあ」

木製プレートに並べたそれをジャックの前に置き、彼の傍らに胡
坐をかいて座り込むと大きく息をつく。「ありがとう」と礼を言い
つつジャックは面白そうにこちらを見た。

「ふむ。それが素の『君』か」

肩を回して解しながら『タリア』ではしないような大雑把な笑み
を浮かべる。

「ですね。まあ外向き且つ目上の方に対しての『僕』はこんなもん
です」

「――無理をさせたみたいで申し訳ない」

軽く頭を下げるジャックに笑って首を横に振る。

「まあムリするのは『大人』の見栄ってモンでしょう？　そこは気にしないで下さい」

「そうか、見栄か。『大人』のフリをするには見栄は確かに大事だ」ジャックは銅のカップの縁に舐めるように口を付けながら頷いた。「そう言われてみれば『俺』のここまでも見栄っぱりの結果みたいなものか」

異世界に来てからこっち、タリアは年長者としての見栄で踏ん張ってきたと言っても過言ではないと自己分析する。茫然自失といった仲間たちを前にした時、果敢な行動も止むなしと決意して実践した。

そこには最悪ダメそうならジャックさんが釘を刺してくれるだろうという読みと言うか甘えのような心算つもりもあった。

そしてそういった行動を為すにあたって『タリア』の見映えが随分と役に立ったと思い返す。ここに辿り着くまで威圧的だったり頭ごなしだったこともままあったはずだが割りと上手くことが運んだ。「それに『サーラちゃん』や『ボルトちゃん』には死んで欲しくなかったし。ま、クララさんはちよつと読めないですから僕が心配するのもおこがましいかな」

「確かにアレは読めんな」とジャックが苦笑を浮かべる。

タリアは揺れる炎を見ながら思いを巡らせる。

20歳くらいまではサバイバルやパニック物のフィクションでそういうシーンを見るたび、『誰を犠牲にしても先ずは自分だろ』という気分が圧倒的だった。

それが30代が見えてきた今ではちよつと変わり、物語の中で自分より年若い者たちの為に命を捨てる登場人物たちの心情に共感できる部分も出てきた。そんな気分をなんとなく話すとジャックは頷いてくれた。

「十分じゃないが後進へ譲ってもいいかなという気分になるくらい

は人生楽しんだかもしれん」

ジャックは真水の入った方のカップを呷るところらへ振り向いた。その眼差しは温かみに溢れている。

「しかし俺より一回りほど若いし、君はもうちょつと物分りが悪くてもいいと思うがな」

「自分、長男なもので」と自分でもよくわからない言い訳をしつつジャックの空になったカップにブランデーを注ぐ。そう言えばもうじき忘年会シーズンだったなと会社の先輩に酌をした時のことを思い出す。藤崎に敵しくも良くしてくれた彼にも、もはや会うことは適うまい。

一抹の寂しさを覚えた自分の表情に思うところあったのか、ジャックが話を振ってくれた。

「――ところでこのブランデーはどうして？」

「なんとシュークリームに使うんですよ。あっちの世界でもそうなんですかね？」

その問いに「洋菓子の香り付けに使うと聞いたことがあるな」という答えが返ってくる。

「さすが年の功ですね」

多少わざとらしく驚いてみせると軽く小突かれた。そこには少女に対するような遠慮はなく、親しい同僚や部下に対するような気安さがあった。

「クドーが死んじまったか」

小声でそう漏らすライトニングの声はアルコールが周っているせいか酷く湿っていた。バハムートが肯く。

「ああ、《虚無》シリーズの剣もドロップして大喜びしてたんだけどね」

「うん。友人間チャット^{フレチャ}ももらったよ。めちゃくちゃ自慢してやがった」

ぼんやりと眺めなっていたストーブの炉内で薪が弾ける様を何となくに見届けると、ライトニングは力なく頭を垂れた。くぐもった声がバハムートの耳に届く。

「仲間の魔法食らってオダブツとか、死んでも死に切れなかったらうなあ」

自分の右で肩を並べ、一瞬の判断の差によって全身を焼かれ事切れた同じギルメンギルド員であり友人の非業の最期を思い出す。

しかし、その死を敢えて罪と負うべき者もまた無惨な最期を遂げた。だからと言うわけでもないが、バハムートはこう答える。

「あの時はしやうがなかったんだ――」

火の番の彼らが交わす小さな声が、寝ていた自分の耳に届いてあんな悪夢を見せたのだろうかとかッコは眉をしかめながら闇を見詰めた。

また自分の頬を濡らした液体のあとにそっと指先で触れる。それはまだ冷たくなっていなかった。

9. 町の宿にて

サンミレーの入り口を護る兵士は、今朝から続く珍事に首を捻っていた。

彼が詰める北東の門から延びる道は、人の往来がさほど多くはない。その道の先には、今はもう廃棄された鉱山と当時賑わった町の遺構しかなく、利用するのはわずかばかりの冒険者と狩人だけである。

その冒険者と狩人にしろ、秋が深まり出したこの時期には利用する者もほとんどいなくなる。それが故に最近の彼の任務は更に退屈なものになっていったのだが、今日はいつもと様子が異なっていた。

その利用者が疎らなはずの道から、今日は数組もの集団が町へと入っていったのだ。

それらは例外なく奇妙な集団だった。身に付けた装具から冒険者の一行であることは辛うじて窺えたが、集団を構成する誰も彼もが残らず異様な風体をしていたのである。

『中央』の騎士もかくやといった全身鎧をまとった戦士の顔がどう見ても十代半ばの少年であったり、娼館の美姫も真っ青な薄物をまとった扇情的なエルフ女性がその手に握るのは魔術士然とした立派な杖であったりと、およそ『真っ当な』冒険者のイメージからはかけ離れていた。

十にも満たない背格好の可愛らしい獣人娘が、身の丈を遥かに越える戦斧を涼しげに担いでいるさまには驚きを禁じ得ず、兵士仲間から鉄面皮と揶揄される彼をして目を剥かせるほどであった。

その異様な集団の誰もが整った容貌を持っていたことにもまた驚かされたが、冒険者という、ある種食い詰め者たちが例外なくまとっているスレた雰囲気を感じさせないことにこそ兵士は大いに戸惑った。

冒険者たちは一様に屈託無い表情を浮かべ、ある者など笑顔でこ

ちらに手を振る陽気さすら見せて門番である彼の前を通り過ぎていった。

兵士は彼ら異様な冒険者たちが行きにこの門を通った憶えがない事を多少は不思議に思ったが、廃鉱の近傍に転移魔法の出口があるとも赴任時に聞き及んでいる。

それは滅多に利用されることがないのだが、彼らが身に帯びた装備の質からして中央より訪れた冒険者だったのだろうと、彼はそう結論付けた。

そして秋の陽もそろそろ傾き出す頃、この日最後となる旅人の一団が彼の前に現れた。

一行の先頭には年期の入った全身鎧に身を固めた四十^{しじゅう}絡みの戦士風の男と、ややキツめな美貌を持ったエルフの娘が並んでいる。エルフ娘が身に付けているのは革製の部分鎧といった趣で、その身軽そうな装いからおそらくは偵察、探索の役目を負っているのだろうと見当をつけた。

兵士の前まで来ると戦士風の男が立ち止まる。今日目にした中では至極真つ当な冒険者然とした彼はこちらに軽く会釈を寄越すと口を開いた。

「お勤めご苦労様です。こちらはサンミレーの町でよろしかったでしょうか？」

男は意外に朗らかな声で物腰低く兵士に確認した。門番の彼がその仕事を労われるなど、この平和な田舎町に配置されて初めてのことである。行き交う誰もが彼を路傍の石ほどにも気に留めたことなどついぞなく、自身もそれを無体とは感じてこなかった。

「はい、旅の方。サンミレーによるこそ」

兵士は幾らか気分を良くすると、この感じの良い戦士風の男に柄にもなく歓迎の挨拶などを口にしてみる。

「ありがとうございます。こちらは通っても？」

男は厳めしい目元に人好きのする笑顔を浮かべると、堂々とした態度でありながらもわざわざ町へ入ってもいいのかと訊ねてきた。「はい。ここら辺りは平和なものです。真に疚しい者であれば、本職のような兵士の立つ入り口を使わずさっさと町へ入ることでしょう」

サンミレーの町は開かれてほぼ半世紀の歴史を持つが、その間あたりで戦があった例がない。防備と言えば害獣避けの柵が周囲を囲っているだけである。

「なるほど、良い町のように。それでは失礼させてもらいます」

男は屈託ない笑みを深めると兵士の横を通り過ぎていった。その傍らのエルフ娘も軽く会釈して通り過ぎる。

その後が続いたのは獣人族の少女と僧衣をまとった少女だった。兵士は先ず獣人族の少女の胸元にその視線を吸い寄せられる。襟を留めていない実用一点張りな外套を押しつけて、巨大すぎる双丘が前方へと雄々しく突き出している。

（こんな胸甲、存在してるモンなんだなあ）

その規格外の業物について見惚れていると持ち主の少女と目が合った。少女は嫌がる風もなく、彼にパチリとウインクを寄越してみせる。兵士は緩んだ表情を慌てて引き締めると機械的に職務をこなす。脳裏に刻んだ手配書の人相書きと見比べ、少々惜しみながらも僧衣の少女へと視線を移した。

少女の白い衣装は地母神に仕える者たちがよく着ている装束に似通っていたため、兵士はそれが僧衣であると断じたのだが、彼女はその上に無骨な金属製の部分鎧を付けている。更にはその腰に剣帯（けんたい）を帯び、長剣すら佩（は）いていた。

旅の僧侶には野盗や害獣を撃退する為に武装している者も多い。その中でも戦闘技術を佳く修めた者は兵士並みに武器を使いこなすと言う。兵士は少女もそうなのだろうと結論付ける。

年端もいかぬ少女が大人顔負けの武装で何食わぬ顔をしているのには今日一日で随分と慣れた兵士だったが、職務の為に注視した彼

女の顔にその胸を衝かれた。

今日一日で様々に整った容貌を目にした兵士であったが、僧衣の少女の顔立ちはそのどれとも異なる雰囲気醸し出していた。

単純に顔の造作なら少女に勝る者も多かったと思ひ出す。しかし彼女の表情が作り出す、穏やかに調和が取れた可憐な容貌は兵士の心を劣情とは違う何かで奪い去った。

少女は歳に似合わぬ落ち着いた笑みで会釈すると兵士の前を通り過ぎていく。艶やかにたなびく少女の後ろ髪に、彼は思わず振り返りたくなる衝動に駆られる。兵士は懸命にその情動を抑えると、どうにか態度を取り繕って残る仕事をこなした。

「クララさんの胸、すごい見られますね」

タリアはとなりを歩むネコミ娘さんの顔を見上げながら小声で話しかけた。町に入ってから以来、通りですれ違う者、道端に居る者の区別なく男性からの熱い視線が彼女に注がれている。そう言えば町の入り口に立っていた門番の兵士も凄い勢いでこちらを見ていたなと思ひ出す。

「おっばいマイスターのわたしもこれが他人のだったらおそろく、いや多分絶対ガン見してたと思うからしょうがないにゃー」

クララは劣情溢れる男たちの視線もどこ吹く風といった調子で平然と言ひ放った。

「それもどうかと思いますけど」

タリアは苦笑いを浮かべながら前に向き直る。

予定通りサンミレーの町に着いたタリアたちは、宿を探して町の通りを進んでいた。久しぶり且つリアル化したサンミレーの地理には誰もが覚束ず、一行は何気に迷走する破目に陥っていた。

それにしても自分たちの集団は目立っているなどタリアは内心眉をしかめる。奇異の視線を向けてくる町の人々はそのほとんどが人間でエルフの姿も少ない。獣人^{ドラコ}や龍人に至っては一人として姿を見

かけることがなかった。

（《Decisive War World》^{デイスィー}の背景設定やシナリオのテキスト、もっと真面目に読んでおくべきだったなあ）

タリアは今更のように悔やむ。自分では結構目を通していたつもりだがサンミレーがどういった町だったかとも思い出せない。この地では獣人や龍人が疎まれているなどという鬱設定がありませんようにと祈りながら、通りに宿の看板が出ていないかと探し求める。

もとよりMMORPGというゲームのほとんどがそうだった様に《Decisive War World》でも『宿屋』という物の意義は極端に薄かった。

建物としてのそれが存在するゲームマップはあったがオフラインのコンピュータRPGのようにキャラクターの回復をシステムの担う側面は持たされていなかったし《Decisive War World》のキャラクターは睡眠も必要としていなかった。

そんな理由からパーティーの誰にも宿屋の所在に当てがある訳もなく、一行はしばらく町中を歩き周っている。

「門番のおっちゃんに宿屋の場所とか訊けば良かったかもねー」

あたりを見回しながらクララが呑気な声を上げた。それを背後に聞いていたジャックも肯く。

「思わぬ所でゲーム感覚が抜けてないな。簡単に見つかるものだと思う込んでいたよ」

そろそろ夕闇も迫り、通りは店仕舞いの様相を呈し始めた。道行く人も疎らになってきている。参ったなと頭を掻くジャックに、ライトニングが声を掛けた。

「こんな時間でも灯りを点けてる店があればそこがソレっぽいんじゃないか？」

なるほどと頷き、一行は再び歩き始めた。

「とりあえず宿が取れて良かったにゃ」

早速クララが鎧を脱ぎ始める。戒めを解かれた豊かな胸がユサユサと暴れるさまから視線を逸らしつつ、タリアは自分の装備を外して『インベントリ』に放り込んでいく。

「アイテムの出し入れにもすっかり慣れたみたいね」

クララの言葉に頷くと、ウンと一つ伸びをする。料金を吹っかけられた二人部屋は相応の居住性を持っていて快適だった。タリアは極めて小市民的なメンタルから多少申し訳なく思いつつ、薄汚れた衣装のまま清潔そうなベッドへうつ伏せにダイブした。そのまましばし考え事に耽る。

薄暗くなった通りを探すことしばらくして、一行はいまだ灯りをもとす一角に行き当たった。果たしてそこには酒場や宿屋といった店が軒を連ねており、一行はそこに宿を求めることとなった。

しかし冒険者を相手とするような相応の宿屋はその全てが満室となっており、空き部屋はサンミレーに定期的に訪れる裕福な商人などを対象としたお高めの旅館にしか見つけることができなかった。

最初は胡散臭げに迎えた旅館の従業員も、提示された料金を前払いしてみせるとアッサリ態度を翻した。こうして一行は男女に分かれ、それぞれ二人部屋を取ると旅装を解くことになった。

「おー、わりとまともにゃ鏡があるにゃ」

クララの嬉しそうな声を背中に聞きながら、タリアは次第にまどろみ始める。どうやら思ったよりも身体が休息を欲しているようだった。

（メシがまだだったな。一旦集まるって決めたことだしもう一踏ん張りするか）

そう考えるもののベッドの感触は離れ難い。そうやってだらだらしていると、不意に腋の下に手が回った。何かと理解する前に、そのまま小さい子供のように持ち上げられる。

「リアたん、おねんねにはまだ早いにゃ。ご飯に行くよー」

クララは軽々とタリアを肩に担ぐと、嬉しそうに部屋の扉を開けた。さすがレベル80越えの剣士は腕力が違うなあと妙な感心をし

つつ、タリアは担がれるに任せる。これはこれで存外楽で良いかもしれないとこっそり思った。

旅館の夕食は食堂で摂ることになっていた。先に待っていた仲間たちはダラリとした状態のタリアを担いで現れたクララにぎよつとした表情を浮かべたが、タリアが顔を上げて手を振ると呆れたように苦笑して見せた。

今朝方に得意の客が発ったということで、今夜の宿泊客はタリアたち一行だけだった。食堂も貸し切り状態で気兼ねなく料理に舌鼓を打つ。

とりあえずざっと見て周った限り町の様子に不穏なところもなかったことから、アルコールの摂取も解禁した。タリアはこんな状態で呑んだら速攻で居眠りしそうだなと思いつながらもその誘惑に勝てなかった。

「どうしてこうなった――」

大浴場の脱衣場で、肌着だけになったタリアは呆然と立ち尽くしていた。目の前には見目麗しい三人の女性の裸身がある。

タリアはもう一度呟く。どうしてこうなった――

宴もたけなわになった頃、旅館の従業員から浴場を終いにしたいから使うなら済ませて欲しいとの要請があった。

――お風呂がある！

その事実に行は沸いた。主に旧世界の女性陣が沸いた。そのテンションにそこはかとなく身の危険を感じたタリアは速攻で逃げを打つ。しかし技のカッコ、力のクララの連携によりその身はいとも容易く捕獲されてしまう。

「飲酒直後の入浴って危ないって話ですよ？」というタリアの必死の訴えも強かに酔った獣神の前にあつては無駄な抵抗だった。

「それがどうした、我々は《偽神》にゃ！」

クララの咆哮の如き力強い宣言の後、タリアは大浴場へと連行された。

「ホント、どうしてこうなった——」

いつもの白い装束はクララの早技によって既に奪い去られていた。裸身を惜しげもなく晒した女性陣が据わった目で獲物を見ている。

「タリアさん、往生際が悪いですよ」

三つ編みを解いたサーラちゃんも可愛いなあと孤立無援の状態から現実逃避しつつ、タリアは仕方なく肌着を脱いだ。彼女らと同じ様に全裸を晒すと皆が一様に黙り込む。

「——どうしました？」

不安を覚えて恐る恐る問い質すタリアから、舌打ちと共に三人の視線が逸らされる。

「男の妄執の産物って恐ろしいわね——」

カッコのその呟きに、タリアは途方もなく申し訳ない気分になせられた。

10. 湯煙事情

浴場は思ったより明るく清潔そうだった。大浴場などと命名されているだけあって広さも申し分ない。

お高い料金をふんだくるだけあるとタリアは満足する。

覚悟を決めてしまえば入浴は快適と言えた。湯を汲んで身体を流す。そうすると拭ぬぐいきれていなかった流血の名残りが溶け出し、漂ちなまぐさう血腥さに思わず顔をしかめる。それを洗い流そうと次々にお湯を被った。

石鹸が用意されていたのは有難かった。流石に香料まで含んではいなかったがそれなりに泡立つ。その泡を肌馴染ませるようにして全身に手を這わせるのだが、その触り心地がいちいちタリアを後ろめたい気分させる。

（こんな細っこいのにぷにぷにだなあ）

タリアは筋肉などとは無縁に見える自分の細腕を洗いながらそんな感慨に耽った。この丸つきり子供のような腕が武装した怪物を殴り飛ばす力を秘めているのだから、《偽神》というのはまさしく通常の生物とはかけ離れたシロモノなのだろう。

そんなことを考えながら全身を隈なく洗う。少々ガタが来はじめてあちらの世界の身体と違い、こちらの身体は高性能だった。しなやかな腕は柔らかさも兼ね備え、背後に回した手のひらは楽々と背中へ届く。

一通り洗い終わると泡をすすぎ落とす。泡の下から現れた、ほんのり色づく白い肌はやはり格段にきめ細かい。自分がよく知る野郎のそれと比べれば、天と地ほどの差が窺える。

視線を落とすと視界に飛び込んでくる、柔らかな曲線で構成されるお腹や太ももが我ながら眩しい。とうとう直視する羽目になったそれに頬が熱くなるのを感じる。

二つの胸は控えめにふくらんでいた。手のひらにすっかり収まる

サイズのそれはしかし、カタチとしては悪くないように思える。ふくらみの先は慎ましやかで、うっすらと色づいていた。

邪念をお湯ですすぐと木桶に伸びかけた指先が目に残まる。手のひらの先、可愛い爪は健康的な艶を持ちほんのり桜色をしていた。30年近く酷使された藤崎英臣の無骨な指先とはまるで違うそれに、タリアは改めて衝撃を受ける。

『わたし、ヒデの指って好きだよー』

『不格好だけど、とても器用で優しい指。まるでヒデ本人みたいね』
過日。そう言って笑った恋人の言葉は、藤崎にささやかだが確固たる自負をもたらしてくれた。自分の指に絡んだ彼女の指の感触と共に、その時のことは今でもありありと思い出せる。

お互いが不器用だった為にその恋は終わりを遂げた。それでも彼女の微笑みと言葉は、今もタリアの中で一つの軸となっている。少々の寂しさを覚えながら、タリアは小さな手のひらを握りしめる。

「タリアさん。身体、洗い終わりました？」

不意に掛けられた声に振り返る。いつの間にか、傍にサーラが寄って来ていた。

「どうせだから髪の毛の洗いっしませんか。こう長いと自分で洗うのも面倒だし」

少々困った表情を見せるサーラは、目元にほんのりとアルコールの余韻を残しているが他意は窺えない。これがクララ辺りなら悪戯を警戒するところだが、と悩む。

「あっちの世界じゃこんなに長く伸ばしたことなくて」

長い赤毛を指で梳かせる彼女の、少々困ったような言葉が今の自分にも当てはまると思いついたタリアは、その提案を受け入れることにした。

「えっと、サーラさんが気にならないなら」

おそろそおそろ告げるとサーラ笑顔で頷く。

「ではでは、先ずは言い出しつぺなわたしから」

サーラは石鹸を泡立てながらタリアの後ろに回ると髪を洗い始める。タリアは神妙に構え、思わず背筋を伸ばした。

最初はおそろおそろといった感じのサーラの指使いも次第にこなれていく。彼女の細くて柔らかい指先が頭皮をマッサージするように這い回るのが気持ちいい。

その心地よさにタリアは思わず目を細めながら、そう言えばあっちの世界ではそろそろ散髪しなきゃならない時期だったなと思う出す。

「痒いところはございませんか？」

ちよっと芝居がかった調子で訊ねられ、タリアは「大丈夫です、気持ちいいです」と本心から答える。

「ふふ、ちよっと楽しいです」

サーラの微妙に舌ったらずな、笑みを含んだ甘い声がうなじの近くに感じられてくすぐったい。それを意識したとたん、時折背中に当たる微かな感触や自分のお尻の両脇に触れる彼女の太ももに気づいた。

真面目に自分の髪を洗ってくれているサーラはその楽しげな雰囲気からしてどうやらその事実気づいていない。

クララの『アウトーっ!』と叫ぶ声が脳裏に蘇り、タリアは念仏を唱えるように『今はアウトじゃない、今はアウトじゃない』と繰り返して自分に言い聞かせる。

サーラの指先がタリアの伸ばした髪の方へと移っていく。丁寧な揉み洗いに彼女の生真面目さが垣間見える。その随分と時間が掛かる作業を終えると、頭頂部からお湯ですすがれた。

「ありがとうございました。それじゃ次はサーラさんの番ですね」

「はい、お願いします」

タリアは声を掛けてからサーラの髪をお湯で流した。石鹸を泡立てて指先で頭皮に馴染ませるようにして這わせる。

「痒いところがあつたら言つて下さいね？」

サーラのかたちの良い頭を洗いながら声を掛ける。「はい」とくすぐったそうに答える彼女の声に、タリアの口元も綻ぶ。確かにこれは、ちょっと楽しいかもしれない。

サーラの赤毛は細く柔らかくて触り心地も良い。その綺麗な髪が艶やかに光を照り返すさまを愛でながら無心に洗う。

しばらくその作業を続けているうちに、ふと昔のことを思い出して思わず含み笑いが漏れた。サーラが怪訝そうな声を上げる。

「どうしました？」

「いえ、うちの妹はこんなに大人しく洗わせてくれなかったなって思い出しちゃって」

サーラが黙ったのに慌てて付け加える。

「といってもうんと小さい時の話ですよ？」

しばらくしてサーラが口を開く。

「妹さんとは仲が良かったんですか？」

その言葉に嶮けんが感じられなかったことに安心して答える。

「十、離れていましたからね。それだけ離れてるとケンカもしませんでしたし可愛いばかりでした」

サーラは黙り込んでいたが、それは気まずい沈黙ではなかったので話を続ける。

「両親はわたしが大学を出るまで共働きでしたし、妹がちっちゃい頃はわたしが面倒をみることも多かったんです」

「――シスコンだったりしたんですか？」

サーラの直球な質問にちよつと笑ってしまう。

「マンガやラノベなんかのシスコン兄貴みたいになんてことはなかったと思うけどちよつと甘やかしすぎたかな」

無意識のうちにサーラの髪に鼻を近づけて、悪い匂いがしないかと確かめていた。思いがけず近づきすぎたと慌てて離れ、サーラの伸びた髪を彼女の真似をしてできるだけ丁寧に洗う。無言のままにその作業が終わる頃、サーラが呟いた。

「優しいお兄さんだったんですね」

「甘い兄貴だったのは確かです」

サーラの髪をすぎながら答える。彼女は大きく息をつくと振り返る。

「ありがとうございました」

礼を言うサーラにどういたしましてと答えると「ところで」と彼女が話題を変えた。

「わたしの背中とかお尻にタリアさんの、身体とか、が触れてたんですけど」

しまった、自分もうっかり失念してしまっていたかとタリアはつい表情に出してしまう。

「――その顔だと、わたしが洗ってた時もそうだったみたいですね」
じとつとした目つきでサーラが拗ねたように呟いた。

「黙ってるなんて、えっちなんですね」

「しっかしホント、バカみたいに盛ったもんだねえ」

湯に浮かんだクララの大きな胸にカッコが呆れたような視線を向ける。

「うん、拙者も我ながらここまでとは」

そう言いつつもクララは自分の豊か過ぎる胸をさかんにもみ倒していた。

「ちよっと、人前でヤメテよ。そういうのは一人でやんな」

たまらんとしたら自分の胸をもみ続けるクララをカッコがイヤそうに睨みつける。クララはケロっとした顔を上げた。

「確かに手触りは良いんだけど、自分のだって現実味がなくてそーゆー気分は盛り上がってにゃいよ?」

「知るか!」

カッコが跳ねてよこした湯を顔に浴びてクララが楽しそうに悲鳴を上げた。

「それにしてもあんたの肌キレイよね」

カッコがクララの頬を突きながらポツリと呟く。

「ぬふふ。獣人の女の子はモフモフを脱ぐとスゴひんれふお」
いんですよ

顎の下まで湯に浸かり、蕩けるような表情で得意げになるクララの頬をカッコが引っ張る。実によく伸びる。

「それにしたってエルフのわたしやサーラちゃんよりキレイな肌ってありえないの？ この世界のエルフって肌がきめ細かいとかそういう設定ないの？」

悔しそうに眉をしかめるカッコにサーラが真面目そうに答えた。

「そういう話はないですね。全体的に美しい種族ってありがちな解説は見たことありますが」

チツと舌打ちしたカッコにサーラは澄まし顔で告げ口する。

「そういえばタリアさんの肌もスッゴイ綺麗なんですよ。この世界だとエルフって負け組っぽいです」

カッコは湯船の対面でこちらに小さな背を向けている存在に目をやった。次の標的を見定めてニヤリと口角を上げる。

「なるほど。ところでタリアちゃん、はなはなとそんな隅っこで縮こまってるのかな？」

タリアのか細い肩がびくりと震えた。入浴の心地よさに緩んでいたクララの表情も、ピュキーンとでも擬音がしそうな勢いで狩人のそれに取って代わる。

「あの、元紳士としましては、みなさんの裸を目にするのが、タイヘン申し訳ないというか畏れ多いというか」

先ほどのサーラ相手の失態を思い出しもごもごと答えるタリアをよそに、クララはざばりと音を立てて湯船から離水、怪盗某よろしく綺麗な曲線を描いて獲物の近くに着水した。

そのまま背後からタリアのちんまりとした身体を抱きすくめる。

「元アラサー男がカマトトぶるにゃー！」

突然背中に押し付けられた弾力に、気持ち良さ半分驚き半分で混乱するタリアの耳へ「魔法使いさん候補だったかもしれませんし」というサーラの呟きが届いた。

やはりさっきのことは根に持っていたらしい。それにしても――
(サーラちゃん、君でもそんなスラング知ってるんだ。お兄さんち
よっと悲しいな)

男湯にも「リアたんマジやわらけー、うひょー!」というクララの
歓喜の叫びが木霊していた。

「向こうは楽しそうだな」

湯に浸かりながら寂しそうにライトニングが呟く。

「こういうのはお約束と言うものだ」

並んで湯に浸かるジャックがリラックスした表情で厳かに答えた。
先ほどから妙に静かなバハムートは真剣な面差しで微動だにしない。
おそらく自身の鋭敏な知覚力に意識をフル動員させているのだ
ろう。

女湯でのガールズブートークはボルトの優れた知覚にもまた届いてお
り、彼の身体に重大な異変シリブスをもたらしていた。

「ふえええん、ジャックさん、わたしの股間が」

気弱げに表情を崩したイケメンが身も世もないといった風情で迫
ってくるのは、あっちの気のないジャックにとって迷惑この上ない
話だった。

「ボルト。泣きそうなツラで迫ってくるな」

ジャックはこちらに縋りついてきそうなノリのボルトを、伸ばし
た手で煩わしげに押しやる。

「初心うぶなネンネじゃあるまいし」

何処かで聞いたようなジャックの台詞に、ボルトが黄色い声で抗
議する。

「そういうコトに慣れてたら二十歳半はたちばの女が夜に一人酒でネットゲ
なんてしてませんよお」

迫り来るボルトを懸命に阻みながら、ジャックはしらんがなと胸
の内で零した。

10. 湯煙事情（後書き）

01／11…本文の表現、意味が真逆だった語句を修正しました。
大筋に変更はありません。

11. 眠れない夜

「んー、それにしてもお風呂があるような土地柄で良かったね」

同室のサーラと部屋へ戻る途中、身体を伸ばしながらカッコは声を掛ける。

「ほんとですね。他の土地もそうだと良いんですけど」

答えるサーラの声も満足げだ。

ホカホカに温まった身体で部屋に戻ると、カッコは備え付けの鏡に向き直る。気の利いたサーラが〈光明〉の魔法を使ってくれた。

「ありがと」と短く礼を言い、じっくりとこちらでの自分の顔を観察する。部屋の明かりを担うランプは頼りないが、魔法の明かりのおかげで光量に不足はない。

浴場ではクララやタリアの肌に軽い嫉妬を覚えたが、自分のそれ也十分と言って良い美しさだろう。

あちらの世界の自分とは真逆な印象を持つ、少々キツめの美貌を撫でる。シミ一つない肌は、その感触も滑らかで、肩口まで伸ばした緑がかった銀髪もパサついた感じがしない。

ヒクヒクと動く鼻先を寄り目で見ながら感心する。

「うーん、毛穴汚れも全然ないしエルフってすごいなー。全身ピカピカだったし」

カッコは鏡に映った自分を睨みながら唸る。

「わたしたちの身体、新品みたいなものですし」

「新品？」

「ハイ、新品です。元の世界のわたしたちを「材料」にして作られたわけですから。こっちの世界のわたしたちはまさに生まれただて、新品で感じかなと」

淡々と語るサーラに「なるほどねえ」と相槌を打ってベッドに寝転ぶ。

言われてみれば思い出す。あの呑気だった世界が知覚の彼方へ去

り、この世界が傲然と姿を現す刹那の合間。カッコは自分の古い器^{うつわ}が解^{ほど}かれ、新しい器が作り出されるさまを確かに知覚した。

「――そうだったね」

大浴場でタリアを肴に散々騒いだ心地良い疲れが急速に引いていく。

思い出した。今という時間は、楽しい友人たちとの気楽な旅の一曲マではない。

見上げる天井の、魔法の光に照らし出された飾り模様がにわかには滲む。

モンスターとの殺すか殺されるかといった極限状態を何とか生き延びた。しかし半ば勢い任せに苦難を乗り越えてみれば、後に残ったのは当たり前のように臆病な自分だけだ。

「――コレがさ、神さまの粋な計らいで、死んじやったみんなはゲームオーバーなだけであっちの世界に強制送還。冒険を続けるわたしたちを悔しがりながら日常生活に逆戻り、って話だったら最高だったよね」

ギルドの仲間だったクドーをはじめ、こちらの世界と一緒に飛ばされた時の仲間たちの姿が浮かぶ。

よくよく思い出してみると、彼らのリアルでの姿なんてほとんど憶えていない。憶えていられるはずもない。思い出されるその姿は、恐怖に歪む凶相か惨たらしい死に様だけだ。

本来のカッコ――鈴木里佳子^{りかこ}はどちらかと言うと泣き虫だ。今も堰を切った様に溢れてくる陰惨で悲しい記憶に怯え、どうしようもなく泣けてくる。

「こんなのってないよ」

自分の声がひどく湿っているのが惨めで、余計泣けてくる。

「こんなのってない」

顔を覆う。湯上りで温かいはずの手のひらが、ひどく冷たく感じ

るほどに目蓋が熱くなっている。

後回しにしていた諸々の負の思いが、弛緩した心から溢れ返ってくる。

もっと泣けとばかりに、罪悪感が、喪失感が、絶望感が、悔恨が、恐怖が、怒りが、悲しみが、ぐるぐるとカッコの脳裏で渦巻く。懸命に目を逸らしてきたモノたちが、忘れるなど哄笑を上げながら己を顕示している。

——でもわたしは生き延びた。

自己憐憫に身を任せる心象風景の裏で、泣きじゃくる里佳子^{自分}を歴戦の女密偵カッコ^{スカウト}が醒めた目で見つめている。それは力強いイメージだったが、今の里佳子を救えるほどの安らぎはもたらさなかった。

嗚咽を漏らすカッコを疎ましく思いながら、サーラも床に就くことにした。「明かり消しますね」と一応声を掛けるが返事を待たず、部屋に備え付けのランプを消し「光明」の魔法をキャンセルする。

カッコの泣き声に、自分がそうだった時のことを思い出し耳を塞ぎたくなる。つくづく自分は幸運だったとサーラは思い知らされる。泣けば慰めてくれる優しい手があった。仲間の誰も欠けることなく、自分の不運にのみ感情をぶつけられる。

ベッドに沈みながら暗闇に目を凝らす。そうすると様々な思考が頭の中を巡り始める。

かつての安穩とした世界は遠い。家族と再会することは途方もなく難しく、元の自分を取り戻すのは不可能に近いという事実。サーラの頭の中にしっかりと刻み込まれている。

その理不尽さに怒りと悲しみは尽きないが、この世界で生きていかなければならないという現実が厳然と目の前に横たわっている。

でも行動の指針は仲間たちが決めてくれる。わたしはそれに従え

ばいい——自然とそう考えて安堵している自分に、サーラは情けなく思いながらぎゅっと目を瞑った。

（だって仕方ないじゃない。わたしはほんとに子供なんだから）
ゲームをしている時は仲間たちとも対等だと思っていた。仲間たちのリアルの年齢が自分より上だというのは何となく察せられていたが、それは隔意になるような認識ではなかった。ネットゲームでなら色んな年代の人と遊べるんだなと漠然と感じていただけだ。

時折雑談のネタなどで多少の齟齬を感じないではなかったが、サーラの仲間たちはそれを上手く薄めてくれる優しい人たちばかりだった。

しかし生身を得て『現実』に放り出されてみれば、その認識が間違っていたと思ひ知らされた。

ゲームの中でなら腕利きの中堅魔術士として頼りにされた自分も、その場面から少しでも離れればあたりまえに被保護者となるしかない。

《Decisive War World》は自分の他にも中高生プレイヤーは多かったはずだ。彼らは今どういう心境にいるのだろうか。

訳もわからず死んでいった子たちも中にはいるだろうし、あまた数多のフィクションで見た登場人物たちのように逞しく現実に立ち向かっている子たちもいるだろう。

そんな自分の想像の中の、見も知らぬプレイヤーたちに対して抱くこの感情は優越感だろうか。そんな子たちと比べれば、自分は随分とマシであると。

寝返りを打つ。カッコはまだ泣いているようだ。さすがにこのままだと自分もネガティブな気持ちに引っ張られそうで鬱陶しい。

この部屋割りは元男性だったタリアとそれを気にしそうにないクララ、二人の気遣いだったと分かるがこうなると恨めしい。あの二人のどちらかとならこんな思いに煩わされることもなかったはずだ。タリアのことを思い出す。あの時はすっかり騙されていたという

驚きやほんのちょっとした恨み、羞恥心から拗ねてみせたが、彼女の元の世界の性別が男性だったことなど、サーラにとっては許せないほどの話ではなかった。

ゲーム時代のタリアは『性』を感じさせるハラスメントは勿論、冗談でもそういったことを匂わせない、どちらかというと潔癖なサーラにとって接しやすい遊び相手だった。

リアル友達とはなかなか合わない趣味の傾向も一致していて、ゲームキャラの外見と違い自分より年上の雰囲気を持っていたタリアの話の参考にするようになっていた。

（――十歳違いなら、妹さんは大学一、二年生くらいか）

自分がタリアに抱いていたイメージと一致する。高校二年生の自分より二つ三つ先輩のしっかりした女性。それがタリアに対する漠然とした人物像だった。

（――そうだ、〈健やかなる心^{サニティ}〉の魔法で）

タリアを思い出したことによりカッコを落ち着かせる方法に思い当たる。

「ちよつと出てきますね」

カッコに声を掛け、昔使っていた汚れていないローブをインベントリから引き出す。ベッドから降りるとそれを羽織り、サーラは部屋の外に出る。

タリアとクララの部屋の前には先客が居た。ライトニングとボルトはこちらに気づくとちよつとばかり目を瞠った。

「？　こんばんは。お二人ともどうされたんですか？」

「あ、ああ。ちよいと寝付けねえモンだからよ。タリアたんに酒を強^{ねだ}請りに来たって寸法だ」

ライトニングはバツが悪そうに頬を掻く。

「こつちも同じ。流石に色々考えちゃってさ。ジャックさんは凄^{すご}いよ。アツサリ眠っちゃって」

ボルトは眼差しを和ませると顎に手をやって芝居じみた仕草で唸った。

「それにしても髪を下ろしたサーラちゃんも新鮮で可愛いね」

つくづくといった調子で「いや、ホント可愛いな」と繰り返され、隣のライトニングもしきりに頷く。気の利いた返し方もできず思わず俯いてしまう。こういう場面でアッサリとかわせないリアルな自分がかしい。

その時絶妙なタイミングで部屋の扉が開き、訝しそうな表情のクララが顔を出した。

「おや。話し声がすると思ったらどうしたにゃ？」

「おう、寝てなくて助かったぜ。タリアさんに頼みがあるんだ。ズバリ寝酒が欲しい」

ライトニングがキリリと表情を引き締める。ボルトが「こっちも」と告げるのを確認して、クララがサーラの方へ小首を傾げる。「そちの用はなに？」といった仕草にカッコの状況を伝える。

「あー、カッコちゃんやっぱダメだったか」

「え？」

クララの言葉に思わず問い返すが、彼女は「ちょっと待つにゃ」と言い残し部屋へ戻る。ほどなく今度はタリアが出てきた。

「さつきぶりです」

お風呂場で散々弄られた名残をおくびにも出さず、隙のない佇まいで出てきた彼女の姿に安心感を覚える。

「ライトニングさんとボルトさんはちょっと待って下さい。先にカッコさんの方をみましょう」

おうと答えた男性陣二人の心配そうな顔に見送られ、サーラはタリアを連れて自分の部屋へと引き返す。

「サーラさん、すみません。カッコさんもサーラさんが一緒なら見栄でもちよつとは頑張れるかなと思ったんですが」

小声で言われ、足を止めてしまう。クララも同じようなことを言っていたはずだ。タリアはサーラが立ち止まったのに振り返るとホロ苦い笑みを浮かべた。

「カッコさんがギリギリだったのは分かってたんです。なにか無理

にはしゃいでるみたいで」

タリアは「お風呂場でのカッコさん、ちょっとキャラ違ってませんでした？」と小首を傾げて見せる。

「でもわたしたち相手じゃ素直に弱音も吐いてくれそうになかったし」

まじまじとタリアを見詰める。いつもと違うこざっぱりした装束は慌てて来たような隙が見当たらず、洗いたての髪にも寝乱れた様子は窺えない。

（このひとはもしもの時のために待っててくれたんだ――）

サーラは目の前の、小さな少女の姿をした保護者に思わず訊ねていた。食堂に揃う前、クララに担がれてぐったりした様子だった彼女の姿を思い出す。

「どうしてこんなに面倒見てくれるんですか」

自分の声が硬いのがわかる。タリアだって休みたいはずだ。それなのにすっかり彼女に頼りきっている自分が恥ずかしくて、苦し紛れに吐いた言葉はそんな言いがかりめいた問いかけだった。

タリアが困った様に眉を寄せる。

「自分でもよくわからないんですけど。できることはしたいかなって」

「できること？」と繰り返す自分にタリアが頷く。

「わたしがしてることなんて面倒臭がらなければ大したことじゃないんですよ」

反論しようとするサーラにタリアが畳み掛ける。

「それにこれは僕の自己満足でもあるから。『タリア』っていうのはそういう女の子なんだよ」

タリアはサーラの頭を軽く撫でると再び歩き出した。その背を見ながら、サーラはとても大きな手のひらに撫でられたような錯覚に戸惑う。彼女の姿が扉の奥に消えるまで、サーラはボンヤリと立ち尽くした。

「カッコさんの具合、どうだった？」

一瞬、部屋から出てきた人物が自分だったことに驚いたボルトが心配そうに口を開いた。

「とりあえずタリアさんの〈ヘサニティ〉で落ち着きました。漏れ聞いた感じだと、ここに来て気が緩んだせいで色々思い出したみたいですね」

サーラはそう答えるとアルコールの入った瓶を取り出してみせる。

「一通り預かってきました。お水ならわたしも作れますし」

「悪いね。それじゃ俺とバハムートの部屋で呑むか」

ライトニングの提案にボルトが頷く。

歩き出した二人の後を追う。途中クララの部屋をノックして後でお邪魔することを告げる。「おっさんたちにセクハラされる前に戻つといいで」と笑うクララに承知しましたと真面目に答えると「俺たちは紳士だ」と抗議の声が上がる。

悲しそうに顔を歪めているライトニングに、サーラは笑ってみせた。

「もちろん冗談ですから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7517z/>

決戦世界のタリア

2012年1月12日23時51分発行